

2017

研究紀要

第32号



秀光中等教育学校
仙台育英学園高等学校

巻 頭 言

秀 光 中 等 教 育 学 校
仙 台 育 英 学 園 高 等 学 校
校 長 加 藤 雄 彦

平成28年度は学園創立111周年、「トリプル1」の年でした。この記念すべき年に、体育会陸上競技部男女駅伝チームとラグビー部がそれぞれ都大路と花園の全国大会に出場し、文化会書道部が「書の甲子園」と称される国際高校生選抜書展において東北地区団体優勝を遂げてくれました。このことは「部活動のトリプル1」として平成28年12月14日付けの毎日新聞学園特集号で紹介したところです。さらに、東北大会で優勝した硬式野球部新チームが選抜甲子園大会に出場することが正式に決まりました。ジンクスというか、これまでなかなか実現が難しかったことなのですが、この春の甲子園大会の開会式では本校の書道部員が書いた校名プラカードを掲げて入場行進をすることになりました。

それから外国語コースの三年生3名が国際バカロレア（IB）のディプロマプログラム（DP）の最終試験に合格しました。これは全国で初めてのことで、東北唯一のIB認定校として誇るに足る快挙です。特別進学コースの探究講座の実践とも通じるのですが、この取り組みは大学入試改革を含めた高等学校学習指導要領の改訂の方向性を先取りした成果と考えています。大学の一般受験はこれからですが、推薦入試やAO入試の成果も着実に積みあがっています。文武両道にわたる生徒諸君の日頃の努力と指導に当たられた先生方のご努力に心から敬意を表します。同時に、有為な人材を育成するための新しい取り組みを不断に続けることが大切ですから、私としては改めて身の引き締まる思いがしているところです。

さて、平成28年度は内外で大きな出来事がたくさん起こりました。5月に伊勢志摩サミットのあと広島平和記念公園を訪れたオバマ大統領の広島演説がありました。その翌月には大方の予想を裏切ってブレクジット、イギリスのEU離脱を決めた国民投票がありました。この背景にはヨーロッパの移民問題があり、さらに中東の混乱がありました。そして、11月にはブレクジット以上の衝撃でしたが、アメリカ大統領選挙でこれも大方の予想を裏切ってトランプ候補が勝利しました。TPPに代表されるグローバリズムの方向性に異議申し立てがなされ、直前に発効した地球温暖化対策の新しい枠組みを定めたパリ協定もすっかり霞んでしまいました。

保護主義的な通商政策や国家間の対立を煽るような風潮が国際社会を覆い、先行きが不透明で不確かなものになりました。これがわが国にどのような影響を与え、私たちの生活にどのような影響を与えることになるのかは未だはっきりしませんが、将来に向かうあらゆる行動に伴うリスクが拡大している社会であることは間違いありません。今年度の職員研修にはリスクマネジメントについて慶應義塾大学の大林先生に講義をしていただきました。その謝辞でも述べたことですが、仙台育英学園という教育機関のリスクの影響度や頻度はそこに所属する職員の意識によるという再帰的な性格を持っています。ですから、このことを自覚して周囲の変化を的確に反映し、リスクの洗い直しを私たちは続けていかなければなりません。ここでも教職員の不断の自己研鑽が求められるところです。

以上、内外の変化に対応した本校教育活動の現況がこの研究紀要にまとめられています。ご高覧の上、本校のよりよい教育活動のために忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

研究紀要32号

巻 頭 言	加藤 雄彦
-------------	-------

トピック

探究講座TTTチャレンジの成果	特別進学コース	神谷 章嗣	 1
孔子課堂の可能性	外国語コース	鈴木 茂幸	 7
国際バカロレア受講生徒の学術的論文	外国語コース	石田真理子	 13

I 研究報告

(1) 文芸部の活動について	特別進学コース	下田真奈美	 23
(2) 英進進学コース英語科研究報告.....	英進進学コース	熊坂 治平	 27
(3) 国際バカロレアと日本のカリキュラム：2つは両立できるのか	秀光中等教育学校	ケリー・ウィンター 笠原 千尋	 31
(4) IB生物におけるアクティブ・ラーニングの事例研究	外国語コース	ジェームス・ドクターマン 笠原 千尋	 36

II 平成28年度 研修報告

(1) 特別進学コース 関西校外研修旅行	齋藤 美咲	 43
(2) 外国語コース ハワイ研修報告	赤間 ゆき	 48
(3) 英進進学コース 沖縄研修報告	佐々木正人	 57
(4) フレックス・技能開発コース 沖縄研修旅行（フレックスコース女子）..... 沖縄研修旅行（技能開発コース）	杉田 愛 小野 仁也	 66 71
(5) 秀光中等教育学校 NYSA 2016 実施報告	伊藤 沙絵	 75
ハワイ研修報告	倉橋 真司	 81
(6) 職員研修報告	多賀 努	 90

III その他

(1) 広域通信制課程ILC青森校の状況報告	ILC青森所長	三笠 勝彦	 104
(2) 職業調査とジョブミーティング —12職種の職業に関する調査とその発表活動を通して—	情報科学コース	志賀 貞昭	 115
(3) 公文式学習（国語）実践の成果	フレックスコース	島倉 尚子	 119

総目録（第1～31号）

編 集 後 記

特別進学コース 探究講座TTTチャレンジについて

神谷 章嗣

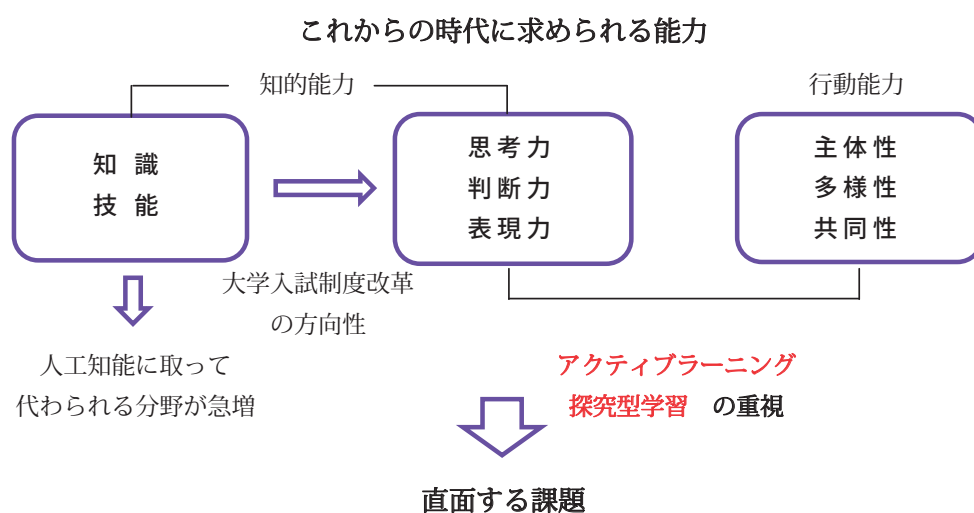
I はじめに

近年、社会で求められている力は教科個別の問題に正解する知識・技能だけではなく、それらの知識を社会課題に柔軟に対応させ、解決策を模索する思考力・判断力・表現力、そして多様な人々の考えを理解し、共同しながら主体的に解決する力である。

まさに現在進んでいる教育改革においても、上記のような社会で求められている資質や能力の変化に対応するための改革の方向性が議論され、既に個別大学入試においても「思考力・判断力・表現力」を問う問題が出題され、今後の入試でも出題の割合は多くなることが予想される。

こうした社会情勢の変化に対応して、特別進学コースでも探究講座として「TTTチャレンジ」を実践したので、以下に本年度の実施内容や反省点等を取りまとめて報告する。

II TTTチャレンジとは



○2020 大学入試制度改革（大学入学希望者学力評価テスト）および前倒しの動きへの対策

⇒ 求められる力

- ◇情報・データの分析・要約・解釈
- ◇情報や論文から推量・論理的思考
- ◇情報を構造化し構成・展開を工夫して表現

現行大学入試での課題

- ⇒ ◇東北大AOⅡ等、国公立大AO入試への対応力不足
- ◇志望進路の研究不足と必要な学力の不足

○小論文指導の在り方

⇒ 文章表現力以前の問題として

- ◇基礎的知識・読書不足
- ◇文章・データ読解力不足
- ◇課題意識の持ち方・深め方

Topic（題材） / Thinking（思考） / Treasure（蓄積）

「題材を探し、思考し、蓄積していく」ということを目的とするので「TTTチャレンジ」と称し、特進1学年を中心にグループ活動やアクティブラーニングを通して探究型学習を行った。

Ⅲ TTTチャレンジの流れ

1 関心ジャンル選定

- ① HUMANITY（人文科学分野：哲学、心理、歴史、地理など）
- ② SOCIAL SCIENCE（社会科学分野：政治、経済、社会、法律、教育など）
- ③ NATURAL SCIENCE（自然科学分野：物理、化学、生物、地球物理など）
- ④ ENGINEERING（工学分野：機械、建築・土木、情報、精密機械など）
- ⑤ MEDICAL SCIENCE（医療看護分野：医療、歯科、薬剤、看護など）
- ⑥ ART & CULTURE（文化芸術分野：文学、音楽、美術、映像など）

2 グループ編成（1グループ6人前後）・グループテーマ設定

3 活動プランニング

4 調査・研究

- 総合的な学習の時間、LHR、夏期講習期間、家庭学習日等の時間活用
- サイエンスコラボ、オープンキャンパス、医療・看護体験、専門家講話などともリンク
- 書物やWebでの探究、現地調査・見学など

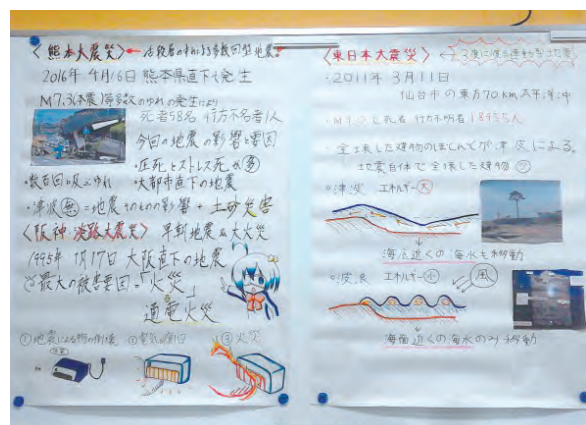
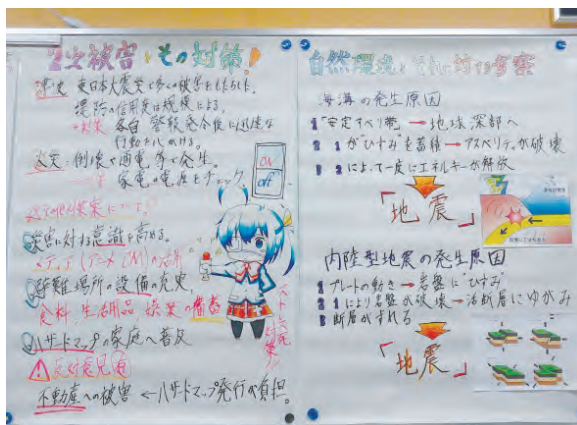
5 考察・まとめ

6 グループ発表（パワーポイント・プレゼンテーション）、2000字個人論文提出

Ⅳ 実施概要

【GW課題】5月

調べ学習の足掛かりとして、GW休暇を利用し科学館や博物館、美術館等に行き、展示物について見聞きしたことを調べてまとめた。中には自分たちでポスターを作成し、発表する生徒達もいた。



【中間発表会】7月

興味ある分野ごとにグループを結成し、協力して学問や大学、職業など様々な関心のある事柄を調べてきた成果の一部を中間発表という形で発表会を行なった。それぞれのグループ毎に、分かり易く、興味を引き付けられるような発表方法を模索し、中にはPCや動画を用いて発表するグループもあり、創意工夫して取り組んでいた。





【東北大学オープンキャンパス】7月

東北でも最大の規模を誇る東北大学オープンキャンパスにTTT - Challengeの一環として参加した。グループ毎に集合時間や受講講義、ルートなど事前に話し合い、相談しながらスケジュールを決めた。当日は曇天ながらも時間を守り、地下鉄やシャトルバスを利用し最先端の研究や、大学の雰囲気を楽しみ、大学進学への意欲がより一層高まった貴重な体験であった。

【夢ナビプログラム】10月

夢ナビプログラムは、高校生に学問の魅力を伝える仕組みとして、関心事からつながる様々な学問を一人ひとりにカスタマイズして紹介する取り組みである。生徒の関心事をキーワード化した「関心ワード」とマッチングした「夢ナビ講義シート」、大学進学・学問発見のための国公私立大学の合同進学ガイダンス「夢ナビライブ」により、自分に興味のある学問や研究、各大学のことについての理解を深めた。

図 夢ナビ講義シート


講義No.08097 FP340012 -I-9 2 / 10

夢ナビ講義シート
茨城大学の先生からのメッセージ

あなたの関心ワード「栄養」に対する
農学部 地域環境科学科 の先生からの夢ナビ講義です。

「持続可能な開発」が世界の食糧問題解決のカギになる

解決しない世界の食糧問題

1996年の世界食糧サミットで、当時8億人とされた栄養不良人口を2015年までに半減すると宣言されました。しかしFAO（国連食糧農業機関）によると2012年時点の栄養不良人口は推計約8.7億人です。増えたのはなぜでしょうか？ 栄養不良人口が集中する発展途上国の多くは、熱帯圏、乾燥地域など自然条件の厳しい土地なので食糧生産が困難です。また政治が不安定で、外資が入ってこないため経済が発展しにくく、さらに大きな要因として発展途上国には2%を超える高い人口増加率の国があります。人口増加率を上回るテンポで食糧を増産するのが根本的解決ですが、追いつかないため栄養不良人口が増えるのです。

先進国の支援の状況

発展途上国の食糧問題の解決には、先進国の支援が必要です。一つのやり方は、食糧援助という先進国がお金を出し食糧をマーケットから買い、栄養不良状態の人たちに直接分配する方法です。世界食糧計画（WFP）によるとそれには年間50億ドルの資金が必要なのに集まりません。先進国が自国の農業保護に使うお金の合計は30億ドルと言われ、それを削減すればいいのにしないのが現状です。ほかのやり方として、食糧生産に必要な技術や資本を援助する方法があります。しかし東南アジア沿岸では、外資が入りエビ養殖で利益を追求するために、マングローブ林を伐採し、使えなくなった養殖池の放棄を繰り返したため、生態系が崩れ再生不可能なところまでできています。

持続可能な開発で国を豊かに

持続可能な開発（sustainable development）という言葉を知っていますか？ 今の自分たちの世代だけでなく子どもや孫の世代のニーズを考えて、持続できる開発を行うということです。外資による乱開発ではなく、地元の人々が中心になって地域にある資源をうまく組み合わせるものを作り雇用も生み出す、そんな持続可能な開発で国を豊かにしていくのが理想なのです。



この講義の学問分野 ▶ ② 環境学 / ④ 農業経済学

私が回答しました！ 茨城大学 農学部 地域環境科学科 教授 中川 光弘 先生



農学は「食」だけでなく、「環境」や「生命」などいろいろな分野からのアプローチが可能な学問です。農学を勉強すれば、自然システム、生命システムが見えてきますし、自然の摂理と調和した生き方や社会システムのつくり方も見えてきます。次世代を視野に入れた「持続可能な社会」の実現に向けて、茨城大学ではアジア・アフリカ圏からの留学生も含めグローバルな視点で取り組んでいます。食や環境、生命、健康といったテーマに興味があるならぜひ一緒に研究をしていきましょう。

茨城大学に興味を持ったら
(茨城県) (国立)

茨城大学は、人文、教育、理、工、農の5学部からなる中堅の地方総合大学です。校地は水戸・日立・阿見の3地区に分かれており、各キャンパスとも学生を中心とした環境づくりを進め、教育研究施設の充実を図っています。幅広い教養教育と高度の専門教育により専門家として自立できる人材を育成するため、学部・大学院にて多様な学習の場を用意し、各分野で世界を先導する研究活動を推進しています。

興味があれば 次のアクション！

下のバーコードから、先生の顔を見たり、この大学の資料を請求できるよ！



スマホから資料の取次を申し込めよう！

スマホで検索する

この講義を閲覧したページ 印刷・複製を禁じます。

【2000字論文】1月

将来の進路志望を単なる夢とせず実現への着実なプランニング及び実践につなげるため、読書を通じて希望する職業への理解や目的意識を深める。併せて、その職業に携わろうとする動機・理由を深く考察することで、志望大学・学部への進学意識の明確化を図ることを目的に、自らの進路展望について2000字の論文を作成。関連図書を3冊設定し、自分の志望する分野に対しての現状、知識等を充実させた。

記述内容例1 必要とされる医師

テーマ	必要とされる医師	志望職業	医師	志望	第一志望大学・学部 千葉大学医学部	第二志望大学・学部 東北大学医学部
-----	----------	------	----	----	----------------------	----------------------

私は大学の医学部に進学し、6年間で医師国家試験合格を見合う	10	20	30
学力、医師として働く上で必要な対応力や行動力を養い、患者さん			
に信頼される医師になりたいと考えています。なぜなら2025年			
に超高齢化社会が到来されると言われている日本において、将来的			
にも多くの医療従事者が必要なのに対し、現時点で医療現場で中心			
的な存在とも言える医師の人手不足が深刻化しているからです。し			
かし人手不足と言えども、ただ単に医師が増えるだけでは医療現場			
の充実には繋がりにません。では、どのような医師が医療現場で必要			
とされるのでしょうか。			
私が医師を目指したのはまだ幼い頃でした。喘息を患っていた私は			
何度も通院し、ひどいときは入院することもありました。幼か、			

記述内容例2 裁判と裁判官

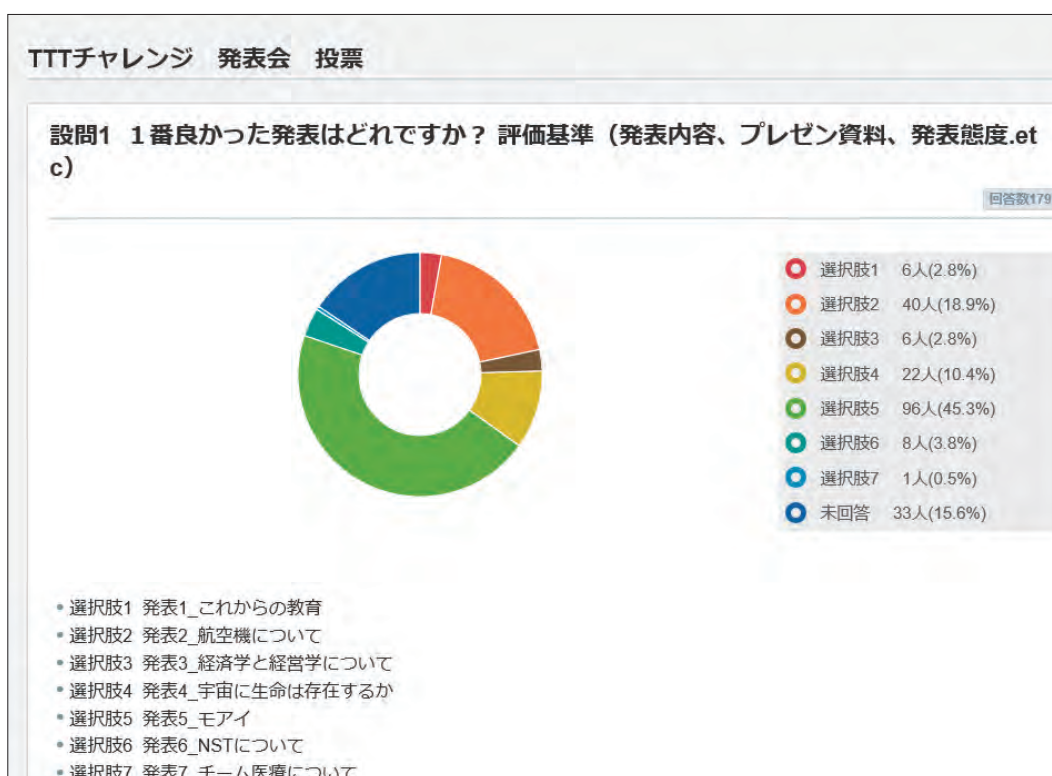
テーマ	裁判と裁判官	志望職業	裁判官	志望	第一志望大学・学部 東北大学法学部	第二志望大学・学部 北海道大学法学部
-----	--------	------	-----	----	----------------------	-----------------------

私は国家公務員となり、法に関わる仕事、特に裁判官になりたい	10	20	30
と考えています。法は私たちの生活を保障し、自由を守ってくれる			
ものです。その法に基づき行われるのが裁判です。裁判官は、双方			
の主張を聴き、第三者として法に基づいて公正な判決を下すのが役			
割で、私はその役割に強い魅力を感じました。他人の人生を左右す			
ることもあるため責任は重いですが、その分やりがいがある仕事だ			
と思います。この夢に一步近づくために、私は今回大きく分けて			
裁判と裁判官についての二つを調べました。			
まず、裁判についてです。裁判とは、そこで争っている人たちに			
とっては、自分の権利を実現する、あるいは守るための手段です。			
社会から目を付け、職務を異なす使わさずと観望し、それを守り実現			

【発表会】3月（分科会発表3月9日、全体発表3月16日）

全グループにPCのpowerpointの使用を義務づけ、5分～10分で今まで調べてきた成果の一部を各分科クラスで発表し、その中でも一番良い発表をしたグループが後日ゼルコバホールで1学年全員を対象に発表した。各グループが放課後の限られた時間の中でアニメーションや実験で実演するなど、工夫された完成度の高いプレゼンを作成していた。評価はclassiアンケート機能を用いた投票により最優秀賞と優良賞を決定し、表彰した。

ほとんどのグループは発表スピーチの練習不足が否めず、今回の発表を通じて情報を表現する能力を養っていく必要性を実感したようであった。



V 実践の考察、今後の課題

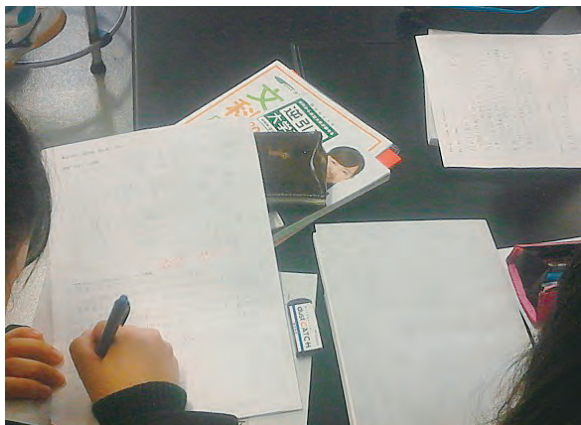
この1年間を通して「TTTチャレンジ」を実践し、3月の発表も無事に終えて諸先生方からも高い評価を頂き、一応目的は達したと思われる。また次年度は今回の活動をさらに発展させ、英語での発表を予定している。しかし同時に様々な課題や改善点も見えてきたので、箇条書きで報告する。

課題・改善点

- ・教員の指導や熱意により、生徒の取り組み方が違ってくる。
- ・文化祭や合唱コンクール、放課後講習、模試があるので探究活動する時間がとりにくい。
- ・途中の進路変更により、自分の進路とは異なるジャンルを調べている生徒がいた。
- ・各グループが集まって活動する場所が確保しにくい。 等

以上の事から、今後は講習や行事と探究活動の時間を見直し、また教員の力量も問われるので、学校全体での推進体制を整え、研修などを通じて具体的な実践方法や指導ノウハウなど共有していく必要があると思われる。

最後になりましたが、加藤雄彦理事長・校長先生には十分な教育環境を整えて頂き、心から感謝申し上げます。また、千田芳文副校長先生や結城昇教頭先生はじめ諸先生方にも常日頃たくさんのご支援、ご協力を頂き感謝申し上げます、結びとさせていただきます。



仙台育英孔子課堂の可能性

外国語コース 孔子課堂室長 鈴木 茂幸

本年5月の本校での協定書調印及び銘板披露から約半年が経過しましたが、仙台育英孔子課堂では、これまで多くの行事・事業に参加・協力という形で関わって来ましたが、11月末には中国人留学生と共に、提携校である北京航空航天大学より中国語教師として劉 曉春先生が赴任されました。劉先生の指導を貰いながら、今後の孔子課堂の活動計画等について、互いに知恵を出し合い、生徒たちにとって成果のあがる活動を検討してゆきたいと考えています。これまでに実施された行事・事業について、また今後予定されるものについて、ご報告致します。

孔子課堂協定書調印及び銘板披露除幕式

平成28年5月12日（木）

多賀城校舎サウスウィング中講義室にて本校外国語コース生徒、そして中華人民共和国政府並びに大学教育関係者、及び在仙企業の皆様ご臨席のもと、孔子課堂協定書調印及び銘板披露除幕式が、厳粛な内にも華やかに挙行されました。



平成28年6月10日（金）

本校での、今後の孔子課堂活動のための計画立案、実施内容、予算だて等を伺いました。工学院大学孔子学院では、「中国書法」「水墨画」「篆刻」「香堂」「中国茶の楽しみ方」等の講座、「人物中国史」「シルクロードを行く」をテーマにした講演、「中国語スピーチコンテスト」「サマーキャンプin北京」等、様々な取り組みが実践されており、大変参考になる訪問となりました。



2016 仙台・中国映画週間

平成28年9月20日（火）～22日（木）

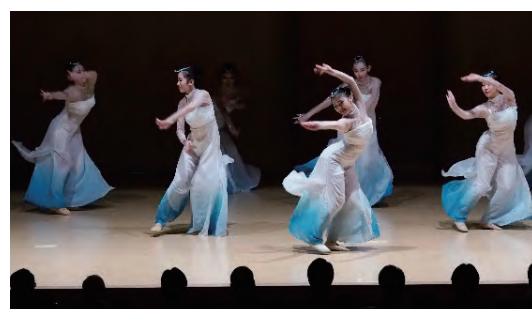
日中映画祭実行委員会主催で、「魯迅生誕135周年記念・東日本大震災5周年復興行事」をテーマに、せんだいメディアテイクにて開催され、本校は特別協力という形で参加しました。李 櫻監督による国際交流シンポジウム「日中間の視点の違いを理解する」では、日中間の相互理解を深める取り組みが披露され、また、感動的なストーリーの中国映画「真愛」が上映されました。



中国・広東外語外貿大学学生芸術団日本公演

平成28年10月19日（水）

仙台育英孔子課堂では札幌大学孔子学院設立10周年を記念し、共同で広東外語外貿大学学生芸術団を招き、仙台公演を宮城野校舎ゼルコバホールにて開催しました。ご来賓の皆様、教職員、生徒達の見守る中、普段見ることの出来ない中国伝統楽器や民族楽器の演奏、中国各民族の舞蹈や民謡、武術演武等、卓越した演目が披露され観客を魅了しました。



中国・広東外語外貿大学 学生芸術団 日本公演

感動をすべての人へ。

札幌大学孔子学院、武蔵野大学孔子学院及び仙台育英学園孔子課堂は、札幌大学孔子学院設立10周年を記念し、各機関のご協力を頂いて、中国の芸術コンテストで数多くの賞を獲得している広東外語外貿大学学生芸術団を招き、日本公演を行います。
中国伝統楽器や民族楽器の演奏、中国各民族の舞踊や民謡、武術演武など、卓越した演目で観客を魅了します。

入場無料

■公開日程

10月15日（土）・16日（日）
【札幌公演】札幌大学プレアホール
開場 13:30 開演 14:00
後援／北海道、札幌市

10月17日（月）
【北海道倶知安公演】倶知安町公民館
開場 17:30 開演 18:00
後援／北海道

10月19日（水）
【仙台公演】仙台育英学園 宮城野校舎 ゼルコバホール
開場 14:00 開演 14:30

10月24日（月）
【東京公演】武蔵野大学
武蔵野キャンパス（国東京前）5号館グリーンホール
開場 10:00 開演 10:30
後援／中華人民共和國駐日本大使館教育部、西東京市日中友好協会

※各会場とも事前申し込み不要、当日会場の定員までご入場いただけます。

主催 札幌大学孔子学院
札幌市豊平区西園3番7丁目3-1
TEL:011-882-9754
<http://www.sapporo-koishi.jp/>
武蔵野大学孔子学院
東京都江東区有明3-3-3
武蔵野大学有明キャンパス
TEL:03-5530-7798
<http://www.musashino-u.ac.jp/koishi/>
仙台育英学園孔子課堂
仙台市宮城野区二丁目4-1
TEL:222-258-4141

後援 中国・孔子学院総部
／国家漢弁



日本孔子学院協議会総会（工学院大学）

平成28年10月21日（金）～22（土）

午前に「孔子学院事業の成果と問題点—孔子学院の質的発展」及び「HSK（中国政府公認中国語試験）の展開と問題点」を議題として発表がなされました。また午後には「孔子学院事業の展望と日本孔子学院に期待するもの」をテーマに中国大使館教育部代表が講演を行いました。その後、孔子学院成果発表、工学院大学孔子学院長の総括、漢弁代表感想発言と続き、閉会しました。



工学院大学孔子学院長西園寺先生を囲んで

桜美林大学孔子学院10周年記念式典（多摩アカデミーヒルズ） 平成28年10月23日（日）



開幕式での関係各位の挨拶ののち、事業報告「桜美林大学孔子学院10周年のあゆみ」が孔子学院長より発表されました。続いて日中協会理事長より「日中の未来へのメッセージ」をテーマに基調講演が行われました。日中関係は好き嫌いの感情論ではなく、重要か必要かという理性論で判断することが大切という内容でした。午後には、日中5大学長フォーラム、「今後の大学における孔子学院の役割」、日中5大学パネリストによる「中国語・中国語教育学者フォーラム」が行われ、教育に対して情熱のある先生、学生から信頼される先生が大いに求められる、とする討論行われました。最後に、中国技芸報告会として中国歌中、二胡演奏、京劇が披露され閉会しました。

北京航空航天大学より中国語教師として劉 曉春先生が赴任 平成28年11月30日（水）



本年11月に北京航空航天大学より中国語教師として赴任された劉曉春先生は、赴任から僅かな期間で、本校の教職員そして生徒達とも良好なコミュニケーションを図り、精力的に中国語の学習指導を進めていただいております。また日本語学習にも積極的に取り組んでいます。

宮城華僑華人女性聯誼會創立大会

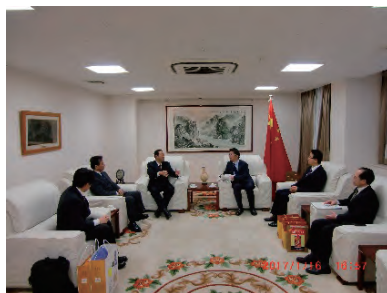
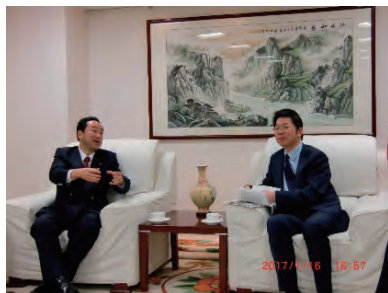
平成29年1月8日（日）

県内在住の華僑華人女性の友好交流を深め、日本社会の各分野での学習サポート、民間団体や他の外国人との交流や協力、日中関係に貢献することを目指して結成されました。

顧問役員紹介、活動計画紹介ののち、中国舞踊・モンゴルの歌・日本舞踊・独唱・チャイナドレスショーが披露されました。



新潟総領事館訪問 平成29年1月16日(月)～17日(火)



本校孔子課堂設立までのご尽力に対するお礼と今後の協力体制の依頼を目的に訪問させていただきました。

校内での中国春節を迎えるイベント 平成29年1月18日(水)

中国人留学生と中国語選択者との交流親睦と、中国伝統文化を知る「中国春節パーティー」が開かれ、クイズ、書道、羽蹴り、歌、餃子試食と大いに楽しみました。



北京航空航天大学及び工学院大学孔子学院関係者来校 平成29年2月21日(火)～23日(木)

黄海軍、北京航空航天大学副学長先生はじめ6名の先生方が本校を訪問されました。特に黄先生には「北航大学 魅力あふれる世界へ」と題して、北航大学の魅力についてゼルコバホールで本校生に講演されました。その後、文豪「鲁迅」の記念碑、東北大学鲁迅階段教室、資料館等を見学、実りある研修となりました。



工学院大学孔子学院訪問 平成29年2月24日(金)

理事会での本校孔子課堂規程及び来年度の活動計画、研修内容の進め方等、留意点についてご指導をいただきました。



<今後の予定等>

仙台育英孔子課堂中国語研修、北京航空航天大学附属実験高等学校訪問
平成29年3月26日(日)～4月2日(日)
外国語コース中国語選択生徒12名参加予定

北京航空航天大学附属実験高等学校の仙台育英高校訪問

国際バカロレア受講生徒の学術的論文

外国語コース 石田真理子

1. はじめに

本校は平成27年2月17日に正式に国際バカロレア・ディプロマプログラム（IBDP）を実施するIBスクールとしての認定を受けました。IBスクールの中でも日本語と英語のデュアルプログラムは沖縄尚学と仙台育英学園の2校のみです。日本語DPでは英語か日本語を選択し、各教科の内部評価（IA）や課題論文（EE）を仕上げることになります。

今回は特に評価がIB生物のIA論文と課題論文をご紹介します。

2. IB生徒の生物IAワーク

津波成分の比較による農地における津波被害

3GIB 鈴木 舞

はじめに

2011年に発生した東日本大震災によって、東北地方は大きな影響を受けた。特に津波の被害は大きく、流失や冠水などの被害を受けた東北地方の農地の推定面積は合計23,600haで耕作の推定面積の2.6%にも及んだ。宮城県では被害がより大きく11%にも及んだ¹。流入堆土砂など津波による被害は様々報告されているが、農地への被害が特に深刻である。農林水産省（2011）によると、農地が津波によって受けた被害の大部分は塩害だと言われている。しかし、私の住んでいる地域も津波の被害を受け実際にその状態を目の当たりにしたが、津波には油分のようなものなど様々な成分が入り混じっているように見えた。環境省（2011）によると、酸や塩基、油、農薬が混合している可能性が高いことが分かった。そこで、震災で塩害が多く報告されたが、農地が受けた被害は本当に塩分による影響なのかという点に疑問を抱いた。よって今回のIAでは、食塩と塩酸、水酸化ナトリウム、サラダ油、液体の農薬、なにも含まない通常の水を植物に与えその成長を比較することで、塩害の被害は塩分による影響なのかまたは他の成分による影響なのかを研究する。

研究方法

今回の研究で使用する植物としてラディッシュ（*Raphanus sativus*）を選択した。ラディッシュの育て方は藤田（2009）に沿って行った。はじめに、25×25のプランターを6つ用意した（写真1）。各プランターに土を入れてラディッシュの種を5つ植え（写真2）、毎日午前8時に全てのプランターに同様に水を与えた。使用した土は、高熱熱成たい肥、赤玉土、鹿沼土、パーライト、リンサンバットグアノを含んでいるものを使用した。また、土の量はプランターに約半分まで入れた。全てのプランターにおいて3枚目の芽が出たのち、成長が遅い2つを間引いて5つから3つに減らした。間引き後からは、間引きから育て始めてから25日後まで、食塩と塩酸、水酸化ナトリウム、サラダ油、液体の農薬をそれぞれ含ませた水となにも含まない通常の水の6種類を、それぞれのプランターに毎日午前8時に与え続けた。海水の塩分濃度は質量パーセント濃度は約3.5%²で、モル濃度は0.60mol/Lであるため、食塩と塩酸、水酸化ナトリウムは0.60mol/Lに合わせて作成した。サラダ油と農薬は含んでいる物質が複雑であるため、海水の塩分濃度に合わせた質量パーセント濃度で作成した。今回使用する水について蒸留水の使用を試みたが、学校の設備上準備できる量に限りがあったため水道水を使用した。また、実験後は安全性の確保のため、塩酸と水酸化ナトリウムを与え続けた土を混合し中和させた後、可燃ゴミとして廃棄した。

収穫時には土から伸びている葉の高さ、収穫後には全体の重さと実のみの重さを測定した。今回実の定義として、葉から色が赤く変わっている境目から下を実とした。

1 後藤、稲垣（発行年不明）

2 JAMSTEC 国立研究開発法人海洋研究開発機構（発行年不明）



写真1 使用したプランター



写真2 土を入れたプランター

研究器具

- ・全量ピペット 10 cm³ (誤差: ± 0.02 cm³)
- ・全量フラスコ 500 cm³ (誤差: ± 0.25 cm³)
- ・電子天秤 (誤差: ± 0.01 g)

結果

収穫時に測定した葉の高さの最大は、サラダ油を与えたラディッシュの 16.30 cm だった。全体の重さの最大は農薬を与えた 15.43 g だった。また、実のみの重さの最大は、農薬を与えたラディッシュの 5.87 g であった。

三つのラディッシュを平均した葉の高さ、全体の重さ、実の重さにおいて農薬を与えたラディッシュが 15.60 cm、10.87 g、2.84 g と一番上回った。

写真3～8は収穫時のラディッシュの様子、写真9～14は収穫後の様子である。

(1)食塩

食塩を含ませた水を与えたラディッシュの平均の高さは 11.67 cm で、サラダ油と農薬、水のみの中で一番低かった。全体の重さの平均は、農薬と水のみで平均より下回った。実の重さも同様に農薬と水のみで平均より下回った。また、写真3から分かるように葉に変色は見られず通常通りに成長した。

(2)塩酸

写真4からも分かるように全てのラディッシュは枯れ、高さの平均は 0.00 cm であった。全体の重さの平均は 0.95 g、実の重さの平均は 0.13 g と水酸化ナトリウムよりは成長が見られたが、他のラディッシュの平均よりは大きく下回った。葉の色は全体的に茶色く変色したが、根の色には多少赤みが残った。

(3)水酸化ナトリウム

水酸化ナトリウムを与えた3つのラディッシュの平均は、高さで全体の重さ、実の重さの全てにおいて一番下回った。また、葉の大部分は茶色に変色したが多少緑色の部分が残し、根は完全に変色し赤色ではなくなった。塩酸を与えたラディッシュは、葉は全体的に茶色く変色し、根には赤みが残ったため、水酸化ナトリウムと塩酸の葉と根は対照的であった。

(4)サラダ油

高さの平均は 12.60 cm と農薬と水のみを与えたラディッシュより低かった。しかし、水のみを与えたラディッシュの平均の結果と 0.07 cm しか違わずかなり近い結果となった。全体の重さと実の重さの平均は、食塩と農薬と水のみでラディッシュの平均より下回った。写真11から分かるように、葉と根の色に変色はなかった。

(5)農薬

高さが 15.60 cm、全体の重さが 10.87 g、実の重さが 2.84 g で他の全てのラディッシュの平均より上回った。また写真13から葉と実に変色は見られず、特に真ん中のラディッシュの実が大きく重さは 5.87 g と一番重い結果になった。

(6)水のみ

水のみを与えたラディッシュの平均は高さで全体の重さ、実の重さの全てにおいて農薬の次に大きかった。しかし、写真14の真ん中のラディッシュの実が大きく重さは 5.86 g と、一番重い農薬のラディッシュの 5.87 g とは 0.01 g のみの差となった。

表1 収穫時のラディッシュの高さ (cm)

	食塩	塩酸	水酸化 ナトリウム	サラダ油	農薬	水のみ
1	10.50	0.00	0.00	10.50	15.70	12.50
2	11.00	0.00	0.00	11.00	15.50	12.80
3	12.00	0.00	0.00	16.30	15.60	12.70

表2 収穫時のラディッシュ全体の重さ (g)

	食塩	塩酸	水酸化 ナトリウム	サラダ油	農薬	水のみ
1	6.78	0.69	1.04	5.38	8.05	6.67
2	6.26	0.84	0.37	6.37	15.43	12.25
3	5.78	1.32	0.50	5.77	9.12	4.93

表3 収穫時のラディッシュの実の重さ (g)

	食塩	塩酸	水酸化 ナトリウム	サラダ油	農薬	水のみ
1	2.76	0.07	0.00	0.38	1.88	0.81
2	2.03	0.03	0.00	0.74	5.87	5.86
3	1.66	0.28	0.00	0.48	0.78	0.66

表4 3つのラディッシュの平均

	食塩	塩酸	水酸化 ナトリウム	サラダ油	農薬	水のみ
高さ (cm)	11.67*	0.00	0.00	12.60	15.60	12.67*
全体の重さ (g)	6.27*	0.95	0.64*	5.84	10.87*	7.95
実の重さ (g)	2.15	0.13*	0.00	0.53*	2.84*	2.44*

*小数点第3位を四捨五入



写真3 食塩



写真4 塩酸



写真5 水酸化ナトリウム



写真6 サラダ油



写真7 農薬



写真8 水のみ



写真9 食塩



写真10 塩酸



写真11 水酸化ナトリウム



写真12 サラダ油



写真13 農薬



写真14 水のみ

考察

(1)水酸化ナトリウムと塩酸による影響

はじめに、全てにおいて水酸化ナトリウムを与えたラディッシュが1番成長が見られなかった。そして、塩酸を与えたラディッシュが2番目に成長が見られなかった。また、表4から分かるように、水酸化ナトリウムと塩酸の計測した値は、他の4つの成分と比較してかなり大きな差が見られた。今回はあくまで津波に含まれている物質の比較なので、実際の濃度は今回の研究で使った濃度ではないが、実社会において強酸と強塩基のものを含んだ津波は莫大な被害を与えることになるかと予想される。

(2)食塩による影響

水酸化ナトリウムと塩酸の結果を除いて見たとき、高さにおいてサラダ油より食塩を与えたラディッシュのほうが低く、全体の重さと実のみの重さにおいては、食塩はサラダ油より重い結果になった。したがって、塩害による影響は、植物の土から出ている部分に特に影響をもたらす可能性が高いことと考えた。また、全体の重さと実のみの重さにおいてサラダ油を与えたラディッシュのほうが食塩よりも成長が見られなかった点から、油分が多く含んだ津波は、根菜に影響をもたらす可能性が高いことが分かった。以上のことから、津波による農作物被害は塩分による影響だけではなく、油分による影響も加わる可能性が高いことが分かった。

(3)水のみと農薬によるラディッシュの影響

私は水のみを与えたラディッシュが、食塩、サラダ油、農薬の中で一番成長が見られると予測していた。なぜなら、今回使用した農薬に含まれている成分は、クロチアニジンと界面活性剤であり、肥料など成長を促すものは含まれていないからである。しかし、水のみを与えたラディッシュは、農薬を与えたラディッシュに比べて成長が見られなかった。その原因として、2つあると考えた。1つ目は間引きの時期が関係していると考えた。今回、全てのラディッシュの3枚目の葉が出たのち5つから3つに間引きした。全てのラディッシュに3枚目の葉が出るのを待ったため、その時点でかなり成長したものもあった。したがって、間引きの時期を2枚目の葉が出た後にした方がより成長した可能性がある。2つ目はプランターの大きさが関係していると考えた。はじめに5つの種を植え間引きして3つに減らしたが、今回使用したプランターは25×25cmのものであったため、プランターが狭く全体のラディッシュに土の栄養が行き届かなかったと考えられる。

表5 高さの平均の低い順

	1	2	3	4	5	6
成分名	水酸化ナトリウム	塩酸	食塩	サラダ油	水のみ	農薬
数値 (cm)	0.00	0.00	11.67	12.60	12.67	15.60

表6 全体の重さの平均の低い順

	1	2	3	4	5	6
成分名	水酸化ナトリウム	塩酸	食塩	サラダ油	水のみ	農薬
数値 (cm)	0.64	0.95	5.84	6.27	7.95	10.87

表7 実のみの重さの平均の低い順

	1	2	3	4	5	6
成分名	水酸化ナトリウム	塩酸	食塩	サラダ油	水のみ	農薬
数値 (cm)	0.00	0.13	0.53	2.15	2.44	2.84

まとめ

今回の研究では、津波による塩害被害は塩分による影響のみではないことが分かった。塩害の被害において、植物の土から出ている部分に影響が大きく、油分を多く含んだ津波は、根菜に影響をもたらす可能性が高いことが分かった。したがって、農作物被害は塩分と油分による影響が大きい可能性が高いことが分かった。加えて、水酸化ナトリウムと塩酸による被害は莫大であり、実社会において強酸と強塩基のものは注意が必要であると考えた。

この研究では津波を完全に再現したわけではないことから、植物における被害の原因として長時間水に浸かっているという状態、瓦礫による衝突、津波が押し寄せてきたときの水圧による影響も考えられる。津波に含まれている物質による被害に加えて、上記で述べたような津波の特徴を考慮した研究を今後の課題とする。

参考文献

環境省（2011）「東日本大震災津波堆積物処理指針」

<https://www.env.go.jp/jishin/attach/sisin110713.pdf>（2016年6月29日取得）

国土交通省（発行年不明）「海岸」

http://www.mlit.go.jp/river/kaigan/main/kaigandukuri/tsunamibousai/02/index2_1.htm#tsunami21
（2016年9月2日取得）

後藤逸男、稲垣開生（発行年不明）東京農業大学

http://www.academy.nougaku.jp/annual%20report/kaiho16/10_rondan.pdf（2016年9月8日取得）

東邦レオ株式会社（2011）「土の専門家から緊急提言」

<http://fukkou.soil-doctor.jp>（2016年6月29日取得）

農林水産省（2011）「東日本大震災について～農地の塩害と除塩について～」

<http://www.maff.go.jp/j/press/nousin/saigai/110414.html>（2016年7月13日取得）

藤田智（2009）『はじめての野菜づくり』日本文芸社 pp.142～143

JAMSTEC 国立研究開発法人海洋研究開発機構（発行年不明）「おしえて！海のこと、地球のこと」

https://www.jamstec.go.jp/j/kids/qa/01_3.html（2016年6月29日取得）

3. 生徒の課題論文 (EE)

『河童』と『吾輩は猫である』における人間社会の描かれ方

3GIB 笹森 絵子

はじめに

人間以外の視点や、我々が一般的に持っている常識の外の視点を持った人物を語り部にした作品は少なくない。違った価値観から人間社会を描写させることによって、意外性や新鮮味をもたせ、読者を引き込む導入になるからだ。本論文では、人間以外の登場人物の視点や、一般的な社会常識とは違った価値観をもっているという設定の主観から語られる2つの作品における人間社会に対する見解を比較して考察したい。比較する2つの作品はそれぞれ、芥川龍之介の『河童』と、夏目漱石の『吾輩は猫である』だ。それぞれ違った形でだが、人間社会を、人間とは違った生き物の価値観を通して語られている。前者は人間社会では「狂人」とされる男が語る異世界である河童の世界で、河童たちの口から聞くその世界の常識から間接的に人間社会との対比を描いている。後者は題名の通り、猫の視点から見た一つの家族が猫を語り手として、人間との価値観の相違をユーモラスに描いている。

『吾輩は猫である』において

『吾輩は猫である』において語られていた人間社会は、大きく分けて2つの特徴が語られている。抜粋する場面は、序盤で登場した人間の家の「主人」がおだてられて絵を描く場面と、主人の娘達が張り合って自分の皿に砂糖を山のように盛り付けていく場面である。まず、「主人」が偉人と並べられたことに気を良くして絵を描く場面から、教え子にもらった猫の絵を認識した場面までの間に描写されているものは、皮相さである。

偉人と並べられたことに気を良くした場面

“「どうも甘くかけないものだね。人を見ないと何でもないようだが自ら筆をとって見ると今更のようにむずかしく感ずる」これは主人の述懐である。なるほど許りのない処だ。彼の友は金縁の眼鏡越しに主人の顔を見ながら、「そう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像ばかりで画がかける訳のものではない。昔むかし以太利の大家アンドレア・デル・サルトが言った事がある。画をかくなら何でも自然その物を写せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獣あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然はこれ一幅の大活画なりと。どうだ君も画らしい画をかこうと思うならちと写生をしたら」

「へえアンドレア・デル・サルトがそんな事をいった事があるかい。ちっとも知らなかった。なるほどこりゃもっともだ。実にその通りだ」と主人は無暗に感心している。金縁の裏には嘲るような笑いが見えた”

猫の絵葉書を認識する場面

“元朝早々主人の許へ一枚の絵端書が来た。これは彼の交友某画家からの年始状であるが、上部を赤、下部を深緑で塗って、その真中に一の動物が蹲踞しているところをパステルで書いてある。主人は例の書斎でこの絵を、横から見たり、縦から眺めたりして、うまい色だなという。すでに一応感服したものだから、もうやめにするかと思うとやはり横から見たり、縦から見たりしている。からだを拗じ向けたり、手を延ばして年寄が三世相を見るようにしたり、または窓の方へむいて鼻の先まで持って来たりして見ている。早くやめてくれないと膝が揺れて陰呑でたまらない。ようやくの事で動揺があまり劇しくなくなったと思ったら、小さな声で一体何をかいたのだろうと云う。主人は絵端書の色には感服したが、かいてある動物の正体が分らぬので、さっきから苦心をしたものと見える。そんな分らぬ絵端書かと思いつつ、寝ていた眼を上品に半なかば開いて、落ちつき払って見ると紛れもない、自分の肖像だ”

絵葉書の猫を認識できないでいる場面や、本人の自己申告、そして猫本人の評価から、主人は絵に対して造詣が深いわけではないことは明確になっている。故に、その分野を自分よりも知っている「美学者」を相手にすると、その言葉を盲信してしまうのだ。それはつまり、少しでも自分より造詣が深そうに見えれば、その相手の言葉から得た情報だけで、自分もものを知った気になるということである。偉人の金言として聞いた「美学者」のでたらめを鵜呑みにして写生して芸術家になったつもりでいても、学生の描いた猫を判別できない程に眼識が欠けているのというのにだ。さらに、その絵葉書を改める場面だけでも皮相さが読み取れる。描かれているものがわからないというのに、抽象画をあらためるように角度を変えて色を褒めているところだ。

二つ目の特徴は、生存に不要な自尊心の表れ、つまり非合理性である。人間と猫たちとの決定的な違いではないだろうか。人間、特に中間所得層は明日の食に困って日々生きるのに精一杯というわけではない。食べるものと寝る場所には困っておらず、天敵もないため、生存に不要なことに躍起になれる。それによって文化が生まれたという説を唱える人もいる（樋口 2001）。結果として生存に不必要なものにも重きをおくようになり、知識や持ち物の数を競ったりするのだろう。猫たちといえば、決まった餌場をもっていないかぎり毎日が飢えとの闘いだ。作品内での猫たちも、語り手の猫や車屋のくろが飼い猫であるためのんびりとした人生に見えるが、どちらも元が野良であるために、人間の非合理的な行動には「意味は無いのになぜ必死になっているのか」とばかりにした様子も見える。その非合理性をもっともわかりやすく描いているのがこの場面だろう。

“小さいのもすぐ匙をとってわが分量を姉と同一にした。すると姉がまた一杯すくった。妹も負けずに一杯を附加した。姉がまた壺へ手を懸ける、妹がまた匙をとる。見ている間まに一杯一杯一杯と重なって、ついには兩人の皿には山盛の砂糖が堆くなって、壺の中には一匙の砂糖も余っておらんようになったとき、主人が寝ばけ眼を擦りながら寝室を出て来てせっかくしゃくい出した砂糖を元のごとく壺の中へ入れてしまった。こんなところを見ると、人間は利己主義から割り出した公平という念は猫より優っているかも知れぬが、智慧はかえって猫より劣っているようだ。そんなに山盛にしないうちに早く嘗めてしまえばいいにと思ったが、例のごとく、吾輩の言う事などは通じないのだから、気の毒ながら御糧の上から黙って見物していた。”

姉妹が自分の砂糖の量を競ってすくい出しているのだが、自分たちが実際に食べる量ではない。砂糖の量が彼女たちの命をつなぐのに必須であるかといえばそうでもない。挙句の果てに結局戻されてしまうという始末に、語り手の猫もはっきりと「かえって猫より劣っているようだ」と述べている。人間は生物としての必要最低限の寝食にはほとんど不自由をしないため、人間社会において価値をもつ物は自然界と乖離する。その結果として弁護士などといった、何も生産しない仕事が高所得になっていき、人の命を支える食料生産者たちは社会的にあまり尊敬を受けなくなっていく。そういった状態が、猫たちにしてみれば甚だ疑問であることが車屋のくろと語り手の猫の会話でも示唆される。

「一体車屋と教師とはどっちがえらいだろう」

「車屋の方が強いに極まっていあらあな。御めえのうちの主人を見ねえ、まるで骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫だけに大分だいぶ強そうだ。車屋にいると御馳走が食べると見えるね」

「何におれなんぞ、どこの国へ行行ったって食べ物に不自由はしねえつもりだ。御めえなんかも茶島ばかりぐるぐる廻っていねえで、ちっと己の後あとへくっついて来て見ねえ。一と月とたたねえうちに見違えるように太れるぜ」

「追ってそう願う事にしよう。しかし家うちは教師の方が車屋より大きいのに住んでいるように思われる」

「笹棒め、うちなんかいくら大きくたって腹の足たしになるもんか」

「うちなんかいくら大きくたって…」からもまた、日々の食を得ることに必死な動物の価値観が見て取れる。教養があって良い屋敷に住んでいても、猫たちにとっての贅沢は十分な食を得て太ることなのだ。この真逆の価値観から人間社会における贅沢の比重に、生類としての疑問を呈しているのではないだろうか。

『河童』において

では、河童において語られる人間社会はどのようなものだろうか。河童は芥川龍之介の作品の中でも晩年に書かれたもので、執筆して半年以内に「唯ぼんやりとした不安」から自殺している。語り手は精神病院に入院している患者で、河童の世界に行ってきた旨を話している。河童の世界は価値観が人間社会における常識とは大きく異なっており、人間社会でタブー視されているものが推奨されている。だが、後述の場面から、芥川龍之介が人間社会、ひいては自分の周囲にみた社会に対しての皮肉と理想が描かれているとも言われている（障害者の福祉 2007）。本論文では後者の説を採用し、精神病院に入院している「狂人」という、人間社会から外れてしまった生き物に語らせる「別世界」を通して人間社会に対する批判をこめた作品として扱う。よって、河童の世界は誇張して描いた人間社会であり、同時に芥川龍之介の理想を随所にこめた世界として分析する。

この作品は比較対象の『吾輩は猫である』と大きく違ってはいるが、人間社会を外から見ているものである。ここで描かれている人間社会の特徴は、皮相的と非合理的の中に排他性が加えられている。まず、皮相さは『河童』においてどう描かれているだろうか。以下に例として河童世界の音楽家の演奏中に「演奏禁止」の声が上がり、乱闘状態になる場面での会話を引用する。

“「元来画だの文芸だのは誰の目にも何を表はしてゐるかは兎に角ちやんとわかる筈ですから、この国では決して発売禁止や展覧禁止は行はれません。その代りにあるのが演奏禁止です。何しろ音楽と云ふものだけはどんなに風俗を壊乱する曲でも、耳のない河童にはわかりませんからね。」

「しかしあの巡査は耳があるのですか？」

「さあ、それは疑問ですね。多分今の旋律を聞いてゐるうちに細君と一しよに寝てゐる時の心臓の鼓動でも思ひ出したのでせう。」

河童に会話は聞こえているため「耳がない」とは音楽に対する審美眼がないという意味と取ると、音楽の何たるかを知らないまま、ステータスとして聞きに行く住民たちが多くいるととれる。それはつまり、知りもしないものを讃えているということだ。理解し得ないものをこそ高尚とするのは、「難しいから高尚なものに違いない」という庶民意識に端を発しているからではないだろうか。本作品の書かれた時代、美術館や博物館は既に普及から半世紀を経ているが、西洋の音楽を嗜む文化はまだ真新しいものだった。音楽教育の基盤ができたのもまた作品が書かれる50年程前であり、その結果もまた近年では「音楽の美を教える」教育ではなく、音楽を道具にして歌詞を教える特異なものであったと言われている（古田庄平 1975）。よって音楽に対する審美眼を培うことが出来たのは、西洋音楽を嗜みながらの生活が出来た華族たちが多数だった（佐野仁美 2005）。上流階級が良いと言っているものを無条件で良いとするのは、得てして人間社会によく見られる風潮だ。そして同時に音楽に対する規制の理由もまた、人間社会の皮相さに皮肉を呈している。「音楽というものだけはどんなに風俗を壊乱する曲でも、耳のない河童にはわかりませんから」というのは、未知への恐怖が示唆されている。未知に懐疑的になる姿勢は排他性を描いているが、同時に「自ら知ろうとせず判断する」姿勢であり、皮相さを描いているといえるだろう。前述のように、『河童』に芥川龍之介の理想と皮肉が反映されているとして、人間社会の皮相さを誇張して描くこの場面に反映されているのは皮肉なのだ。

次に、非合理さの描写はどうだろうか。河童の恋愛について説明されている場面を例に分析したい。

“実際又河童の恋愛は我々人間の恋愛とは余程趣を異にしてゐます。雌の河童はこれぞと云ふ雄の河童を見つけたが早いか、雄の河童を捉へるのに如何なる手段も顧みません。一番正直な雌の河童は遮二無二雄の河童を追ひかけるのです。”

これは河童の雌の恋愛における恐ろしさについて説明を始める場面だ。芥川龍之介自身、女性に付きまといわれていた経験があり、彼の精神的な不安に拍車をかける要素でもあった（芥川 1968）。この場面ではその恐怖と理不尽を描いており、その行為を違法としていなかった当時の日本を誇張して描いた芥川龍之介の皮肉として読み取れる。しかし、同時に人間社会と「余程趣を異にして」いるという記述を皮肉としてではなく、額面通り受け取ると、人間社会では女性はあまり男性の後を追うものではないということになる。それは実際、西洋から明治維新の折に伝わった貞操観念が人々の意識に少しずつ根付いていった結果だろう（赤松 2004）。だが、生物としてそのあり方は甚だ疑問だ。合理的に種の存続を優先させるのであれば、人はむしろ異性を捕らえようと遮

二無二追いかけるべきである。その有り様から「余程趣を異にして」いるのであれば、人間は生物として非合理的な社会的風潮をこしらえてしまっているのではないだろうか。また、ここに見受けられる排他性として、この後続く、マツグという哲学者と会う場面がある。

“唯マツグと云ふ哲学者だけは（これはあのトツクと云ふ詩人の隣にゐる河童です。）一度もつかまつたことはありません。これは一つにはマツグ位、醜い河童も少ない為でせう。しかし又一つにはマツグだけは余り往来へ顔を出さずに家にばかりゐる為です。”

外見の醜さというのは、時代や社会情勢によって移り変わる社会的な価値観である。平安期の日本における美人を描いた絵画は、下膨れや小さなかぎ鼻といった、現代においては醜いとされる特徴が見える。そういった特徴から、なりふり構わず雄の河童を追う雌の河童がマツグを選ばないというのは、当時の河童社会の価値観にそぐわない外見であるためという排他性が示唆されるのではないだろうか。マツグ自身も追いかけることができないことをただ幸福とは思っておらず、「しかしわたしもどうかすると、あの恐ろしい雌の河童に追ひかけられたい気も起るのですよ」と後に述べている。

結論

このように、どちらも共通して人間社会が皮相的で非合理的であると示唆している所が見られる。しかし、両作品には大きな思想的違いが見受けられた。それは社会で生きることについて、希望的観測を持っているか否かである。両作品とも、生きることの無常さが描かれている場面がある。『吾輩は猫である』における猫の最期の場面と、河童の出産の場面だ。どちらも生と死という、普遍的に重要な場面で描かれている。そのため、物語の主題の中でも重要なものと考えられるのではないだろうか。『河童』の場面をまず抜粋する。

「けれどもお産をするとなると、父親は電話でもかけるやうに母親の生殖器に口をつけ、「お前は这个世界へ生れて来るかどうか、よく考へた上で返事をしろ。」と大きな声で尋ねるのです。バツグもやはり膝をつきながら、何度も繰り返してかう言ひました。それからテエブルの上にあつた消毒用の水薬で嗽うがひをしました。すると細君の腹の中の子は多少気兼ねもしてゐると見え、かう小声に返事をしました。

「僕は生れたくはありません。第一僕のお父さんの遺伝は精神病だけでも大へんです。その上僕は河童的存在を悪いと信じてゐますから。」

バツグはこの返事を聞いた時、てれたやうに頭を搔いてゐました。が、そこにゐ合せた産婆は忽ち細君の生殖器へ太い硝子の管を突きこみ、何か液体を注射しました。すると細君はほつとしたやうに太い息を洩らしました。同時に又今まで大きかつた腹は水素瓦斯を抜いた風船のやうにへたへたと縮んでしまひました。”

河童世界におけるこの墮胎制度は、芥川龍之介の理想が反映されている。芥川龍之介自身、実母が精神病を患っており、それに対する大きな不安を抱いていた。更に、義兄の借金、女性からのストーカーなど、様々な人生の艱難に苦しめられ自殺している（芥川 1968）。このような状況にあれば、生まれたこと自体を後悔するのも当然ではないだろうか。『河童』は前述したとおり、自殺の直前に書かれた作品であり、生まれる前に死ぬ権利があるというのは、芥川龍之介の苦悩から捻出された概念ともいえるだろう。人生は生きること自体が苦であるという考えは、作品中の登場人物等随所から見て取れるが、墮胎という、生誕と死に同時に触れる場面がもっとも象徴的になると考え、抜粋した。つまり、『河童』においては、社会で生きることへの希望が描かれていないのである。

同じ死に繋がる場面も、『吾輩は猫である』においては対照的だ。抜粋した場面は最後の、猫の溺死である。

“出られないと分り切っているものを出ようとするのは無理だ。無理を通そうとするから苦しいのだ。つまらない。自ら求めて苦しんで、自ら好んで拷問に罹っているのは馬鹿氣でいる。

「もうよそう。勝手にするがいい。がりがりはこれぎりご免蒙むるよ」と、前足も、後足も、頭も尾も自然の力に任せて抵抗しない事にした。

次第に楽になってくる。苦しいのだからありがたいのだから見当がつかない。水の中にいるのだから、座敷の上にいるのだから、判然しない。どこにどうしていても差支えはない。ただ楽である。否楽そのものすらも感じ得ない。日月を切り落し、天地を粉塵して不可思議の太平に入る。吾輩は死ぬ。死んでこの太平を得る。太平は死ななければ得られぬ。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。ありがたいありがたい。”

この場面も死を描く場面、それも語り手の死であり、物語の結末である。ここで判明する、社会に生きるもの

としての人生観は諦観であるように見える。力尽きる最後の一瞬まで足掻くでもなく、かといって生きること在地獄とし、死ぬことを解放されることのように述べているわけでもない。確かに、「無理を通そうとするから苦しいのだ」は、人生の艱難について、解決せずに諦めてしまえば楽だと語っているようにも取れる上、そこに続く「太平は死ななければ得られぬ」も、死ねば楽になると同義にも見える。しかし、『河童』に芥川龍之介の意思が大きく反映されているのであれば、『河童』における人生は辛苦であり、死も安楽には足りていない。芥川龍之介は遺書で「死んで楽になる」とは書いていないどころか、人生で犯した罪の贖罪のために死ぬと述べている（芥川 1927）。

どちらの作品も人間社会に対して似通った見解を持っているが、根幹にある人生観は大きく異なっていた。『河童』では、生まれる前に死ぬ権利を欲する意思、ひいては人生が艱難辛苦そのものであることを示唆し、死ぬことすらも罪の贖いにあたる苦痛だ。『吾輩は猫である』では対照的に、困難を解決することに労力をかけなければ人生はすこぶる楽なものであるとしている。

参考文献

- アットホーム株式会社大学教授対談シリーズ. (2001, 5). Retrieved August 09, 2016, from http://www.athome-academy.jp/archive/biology/0000000270_all.html
- 赤松啓介 (2004, 6, 10) 夜這いの民俗学・夜這いの性愛論 筑摩書房
- 芥川龍之介 (1968). 河童, 他 或阿呆の一生. :新潮社.
- 芥川龍之介 (2008, 12, 11). 遺書. Retrieved August 09, 2016, from http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/16034_33783.html
- 夏目漱石 (1980). 吾輩は猫である 新潮社
- 佐野仁美 (2005, 11, 7) 明治期の日本におけるフランス音楽受容
- ノーマライゼーション 障害者の福祉. (2007, January). Retrieved August 09, 2016, from <http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prdl/jsrd/norma/n306/n306015.html>
- 古田庄平 (1975, 3, 20) わが国における音楽科教育の歴史的変遷

5. おわりに

IBプログラムにおける日本語DPが認められることで、日本の教育も教科書に沿って決められた知識を覚えさせるという形骸化した教え方から脱却して、生徒たち自身が自ら調べ、深く読み取り、内容に関する意見を発表し、積極的に議論するスキルを推進する教育へと変化しつつあると考えられます。

この2つの論文を見てわかるように、IBDPの教育において仕上げる論文は、自由作文とは異なり、その領域の専門化を図り分野を深めていくものです。求められる研究姿勢は大学院の修士課程レベルにも匹敵すると言っても過言ではありません。生徒が自ら探究し、主体的に判断して、実験や調査を重ね感動とともに知識を作り出していく体験が、真の教育に求められているものだと思います。

今後も、生徒中心のアクティブ・ラーニングであるIB教育を実践し、国際的視野を持つグローバル・シチズンの育成につなげていければと考えています。

I 研究報告

(1) 文芸部の活動について

特別進学コース 下田真奈美

1. はじめに

文芸部は、特別進学コース第2学年男子5名、女子2名、第1学年男子2名、女子2名、情報科学コース第1学年女子1名の計12名で現在活動しています。放課後週1～2回程度、特別進学コースの教室で、各自、創作活動に取り組んでいます。また、育英祭に向けて、創作以外に、調査・発表の企画も立てて、その準備を進めてきました。

2. 今年度の目標と主な活動

(1) 今年度の目標

今年度の目標は、活動内容の充実と部員数を増やすことです。

(2) 今年度の主な活動

○文芸コンクールへの参加・応募

文芸部の主な活動内容は短歌や俳句、小説などの創作ですが、今年度は外部のコンクールに応募するという目標を立てて創作を進めてきました。昨年度入部してきた生徒たちは文芸創作活動に興味関心が高く、その要望を取り入れて、創作活動を中心に活動してきました。昨年度の文芸部には1年生だけが所属しており、その1年生だけの活動には困難な部分がありました。しかし新しい仲間と共に部活動を行うことを通して、高校生活をより充実したものにしたいという、1年生たちの熱意でどうにか乗り切ってきたように感じます。今年度はその1年生が2年生となり、新1年生のよい手本となり、昨年度に比べて徐々にではありますが、充実した活動内容となってきたと思います。

以下が今年度の文芸コンクール等への参加・応募です。

《今年度のコンクールへの応募・参加（予定）》

・短歌コンクールへの応募・参加（予定）

杉原千畝記念短歌大会、原阿佐緒賞

・小説コンクールへの応募・参加（予定）

大谷大学文芸コンテスト

・俳句コンクールへの応募・参加（予定）

虚子・こもろ全国俳句大会

○育英祭での取り組み1…「読書アンケート」の実施と考察

文芸部では、育英祭において、創作活動に関わるテーマでの調査・発表したいと考えてきました。部会で話し合いを重ねた結果、創作活動に関連のある「読書」というテーマでの調査・発表ということになりました。そこで、育英祭では特別進学コースの第2学年に対して「読書アンケート」を実施し、その回答のまとめと考察を発表しました。「読書アンケート」に対しては、特別進学コース第2学年の生徒194名（男子140名、女子54名）から回答を得ることができました。

以下が「読書アンケート」の質問事項とその回答のまとめ、さらに部員たちによる考察です。

① あなたは4月から今まで（9月まで）本を何冊読みましたか？（漫画・コミック・週刊誌・雑誌は除く）

※4月から9月まで1人平均6.4冊（0冊～100冊まで）本を読んでいる。

- ・4月～9月までの間に、1番多い人で100冊読んだという生徒もいました。平均すれば6.4冊ですが、全く読まないという生徒も20パーセント近くいます。

② ひと月には何冊本を読みますか？（年間を通しての平均）

※1年にだいたい1人平均1冊（0冊～19冊まで）本を読んでいる。

- ・回答には、0冊から19冊までの幅がありました。本をほとんど読まないという生徒は、15パーセント近く存在しており、文芸部ではもう少し本を読んでほしいと思います。

③ その中で面白かったものを教えてください。

※『君の膵臓をたべたい』（住野よる著）を挙げた人が多い。

・映画・アニメの原作が多く読まれているのが分かりました。つまり、本自体に興味を持って読書が始まるのではなく、映画・アニメなどの映像に触れて興味を覚えて、その原作となった本を手に入れているのでしょう。活字離れが進んでいることもうかがわれます。

④ 読書の際、本をどのようにして入手しますか？

※購入した本を読む人が多い。

・図書館で借りた本を読んだと回答した人は27名でした。書店で読みたい本を探すという楽しみもあるとは思いますが、文芸部としてはもっと本校の図書館を利用して欲しいと考えます。

⑤ あなたが好きな小説家を教えてください。

※湊かなえ、東野圭吾、伊坂幸太郎、村上春樹、住野よる、山田悠介、芥川龍之介、夏目漱石など

⑥ 電子書籍を読んでいますか？

※電子書籍はまだ少数派である。

・「はい」と答えた人は21名、「いいえ」と答えた人は173名で、まだまだ電子書籍は少数派のようです。

⑦ あなたは普段どこで本を読んでいますか？

※落ち着く場所で本を読む人が多い。

・やはり自分の部屋で読む人が大多数で、次に電車やバスの中、そして教室、図書館、その他の順でした。落ち着く場所で読みたいという気持ちは十分に理解できました。

※時間を有効に使う。

・学校までの通学時間を有効に使って、電車などの交通機関の中で、本を読んでいるという人も多くいました。

⑧ あなたが本を読まない理由（読めない理由）は何ですか。

※時間がないから。

・本を読まないという人はほとんどいないのですが、本をなかなか読めないということの理由を聞くと、「時間がないから。」ということを理由に挙げている人が多いです。

※読みたい本が見つからないから。

・探しても、自分が「読みたい本が見つからないから。」ということを理由にしている人もいます。

※本を読む習慣がないから。

・中には、今まで「本を読む習慣がないから。」ということを理由にしている人もいます。

このアンケートを通して、文芸部ではみんなにもっと本を読んでほしいという思いを強くしました。今回、文芸部では育英祭で「文芸カフェ」と称して、先生方や文芸部員が薦める本のコーナーを設けることにしました。感動する本と出会うことによって、今まで本を読む習慣がなかったという人に、なんとか本を読む習慣を身に付けてほしいと思ったからです。図書館の統計によると、特別進学コースの第2学年への貸出冊数は4月～9月の間で全体で439冊でした。今後、文芸部は図書館と協力しながら、生徒たちにもっと本の面白さを伝える企画を考えていきたいと思います。

○育英祭の取り組み2…短歌コンテストへの投票、結果発表、表彰

今回の育英祭で、特別進学コースの第2学年の生徒たちは短歌を創作しました。コース展示では、それらの作品から選出した優秀作品の発表掲示を行いました。私たち文芸部は、生徒や来校者に、これらの優秀作品への投票をしてもらい、その結果を発表、表彰を行うことにしました。本校の生徒たちや来校した方々にこれらの短歌作品にもっと興味関心を持ってもらいたいというのが文芸部のねらいでした。文芸部の発表教室の場所が目立たない場所だった影響か、宣伝不足が原因か、短歌コンテストの企画に工夫が足りなかったのか、予想よりも投票数は少なかったものの、別の視点からの投票によって、優秀作品を選ぶこととなったようです。

短歌コンクールの様子



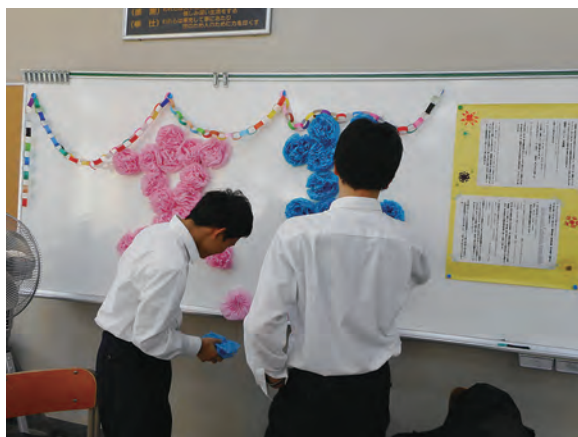


3. 今後の課題

※「創作活動以外の活動」も企画していきたい。

文系部の活動の中心はやはり「創作活動」だと思いましたが、これからも仲間と協力して取り組む活動を企画していきたいと考えています。新入生は、「読書が好きだから。」「詩や小説を書きたいから。」「高校では、何か部活動に入って、気の合う友達を作りたいと思っていたから。」「部活動を通して、友達の輪を広げていきたいから。」「友達に誘われたから。」などという様々な理由で文芸部に入学してきます。育英祭を終えて、新入生たちは、「育英祭の準備や後片付けで、先輩や他の同級生と協力できたことがとても楽しかった。」「先輩方のような創作活動をしたい。」という感想を話していました。本来、「創作活動」というものはひとりでやるものであり、他の人との交流はあまりありません。また文芸部に入学する生徒たちは、概しておとなしく、グループ活動を苦手とする場合が多い傾向にあります。それだけに、生徒たちは、この高校生活ではなんとか友達を多く作りたいという希望を強く持っているようです。教員の手助けがまだまだ必要不可欠な段階ではありますが、これからも、部員全員で取り組むことのできる「創作活動以外の活動」も企画していきたいと私は考えます。例えば、育英祭で取り組んだ「読書アンケート」の考察のように、「読書」をテーマにした活動の企画などです。このような活動を通して養われる力は、きっと社会に出てから大いに役立つと思います。

育英祭の様子



※創作活動のレベルを向上したい。

部員たちは書くことが好きだということを理由に入部してきます。しかし、創作活動に意欲があると言っても、必ずしも書くことが得意というわけではありません。部員の創作内容のレベルは決して高いものではないのが現状です。そこで今後の課題は、創作活動の質の向上をどう図るかということだと考えています。来年度は、高校生向けの創作講習会などに参加するなど、もっと活動の内容を工夫したいと思います。

※部員数を増やしたい。

先に述べたように、「高校では、何か部活動に入って、気の合う友達を作りたい。」「部活動を通して、友達の輪を広げていきたい。」と生徒たちは考えて入部してきます。その生徒たちの願いに答えるために、なんとか部員数を増やしていきたいと考えています。

4. 終わりに

文芸部の活動は基本的に地味なものが多く、あまり目立たない部活動ではありますが、やってみたいという新入生が最近なぜか増えています。その気持ちに応えて、生徒たちになんとか充実感を味わわせたい、そしてこの活動が彼らの成長の一助となれば良いと私は考えます。私自身、創作についての詳しい知識もなく、手探り状態ではありますが、生徒と共に1歩1歩進んでいきたいと思っています。

以上で、文芸部の活動の報告を終わらせていただきます。

(2) 英進進学コース英語科研究報告

暗記ノススメ ―英語の授業における二つの実践を通して―

英進進学コース 熊坂 治平

序論(はじめに)

最近の学校教育の中では、暗記をするということは余り奨励されないようです。何か分からないことがあれば、すぐにスマホのインターネットで調べればいいという風潮が蔓延しているようです。確かにインターネットは便利ですし、手軽だし良いことづくめなのですが、学校教育の中ではそれに頼りきりでいいのか疑問もまた頭の片隅をよぎるのです。私はこういう時代にあっても、否こういう時代だからこそもっと暗記を考え直し復権させるべきではないかと考えています。

江戸時代を振り返ってみれば、寺子屋教育の基本は「読み・書き・算」であり、特に論語の素読が重んじられたそうです。よく意味も分からずに何度も師の後について読む。そうすると自然と暗記した状態になり、折に触れてその中の語句が頭の中に蘇る。そうなれば、意味は知らず知らずのうちに頭の中に染み込んでゆく。そんな具合に、寺子屋で学んだ先人たちは知識を血となし肉としてきたのでしょう。

私は時々生徒に、教科書をそのまま一字一句違わずに書き写すように指示することがあります。そうすると彼らはとても嫌がります。曰く、「そんなの、教科書に書いてあるからわざわざ書き写さなくてもいいじゃないか。教科書を見ればいいんだもの」確かにその通りで一理あるわけですが、私はこう反論します。「それでもいいのだが、それでは小学校から高校までの教科書を全部背負って歩かなければならないよ」

何かに書いてある知識と、自分の頭の中に暗記した知識とは本質的に違うような気がするのです。暗記して自分の頭の中に入れてしまった知識と、必要になったとき本を引っ張り出して見る知識とでは、その知識を通して見えてくる風景が違うというべきか、その知識の質がまったく違うのではないかと思います。その暗記に関して、以下に私が授業で実践していることを2項目ほど書いてみたいと思います。

第1部 英詩の暗唱について

私は英語を教えていますので、4月に新しく担当するようになった生徒に英語の詩をプレゼントします。イギリス・ロマン派の詩人ウィリアム・ワーズワースの「水仙」(“The Daffodils” by William Wordsworth)という詩です。私は散歩が好きなので、春になって水仙の花が咲くころ、ところどころ家々の庭先に咲く水仙を眺めながらこの詩を口ずさみながら楽しく散歩します。高校1年生にとってもそんなに難しいものではなく、暗記して口ずさめば心が豊かになると思うからです。詩は次のようなものです。

The Daffodils

William Wordsworth

I wander'd lonely as a cloud
That floats on high o'er vales and hills,
When all at once I saw a crowd,
A host of golden daffodils,
Beside the lake, beneath the trees
Fluttering and dancing in the breeze.

谷や丘の上高く浮かぶ雲のように
私はたった一人で歩き回っていた。
すると突然、一群れの
夥しい水仙の花の群れが目に入ってきた。
湖の畔、木々の下で
風にそよいで踊っているよ。

Continuous as the stars that shine
And twinkle on the milky way,
They stretch'd in never-ending line
Along the margin of a bay:
Ten thousand saw I at a glance
Tossing their heads in sprightly dance.

夜空の天の川にきらめき
輝いている星々のように
水仙は入り江の縁に沿って
終わることのない線となって伸びていた。
一目一万本
頭をあげて楽しく踊っているよ。

The waves beside them danced, but they

湖の上のさざ波も踊っていたが

Out-did the sparkling waves in glee:—
A poet could not but be gay
In such a jocund company!
I gazed — and gazed — but little thought
What wealth the show to me had brought.

For oft, when on my couch I lie
In vacant or in pensive mood,
They flash upon that inward eye
Which is the bliss of solitude;
And then my heart with pleasure fills
And dances with the daffodils.

陽気さでは水仙にかなわなかった。
詩人としては、こんな楽しい仲間のなかでは
陽気にならざるをえないではないか。
私は見つめた、じっと見つめた。だがこの情景が
私にどんな恩恵をもたらしたか少しも考えなかった。

というのは、空っぽな心で、物思いに沈み
カウチに横になっていると、しばしば
あの水仙が私の内なる眼にぱっと蘇る。
それは孤独の中の祝福。
それで私の心は喜びにあふれ
水仙と一緒に踊りだすよ。

(日本語訳は平井正穂訳を参考にした筆者による)

いかがでしょうか。授業時間を全部この詩の暗唱に充てるわけにはゆかないので、授業時間の最初の10分間ぐらい口慣らしとしてやるわけで、例年だとおおよそ5月の連休前くらいで第1連をやって終わっていました。クラスの何人か(5～6人)が第1連を暗記して皆の前で披露してくれます。

今年度は1A4のジャンプクラスのコミュニケーション英語の担当になりましたので、もう少し徹底して最後まで暗記してみようという気になりました。詩をよく見てみると、第1連は散歩の途中、湖の畔での水仙との出会い。第2連はイメージを夜空の天の川に向けて、星と対比しての水仙の描写、第3連では、視線を湖のさざ波に向けています。最後の第4連では、詩人の書斎での水仙をめぐる楽しい心象風景です。ということで、春だけではなく夏・秋・冬も楽しめる内容になっていると考えることもできます。夏は夜空を見上げての天の川。秋はキラキラと湖上で輝くさざ波。冬は暖かくした書斎の中での水仙の心象風景。

5月の連休明けも、第2連を授業の初めに口馴らしとして取り入れています。その際に注意していることは、まず最初に音声から入るということです。音を聞いて英語の綴りに直せるものは英語にして、分からないものはカタカナで音を写させます。ある程度音声にできる、発音できる段階になって初めて英文の綴りを示します。最初から文字で与えてしまうと、結局は耳がお休みにになり、言わば眼で音声を聞くことになってしまうからです。夏休み明けからは、第3連に入り第4連と続けて年明け1月頃には詩の全文の暗唱会を開ければいいのだからと考えています。

※1月30日(月)、31日(火)の両日、詩の暗唱会を実施することができました。生徒全員意欲的に暗唱する努力をしてくれました。最終的に約10人がなんとか暗唱することができました。他の生徒は力量に応じて最初から、または途中からプリントを見て朗読しました。今後も折りにふれて口ずさんでくれたらいいなと願う次第です。

第2部 英単語記憶法

英語の学習において英単語を記憶しておくことがいかに重要であるかは英語の教師ならば誰でも痛感していることです。生徒に英和辞書を引けといっても余り引きませんし、授業に辞書を持ってこいと言っても持ってこないというのが現状ではないでしょうか。そのような状況の中で、今回1A4のジャンプクラスの生徒に、教科書の各課に出てくる英単語を一覧表にして日本語訳を付けて渡すようにしてみました。生徒が自分で英和辞書を引くことを疎かにしているのではなく、とにかくその課で出てくる英単語の意味を丸暗記してもらいたいと思ったからです。今年の1A4のクラスで使っている教科書は大修館の“Genius English Communication I”で、各課に付属の関連読み物が付いていて、その両方を合わせると新出単語は約100から160くらいになります。付属の読み物まで授業でやることはできないのですが、新出単語については一週間で丸暗記するように勧めています。以下に生徒に渡しているプリントの例とやり方を説明します。

第4課の新出英単語プリントの1ページ目。3枚で97の新出単語・熟語が載っています。

Lesson 4 Words & Phrases

1	biodiversity	(n.) 生物多様性
2	conservation	(n.) (自然環境などの) 保全、保護
3	poverty	(n.) 貧乏、貧困
4	protect	(v.) 保護する
5	rain forest	熱帯雨林
6	presentation	(n.) 口頭発表、プレゼンテーション
7	destruction	(n.) 破壊、滅亡
8	equator	(n.) 赤道
9	region(s)	(n.) 地域
10	govern(ed)	(v.) ～を治める
11	population	(n.) 人口
12	make up	～を構成する、～を成す
13	rob(bing)	(v.) ～を強奪する
14	horn	(n.) 角
15	pepper	(n.) コシヨー
16	diverse	(adj.) 多様な
17	extinct	(adj.) 絶滅した
18	orangutan	(n.) オランウータン
19	rob ～ of …	…から～を奪う
20	some ～, others …	～もあれば、…もある
21	threaten(ed)	(v.) (災害、危険などが) ～を脅かす
22	ongoing	(adj.) 進行している
23	prefecture	(n.) 県
24	policy	(n.) 政策
25	illegal	(adj.) 違法の
26	timber	(n.) 立木、樹木
27	demand	(n.) 需要
28	palm	(n.) ヤシ
29	plantation(s)	(n.) 大農園
30	so ～ that …	余りにも～なので…
31	single-crop	(adj.) 単一作物の
32	key	(n.) 手がかり、かぎ
33	aside	(adv.) わきへ
34	reserve(s)	(n.) 保護区
35	lack	(n.) 不足していること
36	rethink(ing)	(v.) 再検討する
37	couple	(n.) 一対、一組
38	comment(s)	(n.) 論評
39	result in ～	～という結果になる
40	set aside ～	～を取っておく

やり方はこのようにします。まず日本語の部分を紙で隠しながら、英単語を声に出して正確に発音し日本語の意味を言ってみます。意味が分からなければ紙をずらして意味を確認し声に出して言ってみて次に移ります。意味を見なくても分かっていたら確認しただけですぐに次の単語に移ります。このようにして全部の単語を発音して、意味を確認していきます。次に元に戻って、今度は英語の部分を紙で隠して見えないようにして日本語の意味から英単語が言えるか確認します。分かればすぐ次に移りますが、分からなければ隠している紙をずらしてその英単語を正確に大きな声で発音してから次に移ります。こういう作業をすべての単語について行います。

1日目はこれで終わりです。余り覚えた気はしないのですが、それを毎日繰り返すと4日目くらいからはかなりの数を覚えているのに気付くものです。これを6日間やって7日目には印を付けておいたどうしても覚えられないものを重点的に復習してお終い。100くらいの英単語ならば50分もかからないかもしれません。それに、慣れてくれば時間もずっと短縮できるはずで。できれば毎日同じ時間を決めて行いたいものです。なぜならば、24時間ごとと同じ記憶を強化してやるとその効果は抜群だからです。私の経験によれば、この記憶法の歩留まりは悪くて8割、良くて9割5分というところでしょうか。

理想的なことを言えば、この英単語記憶法は教科書だけでなく英単語集でも実践してほしいものです。大学入試に必要な英単語の数は、数え方にもよりますが約4000語だと言われています。1週間200語を目標にしてこのやり方をすれば、20週間で4000語となります。最速で約半年です。ゆっくりやっただとしても1年です。1年で大学入試に必要な英単語4000の約8割を身に付けることができるならばたいしたものではないでしょうか。「英単語は丸暗記するのではなく、文に出てきたときにその文脈とともに覚えよう」ということが英語教育の中では言われていますが、あえて私は丸暗記を勧める次第です。受験までは3年間と限られているので、「出てきたときに」というのではいつになるか分からないからです。

また、生徒に意味の付いた単語集を渡すからといって生徒の英和辞書使用を奨励しないものではありません。英語学習の基本はしっかりと英和辞書をひいて例文等でその単語の用法を確認して身につけることです。単語集の余白に自分で辞書をひいて確認したことをその都度書き込んで自分なりにカスタマイズすることを勧めています。

ちなみに上に挙げたLesson 4の単語試験の結果は次のようでした。1週間に1回月曜日に3回実施しました。9月26日、10月3日、10月12日です。1A4は1クラス40人で全員受験しました。1回目は80点以上8人、2回目は同10人、3回目は14人という結果でした。

まとめ

江戸時代の寺子屋では、漢文読解が主流でしたが、時代は変わって現在では英文読解が必須です。しかしながら教育の基本は少しも変わりません。素読（現在では英文を正しく発音して読む）を繰り返して暗記することが基本だと思います。暗記が軽んじられている今日、授業の2つの実践を通して、敢えて暗記を前面に押し出した論を展開してみました。

参考文献

- 平井正穂編『イギリス名詩選』（岩波文庫 1991年）
- 岡本浩一著『最強の英語上達法』（PHP新書 2002年）

(3) International Baccalaureate and the Japanese national curriculum: Are they compatible?

Kerry Winter

Translation: Chihiro Kasahara

国際バカロレアと日本のカリキュラム：2つは両立できるのか

秀光中等教育学校 ケリー・ウィンター

日本語訳 笠原 千尋

The Japanese education system while steadfastly meritocratic with its roots in Confucianism, is considered to have some of most consistently high numeracy and literacy results worldwide (PISA 2009 Results: Executive Summary, 2010) and is considered to be a “favourable context for student achievement”. However, despite its students’ outstanding academic performance on an international level, there has been some concern from stakeholders about the extent to which its students are developing innovation, critical thinking, and problem solving skills, and their ability to lead and thrive in a culturally diverse and globalised society (Iwasaki, 2013).

日本の教育システムは、儒教にその始まりを持ち、変わらず能力主義的ではあるが一貫して世界的に最も高い基本的計算力と読み書きの能力の結果を残していると考えられており（PISA 2009年 結果：エグゼクティブ・サマリー 2010）、「学生の成績には好ましい状況である」と考えられている。しかしながら、国際的レベルでの学生たちの顕著な学習成績にもかかわらず、関係者からは学生たちどの程度、創意工夫の力、批判的思考力、問題解決のスキル、そして文化的に多様でグローバル化した社会において先頭に立ち成功する能力を伸ばしているのかということについては、懸念の声があげられている（岩崎2013）。

This has resulted in a declaration by Prime Minister Shinzo Abe for Japan to do exactly that, by Japan becoming a leader of the Asia-Pacific region not only in trade, but also in its determination to “promote entrepreneurial thinking” (Abe, 2013). The International Baccalaureate Diploma Programme (IBDP) has been identified by MEXT as a framework through which these aims can be achieved, and Prime Minister Abe announced the number of IBDP schools in Japan would increase to approximately two hundred by 2018 (Council on the Promotion of Human Resource for Globalisation Development, 2012).

こうしたことから安倍晋三首相が、貿易だけではなく「起業家的思考を促進する」という決意においても、日本がアジア太平洋地域のリーダーとなることにより、まさにこれを実行する（安倍2013）と宣言したのであった。国際バカロレア・ディプロマ・プログラム（IBDP）は、文部科学省によってこうした目標を達成することのできる手段としての枠組みと考えられている。そして安倍首相は日本でのIBDPの学校数を2018年までに約200校に増やすと宣言した（グローバル人材育成推進会議 2012）。

Sendai Ikuei Gakuen High School was authorised as an International Baccalaureate World School in 2015 as the first Japanese school to offer the Dual Language Diploma Programme (DLDP), and will form an official partnership with Shukoh Middle School from March 2017 as candidate schools to offer the Middle Years Programme (MYP). Introducing an international curriculum in a traditional Japanese educational context has raised questions nationally about its projected feasibility and success. Can an international curriculum work in Japan? In what way will the Japanese curriculum will need to be compromised in order to guarantee a successful implementation?

仙台育英学園高等学校は、デュアル・ランゲージ・ディプロマプログラム（DLDP）を提供する日本で最初の学校として2015年に国際バカロレアワールドスクールとして認可された。そして2017年3月からは、MYP（Middle Years Program：小学校6年生から高校1年生までのプログラム）の候補校として秀光中等教育学校と正式なパートナーシップをとることになっている。

従来の日本の教育システムの中に国際的カリキュラムを導入することは、果たして実行可能でありうまくいくのかとの疑問を国内では引き起こした。国際的なカリキュラムは日本で機能するのだろうか。確実に成功させる

ためにどのような点で日本のカリキュラムと折り合いをつける必要があるのだろうか。

Japanese National Curriculum 日本の学習指導要領

The Japanese curriculum is one of the most thorough, coherent and academically rigorous in the developed world which has contributed to its students' high academic achievement strong workforce, and orderly society (OECD, 2010). The Japanese society highly values effort, and believes students' success to be more attributable to effort and hard work, rather than innate academic ability (OECD, 2010), which reflect its meritocratic values. In an OECD article entitled "Japan: A story of sustained excellence", the following additional values were highlighted: A commitment to investing in education of the future generation, continued consistent "international benchmarking", the incentive of obtaining a good job in the future, high expectations, emphasis on support for students transitioning to work, and moral education, which is considered to be "the most important dimension" of the Japanese education system (OECD, 2010). While its association and implementation of international values and structures has been 'touch and go', since the Meiji era, the current documented aims and objectives have a poignant 'international' flavour to them, including critical and independent thinking, creative expression, and communication

The overarching aims of the current Japanese national curriculum are to:

- i) Foster children's ability and quality to find a theme, think, judge and solve a problem on their own; and
- ii) Enable children to think about their own life, urging them to explore subjects with creativity and subjectivity and to solve problems through their own ways of learning and thinking (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan, 2009)

Additional aims of the Japanese curriculum, as outlined in the MEXT course of studies include individual development, contributing to making the world a better place, developing independence and a sense of justice, developing the knowledge, skills and expertise, and conserving traditional culture and values (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan, 2009).

日本のカリキュラムは先進国の中では最も完璧で首尾一貫し、学問的に厳しいもののひとつであり、学生の高い学力と生真面目さと規律ある社会に寄与してきた (OECD 2010)。日本社会では、努力を高く評価し、学生の成功は天賦の才能というよりはむしろ努力と勤勉によるものだ信じられている (OECD 2010)。そしてこれは能力主義の価値観を反映している。「日本：持続する優秀さの物語」と題する OECD の記事の中で、次の付加的な価値観が強調されていた。それらは将来世代への教育投資に対する強い責任、継続的で一貫した「国際的評価」、将来良い仕事につくという動機、高い期待、学生の就職支援、日本の教育システムの中で「最重要課題」と考えられている道徳教育である (OECD 2010)。国際的価値観と構造に結び付け実行することは、明治以来難しいことだが、現在の文書化された目標と目的は、はっきりと「国際的な」趣がある。例えば、批判的、自主的な思考や、創造的な表現やコミュニケーションである。

現行の日本の学習指導要領の中心となる目標は、

1. 生徒に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、
2. これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす (文部科学省 2009)

日本のカリキュラムの付加的な目標は、文部科学省の学習指導要領に概略が述べられているとおり、豊かな心をもち、国際社会の平和と発展に貢献し、公共の精神を尊び、基礎的な知識および技能を養い、伝統と文化を尊重することである (文部科学省 2009)。

International Baccalaureate 国際バカロレア

The International Baccalaureate (IB) began in Geneva in 1968 and is a curricular framework consisting of four holistic and academically rigorous programmes which are inquiry-based and foster the development of international mindedness and the "intellectual, personal, emotional and social skills needed to live, learn and work in a rapidly globalizing world" (International Baccalaureate Organisation, 2016). As of 17 October 2016, there are 5890 programmes being offered in 4537 schools around the world (International Baccalaureate

Organisation, 2016).

国際バカロレア (IB) は1968年、ジュネーブで始まった。そしてカリキュラムの枠組みは4つの全人的 (ホリスティック) で学問的に厳格なプログラムから成っている。このプログラムは探求型であり、国際人としての心構えと「急速にグローバル化する世界で生活し、学び、働くのに必要となる知的、個人的、情緒的、社会的スキル」を育むものである (国際バカロレア機構2016)。2016年10月17日現在、世界中の4,537の学校で5,890のプログラムが提供されている (国際バカロレア機構2016)。

The mission statement of the International Baccalaureate is to “develop inquiring, knowledgeable and caring young people who help to create a better and more peaceful world through intercultural understanding and respect” (International Baccalaureate Organisation). In addition to the official mission statement of the International Baccalaureate, the curriculum of the IB aims to foster international mindedness in its students which is outworked in the development of the Learner Profile (International Baccalaureate Organisation, 2015). Additionally, all IB programmes aim to “create a collaborative, global community united by a mission to make a better world through education” (International Baccalaureate Organisation, 2013). These internationally minded people whom the IB aims to develop, are encouraged to recognise their “common humanity and shared guardianship of the planet” in order to better the world in which they live, as described in its mission statement (International Baccalaureate Organisation, 2015).

IBの使命は「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、よりよい、より平和な世界を築くことに貢献する探求心や知識、思いやりに富んだ若者を育成する (国際バカロレア機構)」ことである。国際バカロレアの使命に加え、IBのカリキュラムは「IBの学習者像 (国際バカロレア機構2015)」の育成において、より国際的な視野を学生の中に育むことを目標としている。さらに、すべてのIBプログラムが目指しているのは「『教育を通じてより良い世界を築く』という使命のもとに結びつき、互いに協力し合うグローバルなコミュニティの構築を目指す」 (国際バカロレア機構2013) ことである。これらのIBが育てることを目標としている国際的な視野を持った人々はIBの使命に述べられているとおり、生きる世界をより良くするために「人類に共通する人間らしさと地球を共に守る責任」を認識することが求められる (国際バカロレア機構2015)。

The IB values student-centered learning, continuous development of approaches to teaching and learning, applying gained knowledge to global contexts, and the exploration of relevant content (What is an IB education?, 2013). Deeply constructivist in its approach, as influenced by the aforementioned educational philosophers, it encourages inquiry-based, student-lead learning in democratic classrooms (What is an IB Education?). To this end, the IB hopes students will be prepared to engage with their local and global community through inquiry, action and reflection.

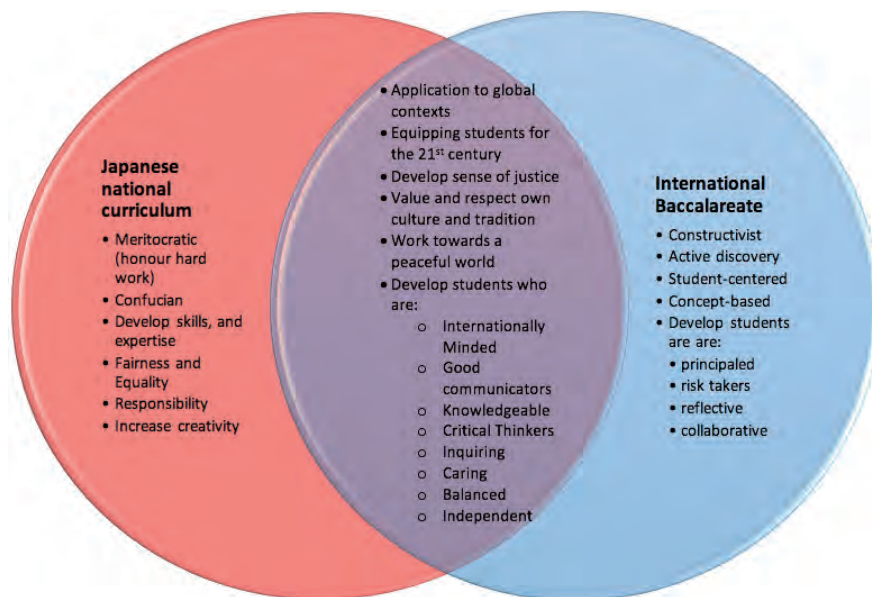
IBが大切にするのは、生徒中心の学習、協同型の学習法を絶えず発達させること、得た知識をグローバルな文脈にあてはめること、そして関連する内容を探求することである (『国際バカロレア (IB) の教育とは?』2013)。前述の教育学者によって影響されたように、方法としては非常に構成主義的 (行動を通して学ぶこと) であり、IBは開かれた民主的な教室において、探求型の、学習者中心の学習を勧めめている (『国際バカロレア (IB) の教育とは?』)。この目的を達成するためにIBが期待するのは、探求と行動と振り返りを通し生徒がローカルな社会ともグローバルな社会とも関係を持つ心構えをもつようになることである。

Comparison

比較

The Japanese national curriculum with its meritocratic and long Confucian history and the International Baccalaureate with its inquiry-based and constructivist approach to teaching and learning have uniquely different histories. However, a comparison of these two curricula shows there are significant similarities between the two. The figure below shows the aims and philosophies of both curricula respectively, with those shared in the middle.

実力主義と長い儒教の歴史をもつ日本のカリキュラムと、教授と学習に探求型で構成主義的アプローチをとるバカロレアは、大きく異なる歴史を持つ。しかし、これら2つのカリキュラムを比較すると、両者に重要な類似点がみられる。下の図は2つのカリキュラムそれぞれの目標と原理を示しており、中央部は2つに共通するものである。



As demonstrated in Figure the official documented curricula both share the objectives with the aim of fostering holistic, informed, caring and globalised students. Another similarity is a subject in the respective curricula which acts as the 'heart' and philosophy of the programme, and is expected to permeate every subject. This is the 'Morals' subject in the Japanese national curriculum, and 'International Mindedness'.

図で示されているとおり公式の文書化されたカリキュラムは、どちらも全人的で教養ある心優しいグローバルな視点を持つ学生を育てることを共通の目標にしている。もうひとつの類似点は、それぞれのカリキュラムにあり、プログラムの「コア」で哲学的働きをし、あらゆる教科に広がることが期待される教科があることである。これが日本のカリキュラムにおける「道徳」教科であり、「国際的な視野」である。

However, there is a significant contradiction between the documented objectives of the Japanese national curriculum (intended curriculum) and its outcomes (experienced curriculum); particularly as the general consensus is that the education system in Japan is succeeding because of its consistently high PISA results, even though those outcomes reflect few of the curriculum's documented aims. This can be contributed to a lack of alignment between the Japanese national high school curriculum and Japanese University entrance requirements. The summative and test-based assessment of the Japanese university entrance system does not reflect, nor expect a demonstration of the desired outcomes of the national curriculum. Because this assessment is considered to be the end goal for high school students and teachers, the pedagogy has also remained unchanged in order to prepare students for this.

しかし、日本のカリキュラムの文書化された目的（意図されたカリキュラム）とその結果（経験的カリキュラム）の間には大きな矛盾がある。特に、これらの結果は、カリキュラムに記された目標をほとんど反映していないのだが、PISAの結果が常に高いため、日本の教育システムは成功していると一般的に認められていることである。このことは日本の高校のカリキュラムと大学入試の必要条件との間につながりが欠けるせいであろう。日本の大学入試システムの統一的でテスト中心の評価は国のカリキュラムが期待する結果を実際は反映していないし期待もできない。この評価は高校生と教師の最終目標と考えられているので、学生たちに入試準備をさせるための教授法もまた変わらないままなのである。

MEXT has announced a change to the structure of university entrance examinations from 2020 which will have a closer alignment to the documented aims of the Japanese national curriculum, requiring students to demonstrate critical thinking, communication skills etc (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan, 2016). The International Baccalaureate, with its shared aims and clear and explicit documentation of its pedagogical approaches to achieve the outcomes could provide an appropriate framework to maintain an alignment between its aims, mission and outcomes.

文部科学省は2020年から大学入試のあり方を変えろと宣言した。このことは統一カリキュラムの目標とより一致するだろうし、生徒はクリティカル・シンキング（批判的思考）やコミュニケーションスキルなどを発揮することが求められることになるだろう（文部科学省2016）。IBは共通の目的とこうした目標を達成するための教授法をはっきりと明確に打ち出しているの、その目標と使命と結果に統一性を維持する適切な枠組みを提供できるだろう。

The International Baccalaureate offers support and explicit guidelines for pedagogy, and is very specific about its assessment. When all three – curriculum, pedagogy and assessment are all in alignment, the outcomes will be consistent and predictable. In conclusion to this comparison of the curriculum of the International Baccalaureate and the Japanese national curriculum, it is evident that they are indeed compatible and that if pedagogical training is conducted thoroughly, the International Baccalaureate can be implemented in such a way that it develops Internationally Minded students while also upholding the cultural values of the Japanese education system.

IBはサポートと教授法の明確な指針を提供し、評価については非常に具体的である。カリキュラム、教授法、評価の3つのすべてがつながっていると、その結果は首尾一貫し予測可能なものとなる。IBと日本のカリキュラムの比較の結論として言うと、はっきりと2つは実際に両立可能であり、もし教授法のトレーニングが徹底して行われていればIBは日本の教育システムの文化的価値観を維持しながら国際性をもつ学生を育むような形で実践できるのである。

Bibliography

- Abe, S. (2013, February 22). *Japan is Back*. Retrieved November 21, 2016, from Ministry of Foreign Affairs Japan: http://www.mofa.go.jp/announce/pm/abe/us_20130222en.html
- Council on the Promotion of Human Resource for Globalisation Development. (2012). *An interim report of the Council of the Promotion of Human Resource for Globalisation*. Retrieved November 21, 2016, from http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011interim_report.pdf
- International Baccalaureate Organisation. (2013). *What is an IB education?* Cardiff: International Baccalaureate.
- International Baccalaureate Organisation. (2015). *International Baccalaureate Organisation*. Retrieved October 20, 2016, from Education for a better world: <http://www.ibo.org/globalassets/digital-toolkit/brochures/corporate-brochure-en.pdf>
- International Baccalaureate Organisation. (2016, October 17). *International Baccalaureate Organisation*. Retrieved October 20, 2016, from Facts and Figures: <http://www.ibo.org/about-the-ib/facts-and-figures/>
- International Baccalaureate Organisation. (2016, October 15). *International Baccalaureate Organisation*. Retrieved from About the IB: <http://www.ibo.org/about-the-ib/>
- International Baccalaureate Organisation. (n.d.). *Mission*. Retrieved October 15, 2016, from International Baccalaureate Organisation: <http://www.ibo.org/about-the-ib/mission/>
- Iwasaki, K. (2013, December 4). *Will the International Baccalaureate take off in Japan?* Retrieved October 20, 2016, from <http://www.nippon.com/en/currents/d00096/>
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan. (2009). *chuugakkou gakushuu shidouyouryou kaisetsu [Junior High School Course of Studies Commentary]*. Tokyo: Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan. Retrieved from [chuugakkougakushushidouyouryou kaisetsu : http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_001.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_001.pdf)
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan. (2009). *Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan*. Retrieved October 15, 2016, from Japan's Modern Education System: http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317220.htm
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan. (2016, 8 31). *Koudaisetsuzokukaikakuno shinbojoukyou [The state of progress of high school university succession reform]*. Retrieved 11 21, 2016, from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/08/_icsFiles/afieldfile/2016/09/01/1376777_01.pdf
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan. (2016). *Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan*. Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/07/_icsFiles/afieldfile/2016/07/27/1374948_2.pdf
- OECD. (2010). Japan: A story of sustained excellence. *Strong performers and successful reformers in education: Lessons from PISA for the United States*, pp. 137-157.
- OECD. (2010). *PISA 2009 Results: Executive Summary*. OECD. Retrieved from <https://www.oecd.org/japan/46623994.pdf>
- UNESCO-IBE. (2003). *The curriculum debate: Why it is important today*. Geneva: UNESCO International Bureau of Education.

(4) ELLs (English Language Learners) in a high school IB Biology class: An Active Learning case study

James Dochtermann, M.Ed.
International Baccalaureate Diploma Programme
Foreign Language Course, Sendai Ikuei Gakuen
j.dochtermann@i-lion.org
November 25, 2016

IB生物におけるアクティブ・ラーニングの事例研究

外国語コース ジェームズ・ドクターマン
日本語訳 笠原 千尋

I. What is active learning?

1. アクティブ・ラーニングとは何か

The University of Michigan's Center for Research on Learning and Teaching (2016) defines Active Learning as "a process whereby students engage in activities, such as reading, writing, discussion, or problem solving that promote analysis, synthesis, and evaluation of class content" and is promoted through approaches that include cooperative learning, problem-based learning, and using simulations or case studies. Active Learning requires the student to think more deeply about the class content and use the knowledge to solve problems, construct new knowledge with other students, and apply this knowledge to real-life examples. "Active learning is often contrasted to the traditional lecture where students passively receive information from the instructor" (Prince, 2004). Active Learning has been employed in schools in many parts of the world for decades.

ミシガン大学の教育研究センターの定義によると、アクティブ・ラーニング（AL）とは生徒が授業内容の分析、統合と、評価を促すリーディングやライティング、ディスカッションや問題解決といった活動に関わり、協同学習と問題に基づいた学習とシュミレーションや事例研究を用いることを通して提供されるプロセスである。ALは生徒が授業内容についてより深く考え、問題解決のための知識を使い、他の生徒とともに新しい知識を構築し、そうした知識を現実の事例に当てはめることを求めている。「アクティブ・ラーニングは生徒が教師から受動的に知識を受け入れる伝統的な講義と対比されることがしばしばある」(プリンス, 2001)。ALは何十年にもわたって世界の多くの場所の学校で実践されてきているのだ。



Figure 1.

II. Why Active Learning?

2. なぜアクティブ・ラーニングなのか？

There is much research and converging evidence indicating that Active Learning encourages students to learn much more deeply with lasting understandings than by passive reception of information. Even without comparison, listening to classroom lecture is not an especially effective way to promote deep learning. Dr. Benjamin Bloom (1956) developed a taxonomic continuum to exhibit higher levels of thinking (fig.2).

情報を受動的に受け入れる場合よりも、ALによって、生徒は生涯学習としてずっと深く学ぶことができることを示す多くの調査報告と、まとまった証拠がある。比べるまでもなく、教室で授業を聞いていることは深い学習を促すのに特別効果的な方法ではない。ベンジャミン・ブルーム博士（1956）は、思考の段階を示すための分類学的連続体を開発した（図2）。

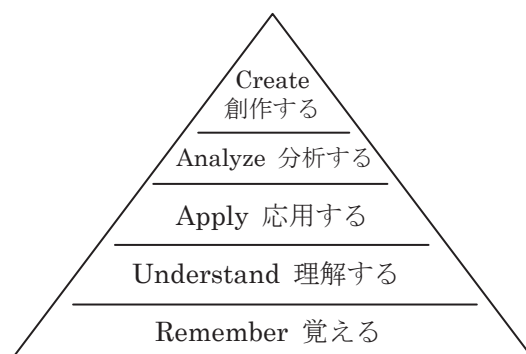


Figure 2. Bloom's Taxonomy of Learning Domains

Bloom contended that little cognitive engagement is required from the student in learning environments where remembering and understanding default to become the sole objectives of teaching and learning, resulting in low long-term retention (Bloom, 1956). Students are required to engage in the higher levels of thinking of applying, evaluating, analyzing, and creating in order to transfer and apply skills and knowledge.

ブルームは、記憶することと理解することが教授と学習の唯一の目的になる学習環境では、生徒は認識作業はほとんど要求されず、その結果低い短期記憶に留まってしまうと主張した（ブルーム，1956）。学生たちは、スキルと知識を伝え応用するために、応用し、評価し、分析し創造するという、より高いレベルの思考に関わる必要がある。

III. Case study

3. ケーススタディ（事例研究）

I teach IB biology to a small class of year 2, or junior year, students with international backgrounds that include China, Indonesia, Uganda, Japan and the Philippines. They have varied abilities in English but they are all ELLs and need language support. A variety of teaching strategies is required to help them attain the course content in their second language.

私は中国、インドネシア、ウガンダ、日本、フィリピンといった国際的なバックグラウンドを持った高校2年生の少人数クラスでIB生物を教えている。生徒の英語の能力はまちまちであるが、全員がELLで言語面でのサポートを必要としている。彼らが第二言語でコースの内容を自分のものにする手助けをするには、さまざまな教授法が必要である。

The vocabulary learning alone is a massive undertaking for all of them, so while working with the vocabulary, we address concepts within the biology content that are overarching to other subject areas such as systems and change. Active Learning strategies are constantly used in the classroom ranging from lab activities to class discussions to student presentations and more.

語彙の学習だけでも、彼ら全員にとっては大変な仕事である。そこで語彙を扱いながら、内容は生物学であるが、ラボでの活動からクラスディスカッション、生徒によるプレゼンテーションなどに至る、システムや変化といった他の教科にまたがる概念に取り組むALの戦略を絶えず教室の中で用いる。

Inquiry leads the way, prompting students to think, solve problems and make real world connections, locally and internationally. As the teacher, I do occasionally give presentations to introduce or review content or show

videos or YouTube clips that give better visuals than I can create. But the students are not allowed to be passive. They are part of an active discussion that veers in many directions. Open and close-ended questions are regularly posed before, during and after to assess prior knowledge, developing interests and understandings.

探求から始まり、生徒は考え、その問いを解決し、国の内外を問わず現実世界とのつながりを持つよう促される。教員として私が折りに触れ行うのは、題材を導入したり復習したりするためにプレゼンテーションを行ったり、私が創れるものより良い映像のビデオやYoutube クリップを見せることである。しかし、生徒は受け身の姿勢でいることは許されない。彼らは多方向に進む活発なディスカッションを構成しているのだ。以前の知識と、広がってきた興味と理解を評価するために質問を行う。授業が始まる前にする簡単な質問と、授業を受けた後にさらに答えを広げるための質問である。

We have a textbook and take 1-2 classes per topic section to do active reading. This is a process where students thoughtfully read, take notes, highlight text, ask questions and make connections in the content. We use a simple, formatted worksheet where main understandings and concepts can be organized into separate boxes as the students read through the text, adding notes or illustrations. There is a separate box to record new vocabulary and another to write down questions they might come up with.

テキストのトピックセクションごとに1,2時間を取りアクティブ・リーディングを行う。このプロセスでは生徒はじっくりと読み、メモを取り、マーカーをつけ、問いかけ、題材の中で関連付けをしていく。簡単なワークシートを用い、生徒はそこにメモや絵を付け加えたりしながら本文を読み、主な理解と概念をそれぞれのボックスの中にまとめることができる。新しい語彙を記録する欄と、思いついた疑問点を書き留める欄がある。

IB Biology Notes / Topic: <u>Climate Change</u> Section #/title: <u>4.4</u> Data-based Questions, pages: _____ Name: _____				
Greenhouse gases 	Other greenhouse gases Methane - 3rd most important G.G. ↳ can also be released by the melting of ice in polar regions - Nitrous Oxide ↳ released by some bacteria, by agriculture, & by vehicle exhausts ↳ all of the G.G. make up less than 1% of the atmosphere	Assessing the impact of G.G. 2 factors determine the warming impact of a G.G.: * its ability to absorb long-wave radiation * concentration of the G.G. in the atmosphere ↳ concentration of G.G. depends on rate of release & how long it stays there.	Long-wavelength emissions from Earth. 	Longer-wave radiation is absorbed by G.G. ↳ retains heat in atmosphere ↳ 20-30% radiation from Earth is absorbed before it reaches Earth surface ↳ 20-30% reach Earth, converted into heat ↳ 90-80% re-emitted by Earth captured by G.G. → Global Warming
Greenhouse G & climate patterns more concentration of G.G. in atmosphere = rise of global mean temp ↳ can affect climate ↳ more frequent rain, tropic storms & hurricanes	Industrialization & climate change ↳ since the start of the industrial revolution (19th cen) global temp has risen ↳ correlation between industry & increasing global temp	Burning fossil fuels ↳ combustion of fossilized organic matter ↳ for industry & transportation ↳ increase in atmospheric CO ₂ ↳ highest level ever for 800,000 years		
New vocabulary • long-wave radiation • long-wavelength			Questions (Use back of sheet if needed) • I didn't fully understand the final part of "Greenhouse gases". • what is long wave radiation? • _____ length?	

Figure 3. Active reading notes completed by student

On the back of the worksheet there is a large empty space for creating a graphic organizer that ties all the main understandings and concepts together.

ワークシートの裏には主な理解と概念のすべてをまとめるグラフィックオーガーナイザー（マインドマップ）をつくるための広いスペースがある。

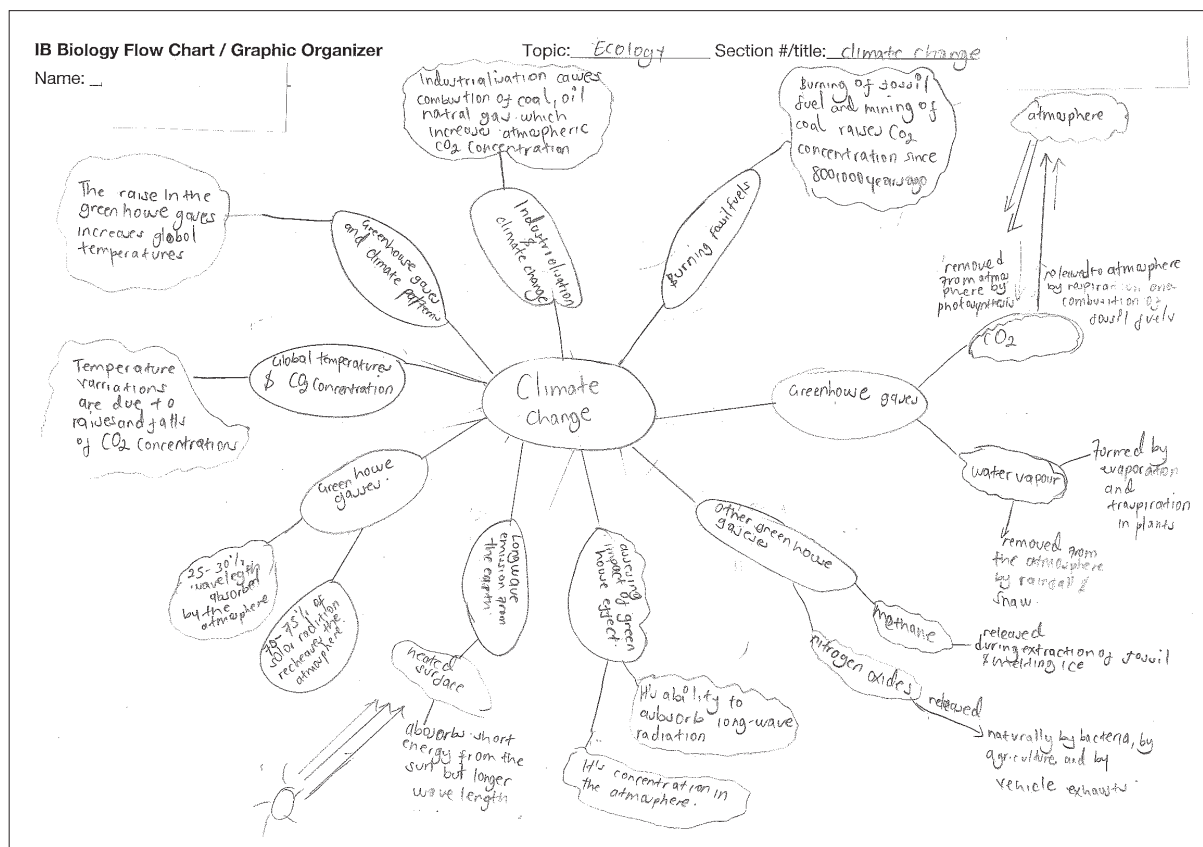


Figure 4. Graphic organizer created by student

Currently we are studying ecology and conservation. Active Learning takes many forms within a sub unit on climate change:

現在、エコロジーと環境保全について学習している。ALは気候変動についてのサブユニット内で多くの形式をとる。

Flow of activities for sub unit (about 2 weeks)
サブユニットのための活動の流れ（約2週間）

Class 1-2: Introduction to topic section 1, 2時間目：トピックセクションへの導入 -Students create KWL chart to assess what students know and want to learn about the topic 生徒はトピックについて自分が知っていることと知りたいことを評価するKWLチャートをつくる -Video about climate change with class discussion 気候変動についてのビデオとクラスディスカッション
Class 3: Active reading in textbook section 3時間目：教科書のアクティブ・リーディング -Data-based questions assigned for homework 宿題に出されたデータをもとにした質問
Class 4-6: Webquest 4～6時間目：ウェブクエスト -Students visit a website that poses general questions to them about climate change and they must answer the questions together by visiting different websites. Then they are assigned occupation roles such as climate scientist, economist or urban planner, and must answer further questions about what their occupation does by visiting a series of websites. After they researched their roles, they are “elected” by the United Nation’s Climate Change Committee to create a formal report that guides the Committee’s decisions regarding climate change. Questions and websites are provided by the Webquest to guide the students. A presentation is given to the teacher at the end.

生徒は気候変動について一般的な質問を提示するウェブサイトアクセスする。そして異なるサイトにもアクセスし、協力して質問に答えなければならない。そして生徒は気候学者や経済学者、都市プランナーといった役割が割り振られ、一連のサイトにアクセスすることで自分たちの仕事で行うことについての更なる質問に答えなければならない。自分たちの役割をリサーチした後、生徒は国連気候変動委員会から気候変動について委員会の決定に影響を与える正式な報告書をつくるよう「選出される」。質問とサイトはウェブクエストによって生徒を導くよう提供される。最後に教師に対してプレゼンテーションが行われる。

Class 7: Review and reflect

7時間目：復習と反省

- Quiz
小テスト
- Review data-based questions
データをもとにした質問の復習
- Completion of KWL chart to assess what students learned
生徒が学習したことを評価するKWLチャートの完成

Within this cycle there may be other activities that the students do such as monitoring ongoing experiments or discussions about something related to the topic from the news.

このサイトの中で生徒が行う活動が他にもあるかもしれない。たとえば、進行中の実験やトピックに関連するニュースになったものについての議論をチェックするといったことである。

One argument opposed to Active Learning in the classroom is that it costs too much time to do. This can be especially concerning with courses that have a lot of content knowledge such as the sciences or mathematics. Still the cost of lecture time can be even less efficient. Knight & Wood (2005) reported on a study in a large, university biology lecture course in which students were observed to develop significantly higher learning gains and improved conceptual understandings through the supplementing of lecture time with Active Learning approaches—as compared to those who did not. Students learn better by doing and discussing not just listening. In-class formative assessment was also observed to have a positive effect on student learning within the Active Learning context. Formative assessment and pre-class reading can be a way to mitigate time constraints with “covering content”.

教室で行うALに反対する議論のひとつは、時間がかかりすぎるということである。このことは、科学や数学といった多くの基本的な内容理解を伴う科目に特に関係する場合がある。それでも、講義時間のコストはずっと非効果的になり得る。ナイトとウッド（2005）が報告した、大きな大学の生物学の講義コースでの研究によると、学生はALの方法で講義時間を補充することで際立って高い学習効率を伸ばし、より深い理解の向上が認められた。学生は、単に聞くだけでなく、行動したり議論したりすることでよりよく学習するのである。クラスでの総括的評価もまたALの文脈の中で生徒の学習に肯定的な影響を与えることが認められる。総括的評価と授業前のリーディングは「covering content」で時間の制約を軽減する方法となり得る。

IV. How can all subject areas start implementing active learning methods and approaches?

4. どうしたらすべての教科分野でALの方法とアプローチを実施できるようになるのか

The above case study represents a nearly ideal situation for employing Active Learning: Small class size, access to technology, students predisposed to being active in the classroom. The reality for most teachers is classes of 30-40 students, no Wi-Fi, limited access to computers and students that are not used to being regularly active in the classroom.

上記の事例研究がALを使うほぼ理想的な状況を表している。つまり、少人数のクラス、技術環境が整っていること、教室では活動するものと思っている生徒の存在である。大抵の教員にとって、現実には1クラス30人から40人で、Wifiが使えず、コンピューターの使用も制限され、生徒は教室内では常に活動することに慣れていない。

Moving a classroom towards Active Learning may seem daunting at first but there are many ways to gradually do it successfully:

ALへとクラスを動かすのは最初は気後れすることがあるかもしれないが、段階的にうまく進める方法がある。

1. Active reading can be implemented quickly. Students can work in small groups to make large graphic organizers of the content on poster paper and post them around the room. Then still in groups, visit each other's posters. Questions or comments can be written on sticky notes and tagged on the poster or wall around them.

アクティブ・リーディングはすぐに導入できる。生徒は小グループで作業し、模造紙やポスターなど大きな紙に読んだ中身を大きく絵や図を使ってまとめ、それを教室に貼る。次にグループのままでお互いのポスターを見て回る。質問やコメントを付箋に記入し、ポスターやその周りの壁に貼る。

2. Small groups of students could also be assigned parts of the content and do short presentations to the class explaining it. Creativity can be integrated by allowing the students to write on the whiteboard, do role play or present with a digital platform. Questions from the rest of the class should be encouraged but if students are reluctant, they can write questions on sticky notes and give them to the teacher to read.

小グループに内容の一部を割り当てて、説明しながらクラスに短いプレゼンテーションをさせる。パソコン等を用いたデジタル・プレゼンテーションなどで発表させることで生徒の創造力を活用することができる。クラスの他の生徒からの質問は積極的に出してもらうが、もし生徒が乗り気でないのなら、付箋に質問を書いて先生に読んでもらうこともできる。

3. Think-pair-share: This is a method to give students time to think when posed a question and to talk it over with someone next to them to formulate an answer that they will share out with the class. It might not be practical to ask all pairs to share but the teacher can randomly call on a few pairs.

Think-pair-share：これは質問された時、生徒に質問を考える時間を与え、近くの人とそれについてよく話し合い、クラスで共有できる答えを導き出す方法である。各ペア全員にシェアするように言うのは実際的ではないかもしれないが、教員がランダムにいくつかのペアを指名することはできる。

4. "The Socratic Method": Ask a student a purposeful question and if the student struggles with an answer, pose the question in a different way to another student. Repeat this until the desired answer given.

「ソクラテス試問法」：生徒に目的のはっきりした質問をする、そしてもしその生徒が困った時、他の生徒に異なったやり方で質問をする。望ましい答えが出るまでこれをくり返す。

These are just some of many methods to encourage Active Learning. For more information on practical ways to implement Active Learning in your classroom, visit: <http://www.crlt.umich.edu/tstrategies/tsal>

これらはALを進めるための多くの方法の中のほんの数例である。クラスでALを始める実用的な方法の詳細については以下のURLを参照してほしい。

<http://www.crlt.umich.edu/tstrategies/tsal>

V. What are some initial challenges with Active Learning?

5. ALの初期の課題は何か

One of the biggest, initial challenges of conducting an Active Learning classroom is management. A lesson that uses methods to promote Active Learning can be noisy and appear to be chaotic or messy. Students are communicating with each other, sharing resources and at times moving around the classroom. The lesson has an appearance of a workshop and in many ways is a workshop with people working towards a common goal. This is something that takes getting used to if you are more familiar to lecture-style lessons where student sit quietly and listen, or sometimes sleep. A well-structured classroom with organized resources and rules will help give order to what can look like confusion.

ALのクラスをすすめるとき最初の最も大きな課題のひとつが、管理である。ALをすすめる方法を使う授業は、騒がしく無秩序だったり、雑然としているように見える。生徒はお互い意思を伝えあい、資料を共有し別室を歩き回ることもある。授業は、ワークショップのように見え、実際多くの点で共通の目標に向かって協力し合うワークショップである。生徒が静かに座って聞いている、あるいは眠ることもある講義形式の授業の方に慣れているのなら、これに慣れるには時間がかかる。

Another beginning challenge can be the time it takes not only for teachers, but the students to get used to being actively involved with content in the classroom. If students are allowed to be passive in their other classes, they will enter the Active Learning classroom with that mentality. They will be reluctant to share

answers or opinions and will not initiate activities. Students will break these passive habits but need time and scaffolding to do so. It is usually better to start with simple Active Learning techniques (see fig.1) that gradually help students get used to group work and other expectations of the classroom. With time, the teacher can move to more complex techniques where less guidance is needed.

もうひとつの課題は、教員だけでなく生徒が教室での内容に積極的に関わることに慣れるのにかかる時間かもしれない。もし、生徒が他の授業で受け身の姿勢でもいいとなると、ALクラスにその心づもりで参加する彼らは、答えや意見を共有することを渋り、活動を始めようとしない。生徒はこうした受身的な習慣を打破するが、それをするには時間と段階が必要だ。(図1に見られる) 生徒がグループワークや教室での他の活動に徐々に慣れるようにする簡単なALのテクニックから始めるのが大抵の場合良い。時間が経つに連れ、教員はより複雑だが指導を前ほど必要としなくなるテクニックへと移行できる。

One final challenge worth mentioning is the teacher dealing with the temptation to give answers to questions and solutions to problems. Active Learning is about engaging the students and encouraging them to think—not telling them what to know or how to do it. This can be very counterintuitive for teachers and students but must strictly be adhered to. Once you start giving answers, many students will become passive. They will think, “Why should I try to answer the question in front of my peers and risk getting it wrong? The teacher will tell us the answer soon.” Giving answers and solutions to students encourages silence and inactivity. It stifles independent thinking. It is more effective to answer a question that a student asks with another question that helps them probe the subject more deeply and look at it from a new angle.

取り上げるべき最後の課題は、疑問への答えや問題の解き方を与えたいくなる誘惑に教員が対処することだ。ALは生徒を動かし、生徒に考えさせることであり、何を覚えるべきかや、どうすべきかを教えることではないのだ。このことは教師と生徒双方にとって非常に直感に反したことであるが厳密に守らなければならない。一旦答えを与え始めると、多くの学生は受動的になる。生徒は、「どうしてみんなの前で質問に答え、間違ふ危険を犯そうとしないといけないのか。先生がすぐに答えを言ってくれるじゃないか。」と考える。生徒に答えや解き方を与えることは沈黙と怠惰を助長することになる。それは自立した思考を阻害するのである。より効果的なのは、生徒の発した質問に対し、彼らがテーマをより深く探求し新しい角度から見つめる手助けとなる別の質問で答えることである。

Time and concerted effort from teachers, along with collaborative planning and reflection upon practice, will lead to successful Active Learning in any and all classrooms. Students will benefit with enhanced learning and teachers can enjoy a dynamic and interesting practice.

時間と教員からの協力、さらに共同の計画と実践についての反省があれば、どの教室においてもALは成功するであろう。生徒は発展した学習の恩恵を受け、ダイナミックで興味深い実践を享受できるだろう。

References

- Bloom, Benjamin S., 1956, *Taxonomy of Educational Objectives: Book 1 Cognitive Domain*, Longman, New York, NY.
- Knight, J. K., & Wood, W. B. (2005). Teaching More by Lecturing Less. *Cell Biology Education*, 4(4), 298-310. doi:10.1187/05-06-0082
- Prince, M. (2004). Does Active Learning Work? A Review of the Research. *Journal of Engineering Education*, 93(3), 223-231. Retrieved November 25, 2016, from <http://www.crlt.umich.edu/tstrategies/tsal>
- University of Michigan Center for Research on Learning and Teaching. (n.d.). Active Learning. Retrieved November 25, 2016, from <http://www.crlt.umich.edu/tstrategies/tsal>

Ⅱ 研修旅行報告

(1) 特別進学コース 関西（京都・奈良）研修旅行

特別進学コース 齋藤 美咲



1. はじめに

本年度の特別進学コース第二学年の校外研修旅行は、12月19日から3泊4日の日程で、京都・奈良方面において実施された。育英祭後から本格的な指導を始め、旅行会社と連絡を密にとりながら計画を進めていった。研修中に体調を崩した生徒もいたが、参加生徒全員が無事に研修を終えることができた。以下に報告したい。

2. 計画及び事前準備と実施内容の概要

(1) 日程：平成28年12月19日（月）～12月22日（木） 3泊4日

(2) 研修地：奈良・京都

＜主な研修・見学地＞

奈良公園〔大仏殿〕、興福寺、法隆寺、宇治平等院、清水寺、三十三間堂

立命館大学 衣笠キャンパス

同志社大学 京田辺キャンパス、今出川キャンパス

(3) 参加者：生徒 201名（男子132 女子69）、引率教員10名（男7、女3）

添乗員3名（男2、女1）、看護師1名（女）、不二写場1名（男）

*不参加生徒9名（男子7 女子2）（体調不良及び諸事情による）

(4) 交通機関と宿泊場所

- ・往路 仙台駅―東京駅（やまびこ124号） 東京駅―京都駅（ひかり509号）
- ・復路 京都駅―東京駅（のぞみ226号） 東京駅―仙台駅（やまびこ145号）
- ・男子宿舎（3泊）「ホテル杉長」京都市中京区富小路御池上ル守山町172
- ・女子宿舎（3泊）「NISHIYAMA RYOKAN」京都市中京区御幸町二条下ル山本町433

(5) 自主研修と大学での研修

＜自主研修＞

校外研修第3日目に、班ごとに分かれ京都市内を中心に実施。体験学習可。事前準備として旅行会社の添乗員による相談会を実施した。

＜同志社大学での研修＞

・京田辺キャンパス

小林耕太教授、秋山いわき教授による学部紹介と模擬授業「音を脳で聴く」

学生ガイドによるキャンパスツアー

・今出川キャンパス

大学説明とキャンパスツアー

・衣笠キャンパス

(6) 事前準備

11月中旬：学年集会にて校外研修旅行概要説明

：第1回校外研修旅行委員会開催（役員選選出）

11月下旬：班編成（係決め）、自主研修計画書作成

:「参加承諾書」の提出

：食物アレルギーを含む健康調査、保護者緊急連絡先調査

：自主研修計画書の最終チェック

12月上旬：「校外研修のしおり」完成、配布

：14日校外研修旅行結団式ゼルコバホール

12月下旬：19日校外研修旅行出発式（仙台駅）～22日解散式（仙台駅）

* 校外研修旅行終了後、各自大学講義レポート、班ごとに自主研修レポート（壁新聞）、研修委員は委員としてのレポートを作成して提出

第1日目	12月19日(月)	集合 7:20 仙台駅3階 みどりの窓口前
<昼食は列車内にてお弁当>		
仙台駅 やまびこ124号 8:05 東京駅 ひかり509号 10:33 京都駅 13:11 13:40		
(乗り換え15分)		
文系	立命館大学 衣笠キャンパス	同志社大学 今出川キャンパス
14:10	15:20	17:00
理系	同志社大学 京田辺キャンパス	宿舎
14:40	16:40	17:30
		夕食18:30～

仙台駅で出発式を行い、千田副校長先生に見送られながら元気に旅立った。

東京駅での短時間での乗り換えも速やかに行い、車中はこれからの研修旅行に対する期待で盛り上がっている様子だった。

京都駅到着後は、文系は立命館大学衣笠キャンパスと同志社大学今出川キャンパス、理系は同志社大学京田辺キャンパスに移動し、それぞれの大学で研修を行った。

文系は文学部日本史研究学域の本郷真紹教授から、「自分を極める—なりたい自分になるために—」と題して、高校と大学の違い、進路を選ぶ際の心得についてご講演いただいた。講演を聞き生徒たちは大学選択の際に偏差値や倍率で諦めるのではなく、自分に厳しく必死に努力する大切さを感じたようだ。

— 44 —



第2日目	12月20日(火)	起床 6:45	朝食7:30	夕食19:00
宿舎 8:30 10:00 奈良公園 (東大寺大仏殿) 11:10 11:20 奈良公園 (興福寺) 12:00				
写真5	法隆寺 12:50 14:50		写真6	宇治平等院 16:20 17:30 18:30 宿舎
昼食				

12月20日(火) 晴れ時々曇り 研修旅行第2日目

宿舎からバスで最初の研修地である奈良県に向かった。クラス集合写真を撮った後、ガイドの方々に説明していただきながら大仏殿を見学した。生徒たちは大仏殿と高さ15メートルの大仏の大きさに圧倒されている様子であった。続いて近くの興福寺に移動し、阿修羅像や重要文化財の木造阿弥陀如来像等が展示されている宝物館を見学した。昼食後法隆寺に移動し、金堂や五重塔等世界最古の木造建築群を見学した。ガイドさんの詳しい説明に熱心に聞き入っている様子であった。続いて宇治平等院鳳凰堂に向かい、夕暮れの中荘厳な平等院を散策して無事宿舎に戻った。



第3日目	12月21日(水)	起床 6:45	朝食 7:30	夕食 18:00
宿舎	8:30	京都市内 グループ別自主研修 〈昼食は各自〉		17:00 宿舎

12月21日(水) 晴れ 研修旅行第3日目

研修旅行第3日目は自主研修日である。生徒たちが楽しみにしていた校外研修旅行最大の行事である。各班とも何度も検討を重ね、コースは事前に旅行業者の協力を得て完成させた計画である。

8時30分に各班元気よく出発し、昼の定時連絡では、すべての班が概ね予定通りに研修を進めているとの報告があった。17時にはほとんどの班が戻り、生徒たちの表情から、各班内容の濃い自主研修となったことが窺えた。



第4日目	12月22日(木)	起床 6:45	朝食 7:30
宿舎 8:30 9:00 清水寺 10:50 11:00 三十三間堂 11:30			
12:00 京都駅 13:05 のぞみ226号 15:23 東京駅 16:00 やまびこ145号 18:04 仙台駅			
＜昼食は列車内でお弁当＞			

12月22日(木) 曇り 研修旅行第4日目

本日は研修旅行最終日である。荷物をまとめるのに時間がかかったものの、部屋をきれいに片づけて集合することができた。最初に清水寺に行き研修を行った。本堂から張り出す「清水の舞台」は高さが13メートルあり、桜と紅葉の名所である。音羽の滝、縁結びの地主神社などを散策し、次の研修地三十三間堂に移動した。三十三間堂、正式名称蓮華王院は本堂内陣の柱が33本あることからこの名称で知られている。左右に500体ずつ千手観音立像、中央に千手観音坐像が並ぶさまは壮観で、生徒たちも圧倒されていた。

その後、多くの研修の思い出とお土産を持ち、京都12時発のぞみ226号に素早く乗車した。東京駅での乗り換えも混乱なく、やまびこ145号で仙台に向かった。

仙台駅定刻到着後、出迎えの結城教頭先生へと帰仙の挨拶をして、解散式を行った。

4. おわりに

今回の研修旅行では、日本の伝統文化に触れるとともに、見聞を通して知識・教養を高めることができた。また、団体行動を通して生徒は協調性、自律性を身につけて、友人同士あるいは教員との交流を深め、高校生活でかけがえのない思い出になったように思う。生徒たちがこのような貴重な研修を無事に行うことができたのは、事前より多くのご高配を賜りました、加藤雄彦理事長・校長先生のお力添えがあつてのことです。この場をお借りいたしまして、加藤雄彦理事長・校長先生に心からお礼申し上げます。

また、ご指導、ご鞭撻をいただきました千田副校長先生、結城教頭先生、トップツアーズの後藤さんはじめ三名の添乗員の皆さん、看護師さん、写真の丹野さん、同志社大学・立命館大学の先生方、先輩方、ほか京都、奈良でお世話になった皆様方にも厚く御礼申し上げます。



(2) 外国語コース 第1学年ハワイ研修報告

外国語コース 赤間 ゆき

1. はじめに

今年度の外国語コースのハワイ研修は、2班編成で実施いたしました。私が引率をさせていただいた第1班の研修について主にご報告させていただきます。研修内容は大きく2つに分かれています。

1つ目は、Global Villageという語学学校での研修です。Global Villageはアラモアナショッピングセンターの前に位置しており、通学にも便利な学校で、様々な国から来た生徒達が英語力向上のために勉学に励んでいます。また、英語だけではなく、ハワイの名所での豊富なアクティビティを通してハワイ特有の文化や生活を経験することができます。外国語コースの生徒達も、午前中は英語の授業を受け、午後はハワイの様々な観光地でアクティビティを行いました。

2つ目はホームステイ先での生活です。生徒たちは2～3人のグループに分かれ、ハワイの各家庭でホームステイを行いました。11月24日のサンクスギビングデーや、語学学校が休みの土日はホストファミリーと終日一緒に過ごしました。英語でコミュニケーションを取りながら、ハワイの文化を肌で体験することができました。

2. 研修期間と参加人数及び引率教員

①第1班：平成28年11月19日（土）～12月3日（土） 13泊15日間

参加人数：15人、引率教員：赤間 ゆき

②第2班：平成29年 1月14日（土）～1月27日（金） 12泊14日間

参加人数：16人、引率教員：安住 祥

3. 事前研修

事前研修は第1班と第2班合同で主にLHRの時間を使って行い、ハワイでの経験が豊富な秀光のブライアン先生にご指導いただきました。ハワイの基本的な知識を身につけるよう、歴史や文化、習慣についてスライドを用いながら実体験に基づいた興味深いお話をさせていただきました。また、ホームステイ先でも円滑にホストファミリーとの生活を送れるよう、自己紹介の仕方や日本とハワイのコミュニケーションの仕方の違いについても教えていただきました。場面ごとに臨機応変な対応が取れるよう、実践的な英語について学びながらグループごとにスキットを作成し、発表をしました。

4. 研修スケジュール

日次	月日曜	発着時／ 滞在地	発着 現地時間	交通 機関名	午前	午後	宿泊
1	11/19 (土)	学校集合 成田空港発 ホノルル空港着	12:00 21:20 09:43	学校バス DL-580 専用車	多賀城校舎から学校バスにて空路ホノルルへ 空港到着後、滞在中の諸注意等説明 各ホストファミリー宅へ		ホーム ステイ
2	11/20 (日)	ホノルル			ホストファミリーとの時間を過ごす		〃
3	11/21 (月)	〃			Global Villageにて語学 研修 ・オリエンテーション ・英語テスト ・英語クラス	ILHAにて アール大川先生、トヨ コ先生による講義	〃
4	11/22 (火)	〃			・英語クラス	・パールハーバー見学	〃

日次	月日曜	発着時／ 滞在地	発着 現地時間	交通 機関名	午前	午後	宿泊
5	11/23 (水)	〃			・英語クラス	・ダイヤモンドヘッド ハイキング	〃
6	11/24 (木)	〃			サンクスギビングデー ホストファミリーとの時間を過ごす		〃
7	11/25 (金)	〃			・アラモアナビーチパークにてフラダンス		〃
8	11/26 (土)	〃			・ホストファミリーとの時間を過ごす		〃
9	11/27 (日)	〃					〃
10	11/28 (月)	〃			・英語クラス	・チャイナタウン散策 ・ホノルルダウンタウン散策	〃
11	11/29 (火)	〃			・英語クラス	・ワイキキ水族館 ・ワイキキビーチ散策	〃
12	11/30 (水)	〃			・英語クラス	・修了式 ・アラモアナビーチ パークにてゲーム	〃
13	12/1 (木)	ホノルル空港発	14：47	DL-617	ホストの送迎で空港へ、出国手続き後、空路、 成田へ		機内
14	12/2 (金)	成田空港着	19：35	学校バス	入国手続き後、学校バスにて成田ビューホテル へ		ホテル
15	12/3 (土)	学校着	14：00	学校バス	ホテルより、学校バスにて仙台へ 多賀城校舎到着、無事解散		

5. 研修内容

【第1日目 11月19日（土）】

成田空港に、予定よりも1時間程早くバスが到着し、余裕を持って行動することができました。チェックイン後自由時間を取り、生徒達は食事をしたり、ホストファミリーへのお土産を買ったりしていました。飛行機は気流が悪い箇所があり、度々揺れることがありました。飛行機の中でぐっすり眠れた生徒、眠れなかった生徒、それぞれようでした。

ホノルル空港に到着すると虹が出ていて、みんな初めてのハワイに感激しているようでした。入国審査はやや混みあっていましたが、生徒達は事前研修で英語での言い方を習った、旅の目的や滞在期間を伝え、指紋や写真の撮影もスムーズに行っていました。

空港の出口を出るとすぐに、ホームステイ会社のナオミさんが迎えてくれました。オリエンテーションをしていただき、ホームステイやハワイで生活する上で注意すべきことをお話いただきました。生徒たちは携帯電話を受け取ると、それぞれ迎えに来て下さったホストファミリーと各家庭へ出発しました。みんな緊張しているようでしたが、どの家庭も温かく迎え入れて下さっていました。ここからいよいよハワイでのホームステイ生活が始まります。



成田空港出発（第1班）

【第2日目 11月20日（日）】

2日目は各ホームステイ先での自由行動の日でした。生徒たちに電話で様子を聴いてみると、早速ホストファミリーにビーチ等、様々な場所に連れて行ってもらっているようでした。順調にホストファミリーとの仲を深めているようです。また、この土日で生徒たちにはGlobal Villageへのバスでの行き方をホストファミリーと共に確認してもらい、明日からの授業に備えてもらいました。私も実際にバスで学校に行って場所を確認し、翌日から始まる授業への期待を胸に、この日は帰路につきました。

【第3日目 11月21日（月）】

Global Villageでの授業が始まり、初めて学校へバスで登校しました。週末のうちに各家庭でバスの乗り方を確認したり、実際に学校に来る練習をしたりしてもらいましたが、一組だけ、バスに乗り遅れてしまった生徒達がいきました。30分程遅れての到着となりましたが、無事に全員学校に到着することができました。

授業では、まず生徒一人ずつ先生と面談を行いました。学校では必ず英語を使わないといけないというルールを教えられ、少し緊張している様子でしたが、最初の授業は、ハワイの地理、名産、言葉、人物等についてクイズ形式で進み、楽しみながら取り組めていました。



Global Village での授業初日（第1班）

お昼前の授業では、学校の目の前にあるアラモアナショッピングセンターに行きました。与えられた課題の答えを探しに、店員さんに話しかけたり、英語でのコミュニケーションに積極的に挑戦していました。例えば、「ハーゲンダッツで一番安いアイスはいくらか？」等です。それぞれのチームが協力して、課題に取り組んでいました。

お昼は初めてアラモアナショッピングセンターのフードコートでのランチとなりました。アメリカンサイズの量に驚いている生徒もいましたが、みんなお腹がいっぱいになるくらい食べ、大満足の様子でした。



アラモアナショッピングセンターでのアクティビティ
（第2班）



初めてのフードコート（第1班）

午後からはILHAにて、アール大川先生とトヨコ先生による講義がありました。Global Citizen（グローバルシチズン）になるための以下の5つのattribute（資質）についてお話ししていただきました。

- Open-minded（オープンマインド）
- Nonjudgmental（偏見を持たない）
- Curiosity-seeker（探求心）
- Risk-taker（挑戦する）
- Communication skills（コミュニケーション能力）

失敗を恐れないことや、self-esteem（自己尊重）の重要性等、充実した人生を送る上で、とても大切なことを教えていただきました。生徒達にとって自分自身のことを見つめ直し、将来について真剣に考えるととても貴重な機会になったと思います。

授業後、帰りのバスでは、まだ乗り換えに戸惑っている生徒もいるようでしたが、バスの運転手さんに直接帰り方を聞いてみたり、果敢に英語でのコミュニケーションに挑戦しているようでした。ILHAでの講義を受けて、早速何事にも前向きに、挑戦的に行動が取れるよう意識が向いてきているようでした。



オオカワ先生、トヨコ先生による講義（第1班）

【第4日目 11月22日（火）】

午前中は英語のレッスンを受け、午後からパールハーバーへ向かいました。ちょうど75周年記念の時期で少し混みあっているようでしたが、到着するとまず、ブラスバンドの演奏が迎えてくれました。

「マイティ・モー」の愛称で親しまれている戦艦ミズーリ号に乗ると、現地のガイドの方に歴史的背景をお話しいただきました。特に、第二次世界大戦の降伏文書の調印式が実際に行われた場所では、一人一人が真剣に話に耳を傾けていました。歴史上の有名な人物が、何時頃、どのあたりで、どのような状況で調印を行ったかを、詳細に話して下さい、船の上でその映像が目浮かぶようでした。

その後、ミズーリ号に追突した神風特攻隊の話をしていただきました。実際に特攻隊の機体がぶつかり船が少しへこんだ部分を見て、戦争の生々しさを感じました。19歳ほどの若さで、国のために命をささげた兵士の話に、生徒たちはとても心を打たれたようでした。兵士達が突撃前に家族へ送った手紙を見て、多くの生徒が涙を流していました。自分達とあまり年齢がかわらない兵士達の生き様に、考えさせられるものがあったようです。今まで教科書でしか習ったことのなかった歴史の事実を、実際に見て、聞いて学ぶことができ、とても有意義な研修になりました。

研修後、一旦Global Villageに戻って、それぞれバスでホームステイ先に帰って行きましたが、バスでの通学にも慣れ、この日は無事に帰宅できたようでした。



戦艦ミズーリ号（第2班）

【第5日目 11月23日（水）】

午前中の英語の授業を終え、午後からダイヤモンドヘッドに向かいました。この日は加藤聖一先生にも同行していただき、様々な場面でサポートしていただきました。

早朝に雨がざっと降りましたが、登山中は良い天候に恵まれました。市バスで入り口まで行き、登山を開始しました。生徒全員女の子ということもあり、はじめは山の頂上を見上げ、あそこまで登れるかどうか不安げな子もいましたが、山道に慣れてくると、どんどん歩を進めていきました。途中急な階段に一瞬ひるみましたが、みんな声を掛け合いながら進みました。時折校歌を合唱し、お互いに元気づけ合っている場面もありました。

トンネルを抜け、坂道を登りきると、ワイキキを望む絶景が目飛び込んできました。

みんな登りきった達成感で、とても気持ちが良いさそうでした。それぞれ素晴らしい景色とともに写真をたくさん撮っていました。下山後、聖一先生から生徒達全員に冷たくて美味しいパイナップルをいただき、みんなで美味しくいただきました。みんな充実感に満ち溢れた清々しい表情をしていました。



ダイヤモンドヘッド山道（第2班）



ダイヤモンドヘッド頂上（第1班）



ダイヤモンドヘッド頂上（第2班）

【第6日目 11月24日（木）】

Thanksgiving Day（感謝祭）のため、学校は休校でした。Thanksgiving Dayはアメリカの祝日で親族や友達と一緒に集まり一緒に食事をします。特にターキーの丸焼きを食べることがメインイベントになっています。電話で生徒たちの様子を聴いてみると、やはりみんなホストファミリーのお宅でターキーをいただいているようで、アメリカ文化を体験できたようでした。また、普段は会わないホストファミリーの親戚や友人達とも会い、初対面の人ともコミュニケーションを取る良い機会になったようです。この時期に研修に来ることができた生徒達は、貴重な体験ができ、とても恵まれていると改めて実感した一日でした。

【第7日目 11月25日（金）】

この日も学校は休校のため、英語の授業はありませんでした。その代わりに、アラモアナビーチパークにてフラのレッスンがありました。2名のフラの先生達と一緒に、リラックスした雰囲気の中、練習が行われました。生徒達はフラの独特なステップや動きを徐々にマスターしていきました。20分程すると、ほとんどの生徒がリズムに合わせ、上手に踊れるようになりました。先生の「kahea（カヘア）」というフラを踊るときの最初のかげ声に、生徒達も「はい」という意味の「ae（アエ）」という言葉で元気に応じていたのが印象的でした。気持

ち良い風の中、たくさん体を動かして生徒達はとても心地良さそうでした。ハワイでの大切な思い出の一つになったようです。

この日は午前中で解散となりました。帰り際はThanksgiving Day後に始まるブラックフライデーと呼ばれるバーゲンセールで買い物をしている生徒が多かったです。普段とはまた違うアラモアナショッピングセンターの活気の中、ショッピングを楽しんでいるようでした。



フラのレッスン（第1班）

【第8日目 11月26日（土）】

この日も学校は休みのため、生徒達は各ホストファミリーとの時間を過ごしました。電話で様子を聴いてみると、それぞれ様々な場所に連れて行ってもらっているようでした。ショッピングやビーチに行った家庭が多く、アウラニのディズニーリゾートに連れて行ってもらった生徒もいました。中には、ホストファミリーが指導している子供向けの英語の塾と一緒に混ざってもらい、勉強をした生徒もいるようでした。

どの生徒達も、すっかりホストファミリーと馴染み、楽しいひとときを過ごせいているようでした。この週末がホストファミリーと一日中ゆっくり過ごせる最後の機会となりますので、一緒に時間を思う存分楽しんでもらいたいと思います。

【第9日目 11月27日（日）】

土曜に引き続き、日曜も生徒達はホストファミリーとの時間を過ごしました。この日もビーチやショッピングに行った家庭が多かったようです。この週末で生徒達は様々な場所に行き、アラモアナ以外のハワイも随分知ることができたようでした。

ある生徒から、バスで隣になった人に突然話しかけられ肩を組まれ、戸惑ってしまったという相談がありました。様々な人とコミュニケーションが取れるようになることは大切ですが、嫌なことははっきり「No」ということ、不信感を感じたら、すぐにその場を離れること、1人で出歩かないこと、ホームステイの門限である17時を守ること等を伝えました。研修も終盤になり、ハワイでの生活にも少し慣れてきたところですが、最後まで気を抜かず、無事に帰国できるよう、他の生徒にも指導を徹底していきたいと思います。

【第10日目 11月28日（月）】

4日ぶりに学校で英語の授業がありました。授業も残り僅かとなってきていますので、先週よりもたくさん発言しようと意気込んでいる生徒達の姿が見られました。

午後はチャイナタウンとダウンタウンに行きました。最初にチャイナタウンを散策しました。ハワイの中に突如中国風の町が現れ不思議そうでしたが、ハワイにいながら中国文化も体験することができました。また、近くに出雲大社もあり、お参りをしたりしました。日本を思い出して、少し恋しくなった生徒もいたようです。



チャイナタウン散策（第2班）

その後はダウンタウンに向かいました。近代的な州政府ビルの後ろに、ハワイ王朝の宮殿、イオラニパレスがありました。建物のすぐ近くにリリウオカラニ女王の銅像が立っており、Global Villageの先生から女王は幽閉され部屋の中でキルトを作っていたのだというハワイ王朝の悲しい歴史について教えていただきました。また、この宮殿にある電灯は、世界で初めて公共の施設で使われた、珍しいものなのだというお話もありました。

カメハメハ大王像を見た後に、近くにあるカワイアハオ教会という所に立ち寄りました。この教会の壁は全てサンゴでできているようで、生徒達はとても驚いていました。

最後に大きなクリスマスツリーがたくさん飾られている施設に行きました。すっかりクリスマスの雰囲気になったハワイの町を体験することができたようです。

ホームルームで生徒達に帰国の準備の話をしました。Eチケットやパスポートの確認、スーツケースの重さ等について気を付けるように話しました。まだまだ続きそうなハワイ研修も、残りわずかということを実感してきたようです。もっとハワイにいたいという生徒、日本が恋しくなってきた生徒、それぞれのようですが、どの生徒も残りの期間で多くのことを吸収しようと研修に臨んでいました。



カメハメハ大王像（第1班）

【第11日目 11月29日（火）】

午前中の英語の授業を終えて、午後からはワイキキビーチ方面へ向かいました。いつもはアラモアナショッピングセンターのフードコートで昼食を取っていますが、この日はワイキキビーチ周辺のレストランで食事をしました。

その後はワイキキ水族館に行きました。アメリカの公立水族館としては、2番目に古い歴史を持っているそうです。入口で配られるオーディオガイドで、多くの生徒が英語に挑戦していました。ハワイの水族館ということで珊瑚の展示や、日本では見たことのないハワイ固有の珍しい海洋生物がたくさんいました。日本とはまた違った水族館を楽しんでいる様子でした。



レストランにて（第2班）



水族館のサンゴ（第1班）



ワイキキ水族館（第1班）

最後はワイキキビーチに向かい、そこで泳ぐ生徒と、ショッピングに行く生徒に別れました。生憎の天気です。折小雨が降っていたため、肌寒い中での海水浴となりました。しかし、波に乗ったり、浮き輪で浮かんでみたりと、生徒達は元気いっぱいでした。ショッピングに行った生徒達は土産を買ったりして、残り僅かとなったハワイでの買い物の時間を楽しんでいました。



ワイキキビーチ（第1班）



みんなでジャンプ（第2班）

【12日目 11月30日（水）】

最終日のGlobal Villageでの授業は、ハワイの食文化についてでした。特に、ハワイの伝統料理について学びました。はじめに、パソコンでリサーチを行い、その後作り方について学びました。そして実際にアラモアナショッピングセンターのハワイアンフードのお店に行き、授業で学んだ食べ物をいただきました。ポイという里芋を蒸したもの、ロミロミサーモンというサーモンを玉ねぎや塩で揉んだ物等、今まで食べたことのない食べ物ばかりで、昔ながらのハワイの食文化を経験することができました。

食事のあとGlobal Villageに戻り、修了式を行いました。一人一人先生から修了証書とレイを頂きました。どの生徒も達成感に満ち溢れた表情をしていました。代表生徒に、お世話になった先生に、感謝の気持ちを英語で伝えてもらいました。とても素晴らしいスピーチでした。



修了式（第1班）



修了式（第2班）

午後はアラモアナビーチパークに行き、水風船を使ったゲームをしたり海水浴をしたりして楽しみました。前日は雨でしたが最終日は幸い天候に恵まれ、ハワイらしい日差しの中みんな最後のアクティビティを思い思いに楽しんでいました。生徒達の2週間の研修を称えるように、ハワイ滞在中に見た中で一番大きな虹が出ていました。



アラモアナビーチパーク（第1班）



ビーチでボール遊び（第2班）



雨上がりの虹（第1班）

6. 終わりに

この2週間で、生徒達は本当に様々なことに挑戦し、たくさんのことを学び、経験することができました。ハワイでのかけがえのないこの経験は、日本に戻ってからも長い人生の中、彼女たちの生きる力になることと思います。この経験を生かして、これからもたくさんのことを学んでいってほしいです。

また、私自身もこのような貴重な機会を与えていただけたことに、改めて感謝の気持ちでいっぱいです。加藤雄彦校長先生をはじめ、高橋郁夫教頭先生、国際センターの尾形さん、小畑さん、外国語コースの先生方にたくさんのご支援を頂き、この素晴らしいハワイでの研修を経験することができました。この経験を必ず今後の教育活動に生かしていきたいと思います。ありがとうございました。

(3) 英進進学コース 沖縄研修旅行報告

英進進学コース 佐々木正人

1. はじめに

英進進学コース第三学年の本年度の校外研修旅行は、昨年と同じ4月11日月曜日から4月14日木曜日までの3泊4日の日程で、沖縄県において実施されました。生徒はこの研修旅行を通して、東北地方と異なる沖縄県の文化や自然に触れながら、太平洋戦争の悲惨な状況や歴史を理解し、平和の大切さを学ぶことができました。研修中に体調を崩した生徒がわずかに見られましたが、大きな問題もなく、参加生徒全員が無事に充実した研修を行うことができましたので、ここにご報告致します。

2. 研修目的

- (1) 日本最南端である沖縄の歴史と自然に触れ、独特の文化や産業についての理解を深める。
- (2) 平和祈念資料館や首里城、沖縄国際大学での研修を通して太平洋戦争（第二次世界大戦）中の悲惨な状況や、戦後の本土とは異なる歴史を理解し、平和であることの尊さを感じ、平和を希求することの重要性に思いをはせる。
- (3) 集団行動を通じて、きまりを守り、生徒同士、または生徒と教師の人間的な交流を深め協調性を養うこと。
- (4) グループ活動を通じて、互いに助け合い、連帯感を培い、また自分の体調を自分で管理自制できること。
- (5) 公衆道徳を守り、一人の社会人として社会性を身につけること。

3. 研修日程

平成28年4月11日（月）～平成28年4月14日（木） 3泊4日

4. 参加者

平成28年度 英進進学コース第3学年生徒 計173名（男子109名、女子64名）

引率教員 計9名（阿部広美、北村悦子、中居麻美、伊藤慶一、浅沼一夫、

渥美 琢、佐々木正人、井上晶子、小笠原まどか）

添乗員 計3名

5. 行程

第1日目

10：15 仙台空港1階中央噴水広場 集合
10：55 仙台空港 発（昼食は機内）
14：55 那覇空港 着
17：20～ 首里城
18：00過ぎ ネストホテル那覇 着

第2日目

9：00 ネストホテル那覇 発
9：50～ 沖縄国際大学、嘉数高台
12：45～ イオンモールライカム（昼食）
14：30～ おもろまち（那覇市内にて自主研修）
19：00 ネストホテル那覇 着

第3日目

8：30 ネストホテル那覇 発
8：50～ 旧海軍司令部壕

10:20～ 平和祈念資料館・平和の礎
 12:00～ 優美堂（昼食）
 15:00～ 沖縄海洋博記念公園（美ら海水族館）
 17:30～ ホテルリゾネックス名護 着

第4日目

8:00 ホテルリゾネックス名護 発
 9:30～ おきなわワールド
 12:10～ 那覇空港 着（昼食は弁当）
 14:10 那覇空港 発
 16:45 仙台空港 着
 17:15 仙台空港 解散

6. 宿泊地

ネストホテル那覇（4月11日、4月12日宿泊）

〒900-0036 沖縄県那覇市西1-6-1 TEL 098-868-1118

ホテルリゾネックス名護（4月13日）

〒905-0008 沖縄県名護市字山入端247-1 TEL 0980-53-8021

7. 研修旅行記録

第1日目（4月11日）

10時15分に予定通り仙台空港1階の噴水広場に集合し、11時55分に仙台空港を出発しました。生徒は、初めて飛行機に乗るといふ人も多く、緊張していましたが、添乗員の方々や引率教員の説明を静かに聞き、無事に沖縄に向けて出発することができました。機内では飛行機が初めての生徒が離陸と同時に歓声を上げ、沖縄への旅の始まりを楽しんでいました。



写真1：仙台空港にて



写真2：沖縄へ出発

14時55分に那覇空港に無事到着し、今度はバスにて首里城に向かいました。飛行機とバスを乗り継いでの長旅でしたが、生徒はまだまだ元気いっぱい、窓から見える沖縄の町に興奮していました。バスの中では、沖縄のバスガイドさんが、「シーサー」などの沖縄の文化について説明をしてくださいました。



写真3：バスの中での様子

研修地1：首里城

17時20頃、バスは首里城に到着しました。首里城は、琉球王国の居城として15世紀から廃藩置県まで約500年にもわたって沖縄の政治、外交、文化の中心地となっていました。首里城は1945年の沖縄戦で焼かれて

しまいましたが、1992年に沖縄の本土復帰20周年を記念して国営公園として復元され、今回私達が訪れた今の首里城となりました。復元は、18世紀以降の姿をモデルにしています。また、中国と日本の築城文化を融合した独特の建築様式や石組み技術には、高い文化的・歴史的価値があるとされ、首里城跡は2000年の12月に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の1つとして世界遺産に登録されました。国営公園は、首里城正殿を中心として、守礼門や園比屋武御嶽石門（そのひゃんうたきいしもん）円覚寺跡などの文化財からなります。鮮やかな朱色に彩られたその姿は、王国の歴史、文化の息吹を伝える沖縄のシンボルそのものといえるでしょう。



写真4：首里城到着



写真5：首里城跡を歩く生徒達



写真6：首里城前①



写真7：首里城前②



写真8：首里城前③



写真9：首里城売店にて

生徒は研修旅行の最初の地ということで、沖縄で最も有名な観光地である首里城跡地を興奮しながら歩き、からだ全体で沖縄の空気や文化を感じようとしていました。復元された首里城の威風堂々たる姿には生徒全員が感動し、展示物を通して沖縄の歴史や文化にさらに興味がわいたようでした。その後、18時すぎに宿泊地であるネストホテル那覇に到着し、18時30分に班長会議、19時に夕食を食べ、23時に完全消灯して1日目を終えました。

第2日目（4月12日）

8時に朝食を食べ、9時にネストホテル那覇を出発し、本日最初の見学地である沖縄国際大学に向けて、バスは出発しました。体調を崩すような生徒もなく、生徒はまだまだ元気があり余っているほどでした。

研修地2：沖縄国際大学「スマイライフ」

9時50分頃、沖縄国際大学に到着しました。沖縄にはアメリカ軍の基地が町中に普通にあり、沖縄の人にとって「基地がある日常」は当たり前となっています。現役大学生が行う平和ガイド「スマイライフ」は、普天間基地に隣接している沖縄国際大学の学生達が2006年に結成したサークルで、嘉数高台公園内にある戦跡や普天間基地が一望できる展望台を巡り、平和についてともに考え、語り合う体験プログラムです。

研修は、班に分かれて行われ、大学到着後に沖縄国際大学の説明会を聞き、嘉数高台で展望台、トーチカ、3つの塔を大学生の解説を聞きながら見学していきました。途中小降りの雨が降ったりもしましたが、生徒は、歳が近い大学生の話を真剣に聞き、戦争の事実と基地の現状を深く考えることができました。展望台からは、普天間基地でアメリカのヘリコプター「オスプレイ」が飛ぶのを見ることができ、東北にはない「基地」というものを実感することができました。



写真 10：校門



写真 11：説明を聞く生徒達①



写真 12：説明を聞く生徒達②



写真 13：説明を聞く生徒達③



写真 14：説明を聞く生徒達④

研修地 3：イオンモール沖縄ライカム

12時過ぎに沖縄大学を後にし、12時45分頃にイオンモール沖縄ライカムに到着しました。生徒はここで各自昼食を取り、買い物をすることができます。イオンモール沖縄ライカムは、在日米軍専用ゴルフ場だった泡瀬ゴルフ場跡地で行われたアワセ土地区画整理事業区域の商業ゾーンに建設され、沖縄県内最大の商業施設となりました。施設は、沖縄の伝統的な家屋に見られる赤瓦をイメージしたデザインをしており、観光にも向けられたリゾートモールとしても位置付けられています。施設の入り口には、まるでリゾートホテルのようなアライバルゲートがあるほか、シーサーが各所に配置され、非常に沖縄のイメージに合っています。また、イオンモールに入っただけに大きな水槽に驚かされます。水槽容量100tを超える鑑賞用大水槽には、大小様々な色とりどりの魚が泳いでいます。ちなみに「ライカム」とは、かつて北中城村比嘉地区におかれていた琉球米軍司令部（Ryukyu Command headquarters）の略に由来しています。生徒は施設の大きさに驚きながら、昼食に各々で選んだ沖縄の名物を舌鼓をうっていました。



写真 15：
施設の入り口のシーサー像①



写真 16：
施設の入り口のシーサー像②

研修地 4：国際通り付近：自主研修

14時30分頃におもろまちで解散し、生徒は国際通り付近で自主研修となります。このために、生徒は昨年度からこつこつと班ごとに沖縄の文化や歴史を調べ、自主研修の計画について話し合ってきました。集合時間である19時まで、生徒は慣れない沖縄の町を、自分達で立てた計画をもとに探索します。沖縄県の街並みは、地域によって大きく異なります。沖縄の中心で都会的な那覇、琉球王国時代の雰囲気を残す首里、アメリカ的な中部、豊かな自然がいっぱいの沖縄本島北部ヤンバル、すばらしい海に囲まれた宮古・八重山など、場所によって様々な特色があります。その全てを心行くまでまわることにはできませんが、少しでも自分の足で歩いて感じて欲しいと思います。解散の合図とともに各々ばらばらに散っていく生徒の後姿も、どこか不安げに見えました。

自主研修地1：国際通り

国際通りは自主研修の中心地で、ほとんどの生徒が自主研修の計画に入れていました。那覇市の中心となる約1.6 kmほどの通りで、「奇跡の1マイル」と呼ばれるほど、第二次大戦で焼け野原になった沖縄の復興の象徴となりました。脇にある「市場本通り」や「平和通り」とともに、見て歩くだけでも十分楽しめる場所です。メインの通りを歩くと数々のお土産品展が立ち並び、生徒は買い物を楽しむと同時に、沖縄の街の雰囲気味わっていました。



写真 17：国際通り①



写真 18：国際通り②

自主研修地2：沖縄県立博物館・美術館

沖縄県立博物館は、「海と島に生きる ―豊かさ、美しさ、平和を求めて―」をテーマに常設展示を行い、触れることのできる展示や遊びながら学べる施設を設け、沖縄の自然・歴史・文化を発信しています。施設のなかはかなり広く、見ごたえのある内容でした。

沖縄県立美術館は、戦前戦後はじめての県立美術館であり、沖縄県民に多様な芸術鑑賞の機会を提供し、沖縄の発展に貢献する国際化の拠点となっています。今回の研修旅行中ではピカソ展を開催しており、名作「ゲルニカ」のタペストリーをみることができました。

自主研修が始まってすぐの時は不安そうだった生徒達も、だんだんと研修にも慣れ、街の至る所で楽しそうな生徒の様子を見ることができました。研修は順調で、きちんと夕食を済ませて19時の集合時間よりも余裕をもってネストホテル那覇に帰ってくる班ばかりで、班長会議も19時に行うことができました。そして前日と同じ23時に完全消灯して2日目を終わりました。

第3日目（4月13日）

3日目の研修地は太平洋戦争で多くの人が命を落とした旧海軍司令部壕や、平和祈念資料館・平和の礎に向かいます。研修旅行中の沖縄はもうかなり暖かかったですが、生徒はネクタイやリボンをきちんとつけ、正装のためにブレザーを着て、7時30分に食堂に集まり朝食を食べました。そして8時30分にネストホテル那覇を出発し、旧海軍司令部壕に向けて出発しました。

研修地5：旧海軍司令部壕

8時50分頃、旧海軍司令部壕に到着しました。旧海軍司令部壕に着いたときから、これまで見てきた沖縄のどの研修地とも違う雰囲気に、生徒も緊張していました。気温が高いなか正装でブレザーを着ていることもあり、何人か少し体調を崩してしまう生徒もいましたが、施設から出て緊張状態がとけた時には治っていました。生徒も、ここがどんな場所か、きちんとわかっていたようで、かなり気構えていたようです。

旧海軍司令部壕は昭和19年（1944年）、日本海軍設営隊（山根部隊）によって掘られた司令部壕で、当時は450mあったと言われています。カマボコ型に掘り抜いた横穴をコンクリートと杭木で固め、米軍の艦砲射撃に耐え、持久戦を続けるための地下陣地で、4000人の兵士が収容されていました。戦後しばらくは放置されていましたが、数回に渡る遺骨収集の後、昭和45年（1970年）3月、観光開発事業団によって司令官室を中心に300mが復元されました。壕内は薄暗い通路が無数に張り巡らされており、迷路のようになっています。司令官室の壁面には、大田司令官の言葉が静かに残されています。生徒は、ここで人が死んだという事実を考えながら、狭くて暗い壕の中を歩いて行きました。時折、兵士がいたであろう場所に手を合わせる生徒の姿も見えました。

研修地6：平和祈念資料館・平和の礎

9時30分頃に旧海軍司令部壕を後にし、10時20分に平和祈念資料館に到着しました。生徒はバスガイドの方の説明を聞き、建物の前でいっせいに手を合わせていました。沖縄県平和祈念資料館は戦争の犠牲になった多くの霊を弔い、沖縄戦の歴史的教訓を正しく次代に伝え、全世界の人々に「沖縄のこころ」を訴え、もって恒久平和の樹立に寄与する、という目的のために設立されました。沖縄戦の何よりの特徴は、軍人よりも一般市民の戦死者がはるかに上回っていたことにあり、その数は10数万人におよびました。「沖縄のこころ」とは、人間の

尊厳を何よりも重く見て、戦争につながる一切の行為を否定し、平和を求め、人間性の発露である文化をこよなく愛する心です。資料館の中には、「沖縄の人々から見た戦争」をテーマに、戦争の悲惨さを伝える様々な展示があります。展示の仕方はさまざまで、沖縄戦の映像や、写真、蝋人形での再現、実際の当時使われていたもの、戦争の体験談などが、全て事実を「そのまま」展示されていました。中には、凄惨なものも多く、生徒の中には、展示の内容に気持ちが悪くなってしまう生徒も少なくありませんでした。



写真 19：いっせいに手を合わせる生徒達



写真 20：平和の礎

また、平和の礎は沖縄の歴史と風土の中で培われた平和の心を広く内外にのべ伝え、世界の恒久平和を願う記念碑として、太平洋戦争・沖縄戦終結50周年を記念して1995年6月23日に建設されました。この碑には、国籍や軍人、民間人の区別なく、沖縄戦などで亡くなられた全ての人々の氏名が刻まれています。生徒は視界いっぱいの碑の間を雨の中歩き、自分の生まれ故郷に刻まれた名前の多さに、重い表情を隠せませんでした。

午前中は、戦争の悲惨さや凄惨さ、そして平和の大切さをその身で受け止め、学ぶ研修が多く、生徒の表情もずっと重いままでしたが、12時頃に優美堂に着き、生徒の表情にも元気と明るさが戻りました。優美堂は、昨年研修旅行で訪れたひめゆりの塔の向かいにある老舗土産店で、様々な土産品が並び、生徒もその品揃えの多さに興奮していました。この優美堂の2階で昼食の沖縄名物タコライスを食べ、生徒もやっと一息つけたようでした。

研修地7：沖縄海洋博記念公園・美ら海水族館・オキちゃん劇場

優美堂で昼食を食べ、少しお土産を見るための自由時間をとった後、13時過ぎに優美堂を出発しました。そして15時頃に、本日の最終目的地である沖縄海洋博公園・美ら海水族館に到着しました。天候は午前の気持ちを引きずるかのようなあいにくの雨。生徒も最初は疲れた顔をしていましたが、誰もが待ちに待った美ら海水族館に着いたんだということを次第に実感していき、いつも通りの元気な姿に戻りました。

沖縄海洋博記念公園は、昭和50年に開催された沖縄国際海洋博覧会を記念して昭和51年8月に博覧会跡地に設置された国営公園です。今回の研修旅行で訪れた美ら海水族館は公園の3つのエリアのうち、海のエリアにある世界最大級の水族館です。館内では、世界最大級の魚ジンベエザメをはじめとして、マンタや大型のサメ・エイ類を飼育している巨大水槽「黒潮の海」、太陽の光がサンゴ礁に降り注ぐ神秘的な水槽「サンゴの海」、まだまだ謎に包まれた沖縄の深海を再現した「深海の海」など、魅力的な水槽を通して沖縄の海を丸ごと体験することができます。美ら海水族館は、沖縄周辺の海の水面から推進700m付近までを再現し、光・水質・透明度などの様々な要素をできるだけ自然の海に近いものに保っています。海岸から沖合、黒潮、さらに深海へと館内に訪れた方々が旅する形で沖縄の自然を疑似体験し、沖縄の海のすばらしさや大切さを体験・体感できるようになっています。



写真 21：美ら海水族館①



写真 22：美ら海水族館②



写真 23：美ら海水族館③



写真 24：美ら海水族館④



写真 25：美ら海水族館⑤



写真 26：オキちゃん劇場

特に生徒に人気があったのは、やはり巨大なジンベエザメが威風堂々と泳ぐ巨大水槽でした。ちょうど研修中にジンベエザメの餌やりの時間「もぐもぐタイム」があり、多くの生徒が足を止めてその迫力ある光景をずっと眺めていました。また、美ら海水族館のすぐ近くにある「オキちゃん劇場」では、青い海をバックにオキゴンドウやバンドウイルカの楽しいショーを行っています。ショーを通して、イルカの生態や能力も解説してくれるので、海の生物や環境を生徒が興味を持つきっかけになればと思いました。次第に天気も晴れ間が見え、生徒も天気と連動して急速に明るくなり、満面の笑みを浮かべて大いに楽しんでいました。

17時30分頃に宿泊するホテルリゾネックス名護に到着し、班長会議が終わった後に、19時の夕食までホテルの浜辺で遊ぶ時間ができました。海で泳ぐことはできませんが、生徒達は思い思いに浜辺を散策したり、遊んだりして、沖縄の海を五感で感じていました。



写真 27：ホテルの浜辺にて①



写真 28：ホテルの浜辺にて②

夕食はバーベキューの予定でしたが、強風の為危険ということで、ホテルの中でバイキングをすることになりました。バーベキューがなくなったということで、生徒は残念そうでしたが、料理のおいしさにだんだんと笑顔が戻り、長いようで短かったこの研修旅行の思い出話を友達同士でしながら、夕食を楽しんでいました。



写真 29：食事風景①



写真 30：食事風景②

生徒の顔にも疲れが見え始めていましたが、体調を大きく崩す生徒はおらず、順調に研修旅行が進んでいます。おいしいご飯を食べ安心したのか、やはり疲れていたのか、その日は完全消灯時間の前に寝る生徒が多く、みんなぐっすりと休んでいました。

第4日目（4月14日）

ついに研修旅行も最終日となりました。朝食を7時に食べ、8時にはホテルリゾネックス名護を出発しました。生徒は本日で研修旅行が最後ということで、どことなく寂しそうな顔をしていました。

研修地 8：

9時30分頃、研修旅行の最終目的地であるおきなわワールドに到着しました。到着してすぐに各クラスの集合写真を撮りました。



写真 31：3A1 集合写真



写真 32：3A2 集合写真



写真 33：3A3 集合写真



写真 34：3A4 集合写真



写真 35：3A5 集合写真



写真 36：3A6 集合写真

その後、おきなわワールドの中の玉泉洞という鍾乳洞に入りました。初めて鍾乳洞に入る生徒も多く、石灰岩の神秘的な形に感動しながら、地下水の流れる薄暗い洞窟を進んでいきました。出口に着き、外の明るさに驚きながらおきなわワールドの中に入っていました。おきなわワールドは、沖縄の自然、芸能、文化をまるごと体験できる観光施設です。国指定有形文化財に認定された赤瓦の美しい街並みの「琉球王国城下町」、各種工芸体験、沖縄に棲む毒蛇・ハブをテーマにした「ハブ博物公園」、100種類、450本の熱帯果樹園「熱帯フルーツ園」などが楽しめます。



写真 37：おきなわワールド①



写真 38：おきなわワールド②



写真 39：おきなわワールド③



写真 40：おきなわワールド④



写真 41：おきなわワールド⑤

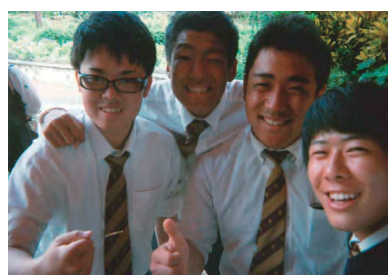


写真 40：おきなわワールド⑥

生徒も、ヤシの実のジュースを飲んだり、大きな蛇と一緒に記念写真を撮ったりしていました。また、けん玉や竹馬など、昔ながらの玩具が置いてあるコーナーもあり、昔の遊びを体験してみている生徒も多くいました。さらに、おきなわワールドで公開される「スーパーエイサー」は、民族芸能の粋が詰まった素晴らしいものでした。生徒は沖縄最後の研修地であるおきなわワールドで、古き良き沖縄に思いをはせて、この研修旅行で得た様々な体験を思い出し、思いっきり楽しんでいました。

長かった3泊4日の旅もあとは帰るだけとなりました。空港に向かうバスの中では、4日間お世話になったバスガイドさんとの別れを惜しむ声も少なくありませんでした。バスを降りて運転手さんとバスガイドさんにお礼を言い、12時10分過ぎ、予定通りに那覇空港に到着しました。生徒はお弁当を配られ、集合時刻まで昼食と買い物の時間となりました。生徒達の疲れもピークに達し、飛行機を待ってる途中で体調を崩してしまった子もいましたが、体調も持ち直し、14時10分に無事に那覇空港を発つことができました。

仙台空港には16時45分に到着し、生徒もくたくたになりながら、解散式で最後の注意事項を聞き、17時15分には無事帰路に着くことができました。この研修旅行を通して、生徒達は若い心でどんなことを考え、どんなことを感じ、どんな思い出をつくったのか、そしてそれらが生徒達の未来にどう影響するのかはわかりませんが、この研修旅行でたくさんの大切なことを学んだのは、帰る際の生徒達の表情をみれば明らかだったと思います。以上、平成28年度英進進学コース沖縄研修旅行記録を報告いたします。

8. 謝辞

今年度もこの沖縄研修旅行をより良いものにし、生徒が事故なく貴重な体験ができるよう、早くから東武トップツアーズの方と綿密に打ち合わせをし、自主研修の計画、しおりの作成など準備をして参りました。まず、様々な安全確認から移動手段の確保に到るまで、多くのご配慮を賜りました加藤雄彦理事長・校長先生に心より御礼申し上げます。また、多くの打ち合わせを行い、この研修旅行を形にいただいた東武トップツアーズの後藤さんはじめ、添乗していただいた方々、現地バス、ホテル、各施設のスタッフの方々、先生方、そして本学園の指導方針に多大なるご理解をいただきました保護者の皆様に深く感謝申し上げます。この研修旅行において、事故もなく生徒がみんな元気に帰ってくることができたのも、以上の方々の細やかな心配りや、温かい対応によるものだと思います。最後になりましたが、今回このような研修旅行の機会を与えていただき、本当にありがとうございました。

(4) フレックス・技能開発コース 沖縄研修旅行報告

<フレックスコース女子>

杉田 愛

1. はじめに

今年度のフレックスコース第3学年の研修旅行は、沖縄で3泊4日の日程で実施されました。フレックスコースは男女別での研修旅行のため、男子は4月18日から、女子は4月19日からの実施となりました。2学年の終わり頃から準備を始め、旅行会社の方に協力をしていただきながら計画を進めていきました。研修旅行では、実際に沖縄の文化・歴史・風土に触れることができ、生徒たちは多くのことを学ぶことができました。私は女子生徒を引率しました。その研修について以下にご報告いたします。

2. 計画及び事前準備と実施内容

(1) 研修期間と参加生徒数及び引率教員

男子班：平成28年4月18日（月）～21日（木）
生徒数67名（F2～5） 引率教員3名（丹野・小石・東）
女子班：平成28年4月19日（火）～22日（金）
生徒数18名（F2～5） 引率教員2名（寺澤・杉田）

(2) 研修地：沖縄

(3) 交通機関と宿泊場所

行き：仙台空港（11：55発）～那覇空港（14：55着）
帰り：那覇空港（14：10発）～仙台空港（16：50着）
宿泊場所（男子：沖縄サンプラザホテル、リゾートホテルベルパライソ）
（女子：ロワジュールホテル、ザビーチタワー沖縄）

(4) 事前準備

有意義で安全な研修旅行にするため、LHRや総合的な学習の時間を利用して下記の内容を準備しました。

- ・参加（不参加）承諾書
- ・健康調査（アレルギー調査含め）
- ・研修旅行実行委員選出
- ・自主研修の班編成
- ・自主研修の計画
- ・沖縄についての学習（DVD鑑賞等）
- ・研修のしおり作成（研修旅行生徒実行委員で作成）
- ・沖縄研修旅行結団式

3. 行程

4月19日（火）

仙台空港11：55（ANA1863便）→14：55那覇空港15：40→16：30首里城17：20→おもろまち駅付近（夕食、ゆいレール）→18：00ロワジュールホテル那覇

4月20日（水）

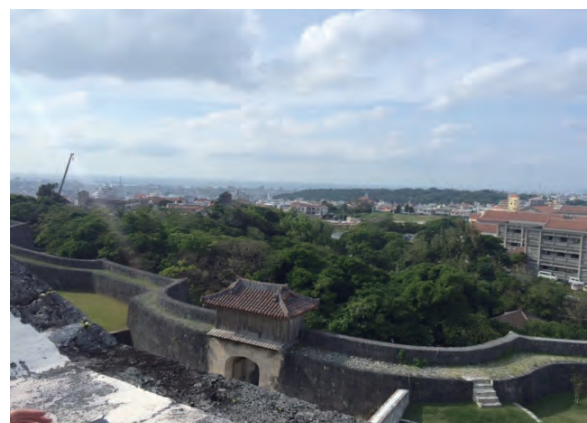
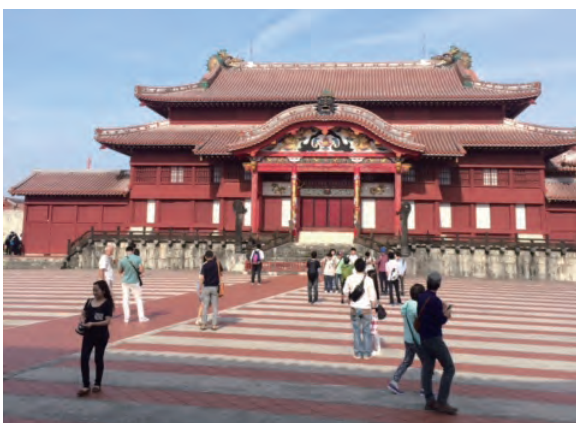
7：30朝食 那覇市8：30（貸し切りバス）→8：50旧海軍司令部壕9：30→10：20平和祈念資料館・平和の礎11：50→12：00優美堂（昼食）→14：00ロワジュールホテル那覇～国際通り自主研修～19：00ホテル

4月21日（木）

7：30朝食 那覇市8：30（貸し切りバス）→10：00沖縄海洋博物記念公園→13：00もとぶ元気村（コーラルビュークルージング&さんご風鈴作り）→17：30ザビーチタワー沖縄ホテル～～18：30夕食

4月22日（金）

7：30朝食、那覇市8：30(貸し切りバス)→9：30おきなわワールド（スーパーエイサーショー）→12：10那覇空港 14：10（ANA1864便）→16：50仙台空港 解散



① 4月19日（火）晴れ 研修旅行1日目

仙台空港に誰も遅刻することなく集合し、出発式を行いました。初めての沖縄、初めての飛行機という生徒も多く、緊張と期待を胸に元気に旅立ちました。離陸後は津波の被害にあった沿岸部が見え何かを感じ取っている様子でした。また途中には低飛行だったので富士山もみることができ、生徒たちは嬉しそうに窓際に寄っていました。

沖縄に着き、最初に訪れた場所は「首里城」でした。「首里城」とは、琉球王朝の王城で、沖縄県内最大規模の城です。1945年の沖縄戦で破壊され、1980年代末から復元作業が始まりました。世界遺産に登録されたのは、「首里城跡」であり、復元された建物や城壁は世界遺産ではありません。そのような歴史を生徒たちは学び、装飾された建物を見ることで、琉球王朝の時代を想像している様子でした。

夕食はおもろまち駅周辺にある「サンエー那覇メインプレス店」という場所に行き、自由時間にし、各自で食事を取りました。初めての「ソーキそば」を食べた生徒もいました。地元の方が利用する大型スーパーのため、沖縄で人気のある日用品や食品を知ることができました。またお土産も買うことができました。そこから「ゆいレール」に乗ってホテルへ向かいました。

ホテル到着後、各班長を集め反省会を行いました。班長には、班のメンバーにしおりに感想を書かせて回収してくるよう指導しました。この反省会は3日間行いました。生徒たちの感想を読むと、その日生徒たちが印象に残ったのは何かを教員は少しでも把握することができました。



② 4月20日（水）晴れ 研修旅行2日目

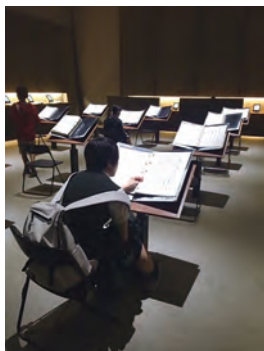
運動部に所属している女子が多いため、早く起きて朝練も行いました。その後、朝食では皆たくさん食べていたので、体調は万全のようでした。

この日は「旧海軍司令部壕」を訪れました。壕の中は湿度が高く、蒸し暑く感じました。壕を見学することによって当時のことを想像し、「この中にずっといなければならない状況だなんて…」と生徒たちはつぶやきながら真剣に見ていました。

次に、「平和祈念資料館・平和の礎」へ行きました。生徒たちは真剣に資料を見て、体験者の語りのコーナーでは時間をかけて学んでいる様子でした。また、「平和祈念資料館」までのバスでの移動中、バスガイドの方が「へいわってすてきだね」という絵本を読んでもくださいました。沖縄の人たちの平和への願いを感じることができました。

バスでの移動中、バスガイドさんが沖縄黄金言葉（沖縄のことわざ）で助け合いの意味がある「ゆいまーる」の歌を教えてください盛り上げてくれました。また、三線を弾きながら沖縄の歌を歌ってくださいました。楽しい時間を過ごすことができました。

午後は自主研修の時間でした。班のメンバーで事前に決めた場所を仲間と協力しながら進めるよう伝え、事故のないようにまた時間内にホテルに戻ってくるように注意しました。見どころの多い「国際通り」を中心に研修し、充実した時間を過ごせたようでした。全員が無事に時間内に戻ってきて安心しました。



③ 4月21日（木）曇り、晴れ 研修旅行3日目

「沖縄海洋博記念公園（美ら海水族館）」に行きました。立派な水族館で生徒たちは写真をたくさん撮り、広い敷地を走り回っていました。その後、「もとぶ元気村」では、船に乗ってサンゴ礁を見ることができ、貝殻を使っての風鈴作りができました。

海辺にあるホテルに到着後、周辺を散策しました。海と空が綺麗で感動し、生徒たちにとって良い時間になりました。3日目ということもあって、疲れてくる頃ではと心配をしていましたが、夕食はしゃぶしゃぶや寿司やケーキが取り放題で、たくさん元気よく食べていたので安心しました。

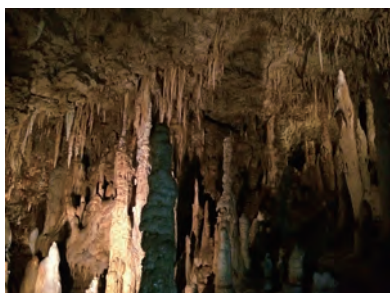




④ 4月22日（金）晴れ 研修旅行4日目

研修旅行最終日では、「おきなわワールド」を訪れました。ここでは鍾乳洞の中に入って見学し、神秘的な自然の力を感ずることができました。鍾乳洞の中は若干蒸し暑く、距離も長かったため、外へ出た後、アイスクリームなどを食べて休憩していました。さらに、エイサーの公演もあって、沖縄の伝統的な音楽を楽しみました。

その後、沖縄での研修成果とお土産を持って、名残惜しみながら那覇空港を立ちました。17時には仙台空港に到着し、解散式を行いました。1日違いの男子を引率する先生とは、生徒たちの様子などの情報をメールで交換し合いながら過ごしてきました。フレックスコース男女ともに無事にまた有意義に充実した研修旅行を実施することができました。



4. おわりに

今回の研修旅行では、生徒たちが沖縄のことを深く知り、また協調性や自律性を身につけ、何事にも責任を持って取り組むことの大切さを学ぶことができたと思います。最終日に「まだ帰りたくない。もう少し沖縄にいたい。」という言葉を生徒から聞き、充実した時間を過ごせたのだと思い、大人になってからこの研修旅行を振り返って、また沖縄を訪れてほしいと思いました。このような時間を過ごすことができましたのは、多くのご配慮を賜りました加藤雄彦校長先生のお力添えが有ったことであります。心から感謝いたします。また、トップツアーの皆様はじめ添乗していただいた方、現地バス・ホテル・各施設のスタッフの方々、日頃より多大なるご理解をしてくださる保護者の皆様、先生方に厚く御礼申し上げます。

小野 仁也

平成 28 年度
沖縄研修旅行 行程表

—— 飛行機
 —— バス
 - - - 徒歩等

4月24日(日)～27日(水)

1日目

10:00 仙台空港 集合

14:50 那覇空港

ANA1863便
 11:40 仙台発
 14:50 那覇着

昼食は機内にて弁当持参

16:30

首里城 (見学)

17:20

17:40 沖縄メインベース 18:50

ホテル

《ホテルリゾネックス沖縄》
 2泊3日
 Tel 098-862-7733

2日目

ホテル

8:30 発

9:00

旧海軍司令部壕 (見学)

9:40

10:20

ひめゆり平和記念館 (体験者の語)

12:30

夕食は各自

13:00

おきなわワールド スーパーエイサーショー

15:15

16:00

那覇市内自主研修・班別自主研修

19:00

ホテル

3日目

ホテル

8:30 発

10:20

沖縄海洋記念博物館 (美ら海水族館・熱海ドリームセンター・オキちゃん劇場)

12:45

昼食は園内で各自

13:00

もとぶ元気村 (自然体験学習)

16:00

16:30

パイナップルパーク

17:00

17:30

夕食はホテルのビーチにて

《ホテルリゾネックス名護》
 Tel 0980-53-8021

ホテル

4日目

ホテル

8:30 発

08:30

万座毛

9:30

10:10

道の駅 かでな (基地見学・資料館)

10:30

11:40

那覇空港

16:45

仙台空港 (到着後・解散)

ANA1864便
 14:10 那覇発
 16:45 仙台着

昼食はお弁当

4月下旬、日中は25℃を超える日もあるという南国沖縄へ、技能開発コース第3学年88名は、仙台から家族に見送られ、意気揚々と出発した。3泊4日の研修旅行を、安全で有意義なものにするためにも、生活指導はもちろん、沖縄の文化や歴史などについても学ぶ時間を事前に設けた。

2. 事前指導

LHRや総合的な学習を利用し、特に以下の3点に重点を置いて実施した。

1) 沖縄を知る

研修をより効果的なものへとするため、沖縄についてのビデオ鑑賞を実施し、沖縄の文化、歴史、風土、自然、習慣について学習を行った。

2) 生活指導

研修旅行は、高校3年間の学校行事の中で、最も大きな行事であり、90名近い大人数での研修を、安全で思い出に残るものにする為、研修の目的にある「集団行動の決まりを守り、一社会人として社会性を身につける」ことを重点的指導項目とした。研修旅行のしおりを活用し、①研修の心得、②行動と自己管理、③服装、頭髮に関する指導、また学年集会を実施し、頭髮（茶髪、染色、変色、髪型不良）、服装（ミニスカート、指定外シャツ）を指導した。

3) 班別自主研修の計画

1班4～6名編成。自由行動とはいえ、安全で所要時間や経費の点で無茶がなく、また、時間や気持ちを持って余さずに行動できるよう、インターネットなどを使い、班毎に相談させて研修計画を立てさせた。

3. 研修のようす

1日目

仙台空港から沖縄へ向けて出発した。沖縄は梅雨に入る直前ではあるが、生徒全員がとても楽しみにしていた。初めての飛行機に乗る生徒もいたが、無事搭乗が完了し仙台を飛び立った。沖縄へ近づくと飛行機から見える海がキレイな青に変わり、沖縄に近づいていることを感じさせていた。那覇空港に到着すると暖かいというよりは、むしろ暑いといった気温に生徒たちは驚いていた。バスに乗り市内を走って、首里城へ。

1) 首里城

琉球王国の王の居城であった首里城。首里城は沖縄県内で最大の木造建築物で、那覇市首里の見晴らしのいい高台にある。中国と日本の建築様式のなかから、沖縄の風土に合ったものをミックスした独自の琉球建築である。正確な創建年代は分かっていないが、発掘調査などの結果、13世紀末から14世紀には存在したと考えられている。

2) 守礼門

二千円札に印刷されている守礼門。沖縄観光の象徴ともいえる名所である。門には「守礼之邦（しゅれいのくに）」という言葉が掲げられている。「琉球は礼節を重んじる国」。かつては特別な時にのみ掲げられるもので、宗主国であった中国王朝に向けてのメッセージとなっていた。琉球では王の代が替わるたびに、中国から「冊封使（さっぽうし）」という使者が訪れ、その即位を認めてもらうという習わしがあったので、冊封使の滞在期間中、友好の証として掲げられていたのがこの言葉だったのだ。



3) 正殿（せいでん）

正式名称は「百浦添（ももうらそえ）御殿（うどうん）」。「たくさんの浦々を支配する御殿」という意味である。中国の宮殿建築の様式を採用しながらも、正面にある装飾板の「唐（から）破風（はふ）」という部分は日本建築の様式。日中の建築をミックスさせている。また、正面階段のハの字状に広がった形式、龍そのものを柱にしてしまう龍柱は、琉球にしかないもので、これらが合わさって琉球独特の建築物となっている。3階建ての、沖縄県内で最大の木造建築である。

生徒たちは日本の城については見学しており知っているものの、同じような時代に沖縄にこのように素晴らしい琉球王国の王の居城があったことに驚きを隠せないようであった。改めて琉球王国のすごさに感動していたようであった。

2日目

1) 旧海軍司令部壕

旧海軍司令部壕は、地上戦が行われた沖縄戦の司令部があったところで、1944年に山根部隊によって掘られた司令部壕。当時は450mあったと言われ、現在はその一部が公開されている。当時は約4000人の兵士が収容されていたそうで、司令官室や暗号室などの部屋がある。その中でも幕僚室の壁には手榴弾で自決した時の破片の跡も残っている。資料館には壕内から発見されたものや写真、電報などが展示されており、沖縄戦について学ぶことができる。壕内は迷路のようになっている。壁を見ると手で掘った後があり、これだけの規模を掘るのは容易なことではなかったと思う。

生徒たちは、「旧海軍司令壕」が手掘りで、天井が低いことにまず驚いて、軍人が自決した際にできた手榴弾によるくぼみを見たとき、表情を変えていた。



(旧海軍司令部壕事業所ホームページより引用)

2) ひめゆり平和記念館

平和祈念資料館によると、沖縄県立第一高等女学校を「乙姫」沖縄模範学校女子部を「白百合」と名付けられていたそう。その両方の名前を合わせて「姫百合」と名付けられ、ひらがなで「ひめゆり」と使うようになった。右の写真は看護要員として戦場に動員され、亡くなっていった「ひめゆり学徒隊」の慰霊塔である。ひめゆり平和祈念資料館には、ひめゆり学徒隊の犠牲者の遺品や、ガス弾によって多くの犠牲者がでた伊原第三外科壕が実物大で再現されており、ひめゆり学徒隊について学べる場となっている。



平和記念館にて戦時中の様子の映画を鑑賞した。その後、体験者の方から、当時の様子を詳細に伺うことができた。沖縄戦がいかに悲惨であり、無残なものであったか、自分たちと同じ年代の生徒が薄暗い狭い壕の中で大勢の負傷した兵隊のうめき声が響く中、必死に看病するひめゆり学徒、そして必死に生き延びようとする住人がこの壕の中で共存していたことを知り、どれだけ苦しい思いをしたかが理解できたようであった。講話を拝聴した生徒たちの眼差しは真剣そのものであり、しっかりと背筋が伸びていた。生徒たちもこの時間がいかに貴重かを理解して、講話に臨んでいたのであろう。

3) おきなわワールド

おきなわワールドでは、国内でも有数の規模を誇る鍾乳洞をはじめ、赤瓦の古民家を再現した町並みを見ることができる。伝統工芸の体験もできるので時間があれば体験してみると楽しいと思う。その他エイサー（無料）も毎日公開されているのでこちらも見逃せない。人気のパフォーマンス「エイサー」。本来は旧盆の先祖供養の集団舞踊で、盆踊りの一種なのだが、おきなわワールドでは連日公演している。パフォーマンスを行っているのは「真南風（まふえかじ）」。エイサーの他、獅子舞やアンガマ、四つ竹など沖縄の伝統芸能が一同に楽しめる。

迫力でもって私たちを迎えてくださったのはスーパーエイサー「真南風（まふえかじ）」の皆さん。太鼓の音や掛け声から伝わるパワーは、普段元気な生徒たちを圧倒！性別関係なく大きな太鼓を抱えながら回転し、ジャンプする荒技は胸に残るものだった。好奇心旺盛に立候補した生徒たちが獅子舞に頭を噛んでもらい、簡単な演奏や踊りも一緒になって楽しんでいた。



4) 那覇市内自主研修（班別自主研修）

那覇市最大の繁華街である国際通りでは、買い物や食事を楽しみながら、市場の魚の派手さや沖縄そば店の多さなど、何かにつけてカルチャーショックを受けていた。

このような異文化への興味や関心をきっかけに、自らの視野を広げることの楽しさを知り、心豊かな人間へと成長して欲しい。

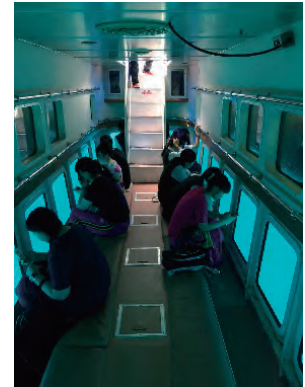
3日目

1) 沖縄海洋博記念公園

那覇市内から2時間弱かけて沖縄海洋博記念公園へ。広い敷地内に「美ら海水族館」や「エメラルドビーチ」があり、入場前から生徒たちの期待が膨らんでいた。沖縄美ら海水族館は、その様な沖縄周辺の海の、水面から水深700m付近までを再現し、光、水質、透明度などのさまざまな要素をできるだけ自然の海に近い状態に保っている。そして海岸から沖合、黒潮、さらに深海へと沖縄の海の素晴らしさや大切さを体験、体感出来る施設である。メインの大きな水槽を優雅に泳ぐのはジンベエザメである。全長8.5メートルものジンベエザメや長期飼育記録世界一のナンヨウマンタをはじめ、多種多彩な魚たちを観察できる巨大水槽。部屋を暗くし青く美しい水槽をバックに記念撮影をする姿が多く見られた。巨大アクリルパネルは、高さ8.2メートル、幅22.5メートル、厚さ60センチメートルもある。広い敷地内で、お土産を買う生徒、オキちゃん劇場を楽しむ生徒、思い思いに楽しんでいた。

2) もとぶ元気村

ここでは各自事前に希望した体験活動（釣り・バナナボート・シーカヤック・クルージング・ジェルキャンドル）を行った。はじめに、人数の確認の仕方「バーディー」を練習し、バナナボート・シーカヤックなど自ら希望した体験学習を行った。乗り方を教わっていざ海へ。バナナボートは係りの方に引っ張ってもらいながら早いスピードで海の上を移動し、盛り上がっていた。シーカヤックは2人1組になり協力しながらも、バランスを崩して海中へ…。全身びしょ濡れになりながら、一足早い夏をたのしんでいた。



3) ビーチにてバーベキュー（夕食）

3日目の夕食はホテル前にあるビーチにてのバーベキューであった。それぞれの生徒が協力しながら肉を焼いたり、焼きそばを作ったり、薄味だったり、塩辛かったりと思いの味付けをして食していた。デザートとして沖縄産のパイナップルも用意されていた。今の時期は危険生物がいるために、足だけでも水に浸かることを注意されたりと、沖縄のならではの自然を感じながら夕暮れのひと時を楽しんでいた。



4日目

1) 万座毛

象に似た岩が有名で、眼下にきれいな海が広がる絶景スポットである。沖縄本島北部の恩納村にある万座毛（まんざもう）は、「万人も座する草原」（毛とは草原のこと）。琉球王朝時代、尚敬王が「万人を座するに足る」と賞賛したことが名の由来と言われている。象に似た岩が見えるポイントが万座毛で一番人気の絶景ポイントのようだ。他にも海中の岩が丸見えのところが一番の見どころで、海の中を見ていると青や赤色の魚が見えることもある。

2) 道の駅 かでな

屋上展望場から見る嘉手納空軍基地の広さには驚いていた。4階にあたる屋上の展望場からは、広大な基地内を見渡すことができる。4000メートル級の滑走路が2本あり、広さは東京ドーム420個分と日本最大級の規模を誇るとともに極東最大の基地とのことである。戦闘機は空中給油の訓練中のように離着陸を見ることが出来なかったのだが、早期警戒機が離陸する様子を見ることが出来た。

4. おわりに

大きなトラブルもなく、実りある研修となった。沖縄研修旅行に引率経験のある先生方をはじめ、事前に多くの方々の協力やアドバイスをいただきながら実施できたと思う。沖縄戦や平和について改めて考えさせられた。また、旧海軍司令部壕とひめゆりの塔を訪れた後、体調が悪くなった生徒も出たが、次の日には体調も戻り元気に沖縄研修を続けることが出来た。多くの皆様のお陰で、無事に研修を終われましたこと、心より感謝いたします。

(5) 秀光18期生 第4学年NYSA2016実施報告

秀光中等教育学校 伊藤 沙絵

1. はじめに

平成28年7月12日（火）から7月25日（月）までの2週間、アメリカ合衆国ニューヨーク州ホワイトプレインズにおいて秀光中等教育学校第4学年18名が研修を行いました。研修の拠点となったペース大学があるホワイトプレインズは自然に恵まれ、高級住宅地や大企業の本社、複数の大学などがある治安の良い地域です。

今回の研修は全員参加とはなりませんでした。悪天候や事故、怪我等もなく、生徒たちは様々なことを学ぶことができました。生徒と共に貴重な体験をさせていただいたことに感謝し、ご報告させていただきます。

2. 事前研修と準備

まず実行委員長1名、委員5名を選出し、NYSA実行委員会を発足させ、研修のテーマを「はばたけ飛躍の翼」としました。それから教育、経済、歴史・文化、観光の4グループに分かれて、それぞれテーマを決めてアメリカについて調べました。また、LHRの時間を使って国際センターの尾形淳先生からニューヨークでの訪問先や心構えについて詳しく話をいただきました。同時にフェアウェルパーティーで披露する「世界に一つだけの花」、「校歌」の合唱とダンス「WAKE UP」の準備に取り掛かりました。朝や放課後、LHRの時間を使い、生徒が自発的に練習を行いました。

3. 今回のNYSA概要

行 き 先：アメリカ合衆国ニューヨーク州

期 日：平成28年7月12日（火）～25日（月） 14日間

参加生徒：秀光中等教育学校 第4学年 男子10名 女子8名 合計18名

引 率 者：団長 大林 茂 （秀光中等教育学校副校長）

伊藤 沙絵 （第2学年M1組担任）

Kerry Winter （外国語講師）

行 程

	日	発着／滞在地名	発着 現地時間	交通機関	摘 要	食事
1	7/12 (火)	宮城野校舎 集合 宮城野校舎 出発 成田空港 着 成田空港 発	6:45 7:00 13:00 15:55	学校バス DL-172	学校集合、点呼 学校バスにて成田空港へ 成田空港到着後、出国の手続き 航空機にて、空路ニューヨークへ 【機内泊】	朝× 昼×
		ニューヨーク 着 ニューヨーク 発 プレザントビル 着	16:30 17:00頃 19:00	専用車	J.F.ケネディ空港到着後、専用車にて移動 ペース大学にてオリエンテーション ホストファミリーと合流、ホームステイ先へ 【ホームステイ泊】	機内食 2回 夕○
2	7/13 (水)	ホワイトプレインズ	午前 午後		ペース大学にてESL授業 キャンパスアクティビティ 【ホームステイ泊】	朝○ 昼○ 夕○
3	7/14 (木)	ホワイトプレインズ ニューヨーク	終日	専用車	ニューヨーク研修 ・メトロポリタン美術館 ・国際連合本部ビル 【ホームステイ泊】	朝○ 昼○ 夕○

	日	発着／滞在地名	発着 現地時間	交通機関	摘 要	食事
4	7/15 (金)	ホワイトプレインズ	午前 午後		ペース大学にてESL授業 キャンパスアクティビティ 【ホームステイ泊】	朝○ 昼○ 夕○
5	7/16 (土)	ホワイトプレインズ	終日		各ホームステイ先との交流 【ホームステイ泊】	朝○ 昼○ 夕○
6	7/17 (日)	ホワイトプレインズ	終日		各ホームステイ先との交流 【ホームステイ泊】	朝○ 昼○ 夕○
7	7/18 (月)	ホワイトプレインズ	終日	専用車	イエール大学訪問 【ホームステイ泊】	朝○ 昼○ 夕○
8	7/19 (火)	ホワイトプレインズ	午前 午後		ペース大学にてESL授業 キャンパスアクティビティ 【ホームステイ泊】	朝○ 昼○ 夕○
9	7/20 (水)	ホワイトプレインズ ニューヨーク	終日	専用車	ニューヨーク研修 ・タイムズスクエア ・ロックフェラーセンター ・アメリカ自然史博物館 【ホームステイ泊】	朝○ 昼× 夕○
10	7/21 (木)	ホワイトプレインズ	午前 午後		ペース大学にてESL授業 キャンパスアクティビティ ホストファミリー、ペース大学の講師との フェアウェルパーティー 【ホームステイ泊】	朝○ 昼○ 夕○
11	7/22 (金)	ホワイトプレインズ	午前 午後		ペース大学にてESL授業 キャンパスアクティビティ ギャラリーモールにて買い物体験 【ホームステイ泊】	朝○ 昼× 夕○
12	7/23 (土)	ホワイトプレインズ	終日		各ホームステイ先との交流 【ホームステイ泊】	朝○ 昼○ 夕○
13	7/24 (日)	プレザントビル 発 ニューヨーク 着 ニューヨーク 発	(8:00) (9:00) (12:00)	専用車 DL-473	各ホームステイ先からペース大学集合後、 J.F.ケネディ空港にてチェックイン手続き 出国手続き後、航空機にて空路、成田へ 【機内泊】	昼○ 機内食 2回
14	7/25 (月)	成田空港 着 成田空港 発 宮城野校舎 到着	14:45 16:00 22:00	学校バス	成田空港到着後、入国の手続き 学校バスにて宮城野校舎へ移動 学校到着後、解散	夕×

4. 訪問地と全日程報告

メトロポリタン美術館

大英博物館、ルーブル美術館、エルミタージュ美術館と並び、世界4大美術館の一つとされている。年間約550万人が訪れ、1800人ものスタッフが働いている。古くは有史以前から現代までの5000年以上に及ぶ世界文化を飾った代表的な美術品・工芸品を数多く所蔵している。

国際連合本部ビル

1945年に、人権、安全保障及び世界経済に関してのより良い共同関係のために、51の国家によって設立された。国連本部は、193の加盟国すべてに属する特別な不可侵ゾーンに位置している。このゾーン内に独自の警備、消防隊、郵便局と事務局がある。

イエール大学

1701年創立で、アメリカ合衆国に現存する大学としては3番目に長い歴史を持ち、アメリカ東部の名門大学群アイビーリーグに所属する8大学の1つである。法科大学院は全米最難関として知られている。ハーバード大学が「学問研究の中枢」として語られるのに対し、イエール大学はこれまで5人の大統領を輩出しているのを引き合いに、「国家権力の中枢」として語られることもある。

アメリカ自然史博物館

首都中心部のナショナルモールにあり、スミソニアン協会によって運営されるスミソニアン博物館群の一つである。展示するコレクションはアメリカ合衆国の歴史や文化に関連する多方面の作品及び人口の展示物が中心である。映画「ナイトミュージアム」の舞台として知られている。

ロックフェラーセンター

マンハッタンの中心部48番街と51番街の22エーカーの土地に、19の商業ビルが四方に建ち、各ビルの低層階は一つの建物として繋がっている。中央にある半地下のプラザには、万国の国旗とプロメテウスの黄金像が立ち、夏にはカフェテラス、冬にはアイススケートリンクとして使用される。

2016/07/12 (火) 晴れ

日本時間16時頃に成田空港を出発後、12時間30分の飛行を終え、現地時間16時30分にJFK空港に予定どおり着陸しました。生徒は機内での疲労感もなく、元気いっぱいに入国手続き、荷物受領を順調に終わりました。

ペース大学に19時頃に到着し、ジェイソン先生とブライアン先生の大歓迎を受けました。その後に、オリエンテーション、ホストファミリーとの顔合わせを行い、20時30分生徒はホームステイ先に向かいました。

2016/07/13 (水) 晴れ

研修初日、遅刻する生徒もなく、全員が長旅の疲れも見せず元気いっぱいスクールバスで登校しました。ホームルームではパスポート、健康チェック、日誌の回収を行い、9時から2グループに分かれてESL授業を開始しました。

午前は教室でマット先生とリチャード先生の授業が行われました。午後には大学から徒歩10分のショッピングモールでアクティビティ研修を行いました。アクティビティ研修では生徒は4班に分かれ、指示された課題に基づき写真撮影の後、再び大学に戻り、発表会をしました。終了時刻が定刻よりも遅れるほど、各班とも真剣に発表をしていました。

16時45分、生徒はホームステイ先に向かってスクールバスで帰路の途につきました。



2016/07/14 (木) 晴れ一時雨

生徒は8時30分登校。予定通りの時刻に市内観光に出発しました。メトロポリタン美術館までは渋滞もなく、開館前に到着しました。生徒たちは有史以来、現代に至るまでの世界の美術、工芸などの精華作品の迷路に入りながらも自分の研修目的に応じ、それぞれが堪能していました。館内の食堂で昼食を摂り、13時10分に美術館を出発しました。

ニューヨークの街並みを車窓から見学し、国連本部に14時に到着しました。国連本部の見学に先立ち一人一人が厳しいセキュリティーチェックを受け、2グループに分かれて見学ツアーを行いました。NYSA研修にふさわしい英語ガイドのため生徒たちは、理解するのに苦労していましたが、ケリー先生の適切な助言でどうにかツアーガイドの説明を納得できました。館内見学の間、30分ほどスコールがありましたが、私たちが出口を出たときにはすっかり晴れ上がり、照り返しもなく快適にバスに乗車しました。生徒は疲労と満足感で車中居眠りを

していましたが、夕方の渋滞にもあわず、18時、無事大学に到着しました。

帰りのHRは、大学で行いました。ホストファミリーとまだコミュニケーションがうまく取れない生徒もいたため、ケリー先生からのアドバイスも行いました。18時30分にはスクールバスに乗車させ、生徒を送り出しました。



2016/07/15（金） 晴れ

全員、定刻通り元気に登校しました。午前中はマット先生とリチャード先生のESL授業を行いました。午後は大学周辺の史跡の巡検をしました。厳しい暑さの中でしたが、4グループは史跡の前に整列し、調べた学習内容を発表しました。往復徒歩のため、生徒の中には疲れを感じさせる者もありましたが、無事大学に戻ってきました。

その後、フェアウェルパーティーでの催し物の練習をし、HRをしました。HRでは特にNYSAの目的の再確認および土日の過ごし方について指導をしました。月曜日には元気な姿で登校することを願っています。



2016/07/18（月） 晴れ一時雨

生徒たちは土・日をホストファミリーとともに過ごしたので、2日ぶりに元気な顔を見ることができました。点呼時は、体調不良を訴える生徒もなく、予定通り学問研究の中枢と称されるイエール大学に向け出発し、10時10分に到着しました。学生ガイドによる英語でのキャンパスツアーでしたが、ケリー先生による要所ごとの補足により一層理解が深まりました。昼食は大学付近のピザ店でサラダと特大サイズのピザに舌づつみをうちました。

午後はクッシング・センターに行き、博士の業績を学びました。人の脳のホルマリン漬けに驚嘆し、研究



ノートや数々の文献に触れ、医学の深遠さをうかがうことができました。

帰りの車中、スコールに見舞われましたが、ペース大学に戻ると晴れ上がり生徒たちはスクールバスにスムーズに乗り換え、帰宅しました。

生徒は炎天下のキャンパスツアーでしたが、概ね元気です。

2016/07/19 (火) 晴れ

今日も生徒は8時半に登校しました。気温32度とはいえ快適でした。生徒の表情は明るさが増していました。午前中は2グループに分かれ、マット先生とリチャード先生のESL授業がありました。

午後はショッピングモールに出かけ、店の従業員にインタビュー、取材の学習をしました。

来客が少なかったため、快く従業員が答えていました。大学に戻り、各班ごとにまとめの発表をしました。生徒は帰りのHRの前の短時間を活用し、フェアウェルパーティーでの発表を自主的に練習していました。声量もあり、体の動きも良くなっていました。

NYSA後半になって生徒一人一人の心と行動に変化が生じ、クラス全体がまとまりつつあります。このムードを継続させ最終日には最高潮に達することができるようにと願っています。

2016/07/20 (水) 晴れ

生徒は8時半登校。今日も気温30度で過ごしやすい晴天となりました。点呼時は、体調不良を訴える生徒もなく、予定通り市内見学に向かいました。10時頃にはタイムズスクエアに到着。生徒はロケーションに心が奪われる興奮ぶりでした。タイムズスクエアでは、集合写真撮影や友達同士で記念撮影をしました。次にロックフェラーセンターへ10時45分に到着し、NY市内の眺望を堪能しました。生徒は最上階へ着くや、眼前のパノラマに大歓声、それぞれのスポットでシャッターをきっていました。

続いてアメリカ自然史博物館へ12時35分到着しました。フードコートは大混雑・大行列でしたが、生徒は好物を選び大盛りにした皿を平らげていました。昼食後、14時からダークユニバースにてプラネタリウムを鑑賞した後、自由に館内を見学しました。生徒たちの興味は、4階の恐竜コーナーのトリケラトプスの展示に集中していました。15時35分、アメリカ自然史博物館を後にしてペース大学への帰路につきました。

到着後、明日のフェアウェルパーティーについての打ち合わせ、明日以降の研修における心構えや諸注意をしました。17時30分、生徒たちはスクールバスに乗り、帰宅しました。スクールバスは渋滞でいつもよりホームステイ先への帰宅時刻が30分程度遅れたとの報告がありました。



2016/07/21 (木) 晴れのち雨

全員、定刻通り元気に登校しました。午前中はマット先生、リチャード先生によるESL授業を行いました。双六ゲームをととして生徒自身の意志を英語で表現するアクティビティでした。生徒の会話は硬さを感じられないほど上達しました。

午後は生徒とペース大学の女子留学生8名とが混合グループを編成し、先生から与えられた玩具や生活用品をうまく活用し、各班がコントをするアクティビティでした。1ストーリーの中に、知恵と笑いと落ちがあり、表現力・創作力・創意工夫を求められる学習でした。限られた時間の中でしたが、生徒と初対面の留学生とはコミュニケーションを深めることができました。

15時から、フェアウェルパーティーのリハーサルを実行委員会を中心に行いました。リハーサル後、帰りのHRを行い本番直前の全体指導と明日の研修における諸注意をしました。17時、司会の生徒の流暢なスピーチで本番開始となりました。ジェイソン先生の開会の言葉に続いて「世界に1つだけの花」、「校歌」、ダンスの披露、お礼の挨拶、ホストファミリー代表の言葉とスピーチが続きました。その後、歓談となりホストファミリー、秀光生、大学職員、引率教員が懇親を深めました。交流会もたけなわとなり、ジェイソン先生から秀光生一人一人に

終了証およびペース大学のTシャツを授与していただきました。名残は尽きなかったのですが、19時10分記念写真撮影を終え、三々五々、生徒、家族は家路につきました。

4年生の歌とダンスは日本で練習を重ね、NYでも寸暇を惜しみ練習をした結果、大成功に終わることができました。ファミリーの反響は大きいものがありました。生徒は今日の発表を目標の一つにし、練習に励んできましたので、表情には成就感が満ち溢れていました。



2016/07/22（金）晴れ

ペース大学での研修最終日、全員、定刻通り元気に登校しました。午前中はマット先生とリチャード先生のESL授業を12時半まで行いました。引き続き、大学から徒歩で30分ほどのギャラリアモールに移動し、昼食を取りました。生徒は自分の好みに応じて注文し、美味しそうに食べていました。食欲はあいかわらず旺盛でした。

昼食後、ショッピング活動をしました。その後、猛暑の中、再び大学に戻りました。帰りのHRに先立ち、ジェイソン先生作成のアンケート（研修内容全てに関するもの）用紙に答えさせました。HRでは、明日土曜日のホストファミリーとの過ごし方について、日曜日出発の集合時間・場所、機内持ち込み荷物に関する事等を指導しました。

16時40分、生徒たちはスクールバスやホストファミリーの迎えの車に乗り、帰宅しました。明日の土曜日は各ホストファミリーの計画に基づいての活動となります。生徒とファミリーにとって思い出多き最終日になってほしいと願っています。

5. おわりに

今年度のNYSAは18期生全員での参加は叶いませんでしたが、天候にも恵まれ、大きな事故や病気なども無く、無事に研修を終えることができました。これは加藤雄彦校長先生をはじめ多くの先生方やニューヨーク現地で調整を行っていただいたジェイソン先生をはじめとする多くの方々のご尽力のおかげと、心より感謝しております。このような素晴らしい機会を与えていただき、この場を借りて御礼申し上げます。

この2週間を顧みると、瞬く間に過ぎ去りました。生徒たちは当初、ホストファミリーとの会話に戸惑い、生活スタイルに馴染めなかったようでした。しかし、日を重ねるごとに成長していきました。18期生の生徒がNYSAで学んだことを、秀光での生活はもとより、今後の人生にも生かし、グローバルリストとして活躍する人材に育ってほしいと願っています。

秀光中等教育学校 第2学年ハワイ研修報告

倉橋 真司

はじめに

秀光中等教育学校では平成23年度より、前期課程の第2学年において、2週間のハワイ研修を実施している。2週間のホームステイと現地の学校での授業を通じて、英語力の向上と異文化交流を目指す、とても重要な研修であるとともに、多くの生徒たちにとっては、家族旅行とは異なる初めての海外体験でもあり、楽しい行事のひとつでもある。これまでのI-LION HAWAII SCHOOL (ILHA) とは異なり、昨年度より、午前中は現地の語学学校であるグローバルビレッジで英会話の授業、午後は屋外でのアクティビティというかたちに変更となった。私自身、ハワイ研修の引率をさせていただくのは平成24年度以来、4年振りであったので、とても懐かしく、また改めて生徒たちと様々な貴重な経験をさせていただくことができた。以下に概要をまとめておきたい。

1. 研修期間と参加人数

第2学年の生徒数は44名であるが、今回のハワイ研修への参加者は37名であった。1月末より3月上旬にかけて3班に分けて実施した。研修期間と参加者の内訳、引率教員は以下の通りである。出発前に総合的な学習の時間などを利用して事前研修を実施した。1月中は高校入試期間中の家庭学習日が多く、さらに2学年がインフルエンザの流行による学年閉鎖になるなど、直前指導の時間が充分に取れない状態ではあったが、各班の出発日には全員が元気に揃い、大きな事故やケガ、病気もなく、終えることができた。

第1班 : 平成29年1月28日(土)～2月10日(金)(12泊14日)

参加生徒: 男子7名・女子7名 合計14名

引率教員: 倉橋真司

第2班 : 平成29年2月11日(土)～2月24日(金)(12泊14日)

参加生徒: 男子6名・女子6名 合計12名

引率教員: ブライアン・スティーブンス、菊地美紀

第3班 : 平成29年2月25日(土)～3月10日(金)(12泊14日)

参加生徒: 男子6名・女子5名 合計11名

引率教員: ブライアン・スティーブンス、伊藤沙絵

2. 研修内容の報告

ここからは私が引率させていただいた第1班の14日間の様子をまとめていきたい。主な行程は次頁の表に示した通りである。10日目の午後のみ雨天のため計画を変更したが、それ以外の日はすべて計画通りに実施することができた。なお第1班の男子生徒は7名中6名が、3月下旬の全国大会に出場する軟式野球部の生徒たちであった。



成田空港にて



ホノルル国際空港に到着 (DL-580)

【第1班 行程表】

	日	発着地・滞在地	時間	交通機関名	午前	午後
1	1/28 (土)	宮城野校舎出発 成田空港（機内泊） ホノルル	12：30 21：20頃 9：30頃	学校のバス 航空機 DL-580	17：00頃、成田空港到着 空路ホノルルへ 空港到着後、滞在中の諸注意等説明 ホストファミリー宅へ	
2	1/29 (日)	ホノルル (ホームステイ泊)			ホストファミリーの計画で行動	
3	1/30 (月)	ホノルル (ホームステイ泊)	8：15登校 16：00下校		Global Village English Center に て語学研修 ・オリエンテー ション、英語テ スト ・英語クラス	・アラモアナショッピ ングセンター
4	1/31 (火)	ホノルル (ホームステイ泊)	8：15登校 17：00下校	専用車	・英語クラス	・パールハーバー見学
5	2/1 (水)	ホノルル (ホームステイ泊)	8：15登校 16：30下校	市バス	・英語クラス	・ダイヤモンドヘッド ハイキング
6	2/2 (木)	ホノルル (ホームステイ泊)	8：15登校 16：00下校		・英語クラス	・ILHAにてアール・ 大川先生の講義
7	2/3 (金)	ホノルル (ホームステイ泊)	8：15登校 16：00下校		・英語クラス	・フラダンス体験 ・アラモアナビーチ パークでスポーツ
8	2/4 (土)	ホノルル (ホームステイ泊)			・ホストファミリーの計画で行動	
9	2/5 (日)	ホノルル (ホームステイ泊)				
10	2/6 (月)	ホノルル (ホームステイ泊)	8：15登校 16：00下校		・英語クラス	・ホノルルダウンタウ ン・チャイナタウン 散策（雨天中止）
11	2/7 (火)	ホノルル (ホームステイ泊)	8：15登校 17：00下校	市バス	・英語クラス	・ホノルル水族館 ・ワイキキビーチ
12	2/8 (水)	ホノルル (ホームステイ泊)	8：15登校 16：00下校		・英語クラス	・アラモアナビーチ パークでゲーム
13	2/9 (木)	ホノルル (機内泊)	10：43頃	航空機 DL-579	ホストファミリーの送迎で7：30空港に集合 空路成田へ	
14	2/10 (金)	成田空港	15：30頃	学校のバス	21：30頃、宮城野校舎到着	

◎1日目（1月28日 土曜日） 天気：晴れ

生徒たちは保護者とともに12：00に宮城野校舎に集合し、栄光1階の会議室で出発式を行った後、学校のバスで成田空港に向けて出発した。途中高速道路のサービスエリアで2回休憩したが、14名の生徒たちは全員元気で、17：00頃には成田空港に到着した。デルタ航空のチェックインカウンターで荷物を預けた後、1時間30分ほど自由時間を取り、出国、搭乗へと進んだ。ホノルル国際空港に到着すると、すぐに各ホームステイ先に別れてしまい、月曜日にグローバルビレッジに集合するまで会うことができなくなるため、飛行機に乗る前にしかミーティングをする時間がないと考え、搭乗開始の30分前に全員を集めてホームステイについての諸注意をし

た。海外には家族と行ったことがあるという生徒はいたが、ホームステイは全員が初めてとのことであり、基本的なルールを知らなければ、トラブルが起こりやすい。第1班は直前指導の時間が充分に取れないままの出発であったので、大切な連絡は全員に早めにして意識させることが大切であると考えた。生徒たちは緊張した雰囲気でも聞き、効果的であった。

搭乗後は21:20に予定通り成田を出発し、現地時間の9:05頃にホノルル国際空港に到着した。ここまでは順調であったが、入国審査がアジア各地からの旅行者で大混雑していたため異常に時間がかかり、すべて終えて荷物を受け取り、出口にたどり着いた時には11:00を過ぎていた。時間的に日本や中国など各地からの便が次々到着する時刻であったことや、中国の春節と時期が重なったこと、1月のトランプ新大統領就任に伴う入国者の警戒強化などが原因なのではないかと思われるが、私と生徒14名全員は長時間並んだ上に、さらに自動端末での指紋採取、写真撮影を経ての厳しい審査を受けることになった。これは貴重な経験であったと思う。

遅れてしまったものの、出口では無事に現地のホームステイ会社のナオミさんと会うことができ、携帯電話をレンタルされた後に、順次到着したホームステイ先の家族の車に乗せられて、それぞれのステイ先に向かった。とても慌しいスタートではあったが、生徒たちはこのまま週末を家族の計画で過ごすことになる。事故やトラブルが起きないことを祈るばかりであった。

◎3日目（1月30日 月曜日） 天気：晴れ

ハワイに到着して2日が過ぎ、生徒たちは8:00に全員が元気にグローバルビレッジに登校することができた。週末は各ホームステイ先の家族とショッピングや海に行ったり、スポーツジムでテニスをしたりして楽しく過ごしたとのことである。ホームステイの家族と良好な関係を築くことができたようである。ただ1月末のハワイは寒暖の差が予想以上に大きく、朝晩が肌寒くなるため、体調を崩さないように注意深く見ていく必要があると感じた。

グローバルビレッジの英語の授業は午前中2コマで構成されており、8:30から9:50までが1時間目、10:10から11:20までが2時間目であり、私たちの担当はジュディ先生であった。初日はオリエンテーションとして、自分の友達や生まれた街についての英作文と、ハワイ地理や産業、人物、食べ物などの質問に英語で答えるテストが行われた。やや難しい問題もあり、野球部の生徒たちは苦勞している様子であったが、先生が丁寧に教えてくれたこともあり、何とかこなすことができた。校内には様々な国からの学生がいて、教室内や共有スペースでの日本語はNGということで、生徒たちはやや緊張気味であった。また先生と生徒一人ひとりとの簡単な面接もあり、週末に何をしたのかなどを英語で聞かれたようである。



グローバルビレッジでの授業の様子（3日目英作文、5日目椅子取りゲーム）

昼食はグローバルビレッジのジェシー先生の引率のもとに、アラモアナセンターのフードコートでとった。女子生徒の中には、ホームステイ先からサンドイッチを作ってもらった人もいた。その後12:25から14:00まで、アラモアナセンター内の10箇所のお店や施設を2人から3人のグループで訪ねて、ワークシートに英語で指示された内容を実行するというアクティビティを行い、広いショッピングセンター内の地図を使って、全員時間内に終わることができた。積極的に店員や観光客に尋ねて、教えてもらったりしながら楽しく取り組むことができたようである。その後、先生にワークシートを提出して14:30に終了した。この日はそのまま学校には戻らず、アラモアナセンターで解散になったので、ホームステイ先の迎えが来るまで、アラモアナセンター内で、買い物などの時間をホームステイのグループごとに許可し、16:00から17:00にそれぞれの家族とともに無事に帰宅することができた。

◎4日目（1月31日 火曜日） 天気：晴れ

3日目の夜、ホストファミリーから連絡があり、1名の女子生徒がのどの痛みを訴えており、37度台の微熱があるとのことであった。その日は暖かくして早めに休むように話し、この日の朝に大事をとって病院で受診させ

ることにした。ワイキキの日本人医師のクリニックで私も同伴して診察してもらったところ、すでに熱は下がっており、風邪の初期症状とのことで、内服薬とトローチを処方された。本人が大丈夫なようであれば、午前の授業と午後のアクティビティにも参加してよいとのことであったので、本人の希望もあり、9:30より授業に復帰させた。他の生徒たちは全員元気であった。

この日の午前中の英語の授業は、8:30より4人のグループで進められ、イラストのカードを使った質問、時計の読み方と時程表の作成、アルファベットの1字を頭文字としたカテゴリごとの英単語を発表するゲームなどが、ワークシートを使って行われた。いずれも基礎的な内容であり、全員が日本語をできるだけ使わずに相談しながら取り組むことができた。11:20に終了し、昼食は生徒からのリクエストもあり、アラモアナセンター内に新しくできた白木屋のフードコートでとることにした。ここでは日本食や小さな弁当も買えるので、女子生徒も利用しやすいようである。

12:15に昼食を終え、ジェシー先生の引率で、ライトバンに乗車してパールハーバーに向かい、13:30から16:30まで、パールハーバーの資料館や戦艦ミズーリ記念館を見学した。時間の都合でアリゾナメモリアルには行くことができなかったが、資料館をゆっくりと見学することができたことはとてもよかったと思う。事前のレクチャーはなく、現地でのガイドもいなかったが、昨年末に日本の安倍晋三首相が訪問して話題になったこともあり、私自身この場所の見学はとても大切であると考えていたので、代わりに私が生徒たちに説明した。生徒たちはこの場所で起きた出来事をほとんど知らず、大きな驚きと興味を持って見学している様子であった。見学中の態度もとてもよかったと思う。すべて終了して学校に戻ったのは17:15であり、昨日とは違い、長い一日で、生徒たちも疲れた様子であった。午前中病院に行った生徒も元気に参加することができた。



戦艦ミズーリ記念館



戦艦ミズーリ甲板よりパールハーバーを望む

◎5日目(2月1日 水曜日) 天気:晴れ

昨日は長い一日だったので、疲れて体調を崩さないか心配していたが、全員元気に登校することができた。昨日病院に行った生徒も、まだ鼻がつまるものの、のどの痛みはなくなり、大丈夫とのことであった。この日の午前中の8:30から11:20までの英語の授業の主な内容は、二人ペアになって基本的な日常会話をするレッスン、椅子を輪にして座り、英語で示された条件を満たす者が席を移動して取り合うゲーム、アメリカ通貨の種類とショッピングの方法を、カードを使って学ぶレッスンなど、日常で必須の英会話を、英語が苦手な人も体験しながら学べる、とても工夫されたものであった。しかしやや盛り上がりには欠けるところがあり、ジュディ先生に助けをもらいながら何とかこなす状態であった。せつかくの時間を受け身で過ごしてしまう人が多く、もっと積極的に参加するように私から注意を呼びかけ、ここで学んだ内容をホームステイ先で実践してみることを提案した。

11:20から12:15までは昼食を昨日と同じフードコートでとり、白木屋の向かいにあるフードランドで弁当を買ってくることも許可した。ここには小さな弁当やバイキング形式のサラダバー、惣菜売場があり、量や値段を抑えることができる。その後、ジェシー先生とメアリー先生と一緒に、市バスでダイヤモンドヘッドに向かった。生徒たちは一般のお客さんと一緒に初めて乗るバスにちょっと緊張気味であったが、終点で降りて、そのままダイヤモンドヘッドの山頂まで元気に歩き、ちょっと曇ってはいたものの、美しい景色を眺めることができた。暑くなりすぎず、またそれ程の混雑もなく、よかったと思う。その後は市バスで学校まで戻り、16:00に解散して帰宅した。



ダイヤモンドヘッド入口にて

ここまで午前中にグローバルビレッジで英語の授業を受けて、午後は外でのアクティビティというプログラムを3日間こなしたが、生徒たちもペースがつかめてきたようである。特に野球部中心の1班の生徒たちには、このスケジュールは合っているようであり、ずっと教室内で過ごすよりも、毎日でも外に全員で出かけることを楽しみにしているようであった。男女間の仲も良く、外では終始楽しく過ごすことができていたが、せっかくの海外研修なのだから、英語の授業やホームステイ先での英会話にもより積極的に参加するように意識させなければならなかったと感じた。

◎6日目(2月2日 木曜日) 天気：晴れ

今日も8:30までに全員が元気に登校することができた。午前中の英語の授業は、人や動物、物が位置する場所の説明の仕方について二人ペアになって、様々なイラストを使って学ぶ内容であった。基本的な表現を習ったあとで、一人が英語で説明したものをもう一人が図で示したり、パズルの中に隠された魚や動物を探し出して、それがどこに隠れているのか英語で説明したりするなど、楽しみながら学ぶことができた。また一人が目隠しをして、もう一人が英語で案内して校舎内を歩かせるレッスンなど多彩であったが、昨日の授業の後、参加態度に注意を呼びかけたことやグループを入れ替えたりした効果もあり、今日の授業では全員が積極的に参加して雰囲気も良く、たくさんの発言があった。



目隠しをして英語で案内するレッスン



アール・大川先生の講義 (ILHA)

生徒たちもかなり慣れて、アラモアナセンター内を迷わずに歩けるようになり、昼食時には各自で買ってきたものを決められた場所で食べるかたちが定着した。その後12:15より、グローバルビレッジと同じ建物の12階にあるI-LION HAWAII SCHOOLに移動して、アール・大川先生の講話を受講した。global citizenになるための5つの条件、personal developmentについてのお話で、倫理的な難しい内容も含まれていたが、トヨコ・大川先生が中学生にも分かりやすく通訳して下さい、生徒たちもノートを取りながら15:45の終了まで、しっかりと聴くことができた。やや緊張気味で、質問があまり出なかったものの、受講態度はとても立派であったと思う。ぜひここで学んだことを、これからの生活に生かして欲しいと感じた。その後、16:30までに全員帰宅した。

◎7日目(2月3日 金曜日) 天気:晴れ

今日は金曜日であるだけでなく、午後のアクティビティでアラモアナビーチに行く予定だったので、全員とても楽しみにしていたようである。8:30から11:20まで、いつもの英語の授業が行われた。今日の内容は、自分の暮らす街を英語で表現するレッスンであり、二人ペアになってお互いの暮らす街がどんなところなのかを説明した。またハワイに来て1週間が過ぎた感想を、両親宛に英語で手紙を書く時間があり、月曜日の英作文に比べると、全員よく書けていた。最後は22個のハワイ語の単語について、英語の意味をグループごとに想像して当てていくゲームで、まったく意味が分からなかったものの、なぜかとても盛り上がった。会話でよく使う基本的な表現や単語を、いろいろな方法で身につけていく授業は生徒たちにとっても、取り組みやすいものとなっているようである。教室内で日本語を使ってはいけないルールを破り、先生に腕立て伏せのパナルティを与えられたグループもあったが、終始和やかな雰囲気が進めることができた。

昼食はアラモアナセンターのフードコートでとり、午後のアクティビティは12:30から14:00までフラのレッスン、14:00から16:00までアラモアナビーチでスポーツという活動的な内容であった。フラはグローバルビレッジの教室で、ワイヒネ先生の本格的な指導のもとに行われた。全員初めての体験だったこともあり、とても熱心に取り組むことができ、またウクレレ体験や先生の出身地であるカウアイ島の神話のお話などもあり、貴重な時間となった。その後はジェシー先生と一緒にアラモアナビーチに行き、海で泳いだり、サッカーやバレーボールをしたり、全員思いきり体を動かした。ホームステイの家族と一緒に海に行く機会はあっても、生徒14名全員一緒に海で過ごす時間は初めてだったこともあり、時間を忘れるほどの盛り上がりであった。結局予定よりちょっと遅れて、16:30に解散した。



フラのレッスン



ウクレレ体験

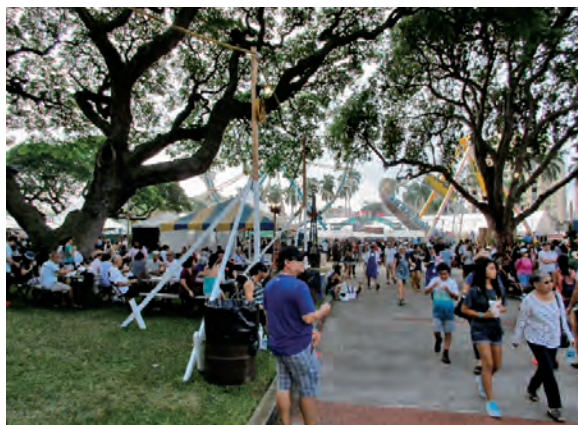


アラモアナビーチにて

明日とあさっては学校が休日となり、各ホームステイ先で過ごすことになるため、貴重品と体調の管理に気をつけるように全員に呼びかけた。週末の予定を事前に確認させたところ、プナハウスクール（オバマ前米大統領の出身校）のカーニバルやフットボールの試合観戦、フットサル、ワイキキ観光やビーチなど様々であった。ぜひ有意義な時間となるように過ごして欲しいと思う。

◎10日目（2月6日 月曜日） 天気：曇りのち雨

生徒たちの週末の様子を聞いてみると、金曜日の夜か土曜日にプナハウカーニバルに出かけた人が多かったようである。これはハワイの名門私立学校であるプナハウスクールの年に1回の学園祭であるが、遊園地のようなアトラクションが特設されて多くの子供たちで賑わう一大イベントである。その他ではワイキキの観光やビーチ、スポーツなど様々であったが、日曜日はNFLスーパーボウルが開催されたこともあり、観戦パーティーに一緒に参加したり、家族が出かけてしまい、一日生徒だけでフリーだったグループもあった（このグループは結局どこにも出かけなかったとのこと）。この週末はハワイの多くの人々が楽しみにしている行事が多くあり、良くも悪くも影響を受けたようであるが、いずれにしても、体調不良などの問題はなく、全員が元気に登校することができた。



プナハウカーニバルの様子（2月3日～4日）

8：30から11：20まではジュディ先生の英語の授業で、二人ペアとなり人物の性格、容姿の特徴を英語で表現するレッスンを、イラストや写真などを用いて行った。先生の説明やワークの指示がすべて英語で行われるので、生徒たちは教え合いながら進めなければならないが、積極的に発言して、雰囲気良く進めることができた。残りの授業も少なくなってしまうが、ここで学んだ表現を、ホームステイ先で話してみるように呼びかけた。

昼食をアラモアナセンターのいつものフードコートでとった後、今日の午後のアクティビティは、ホノルルのダウンタウンとチャイナタウンの見学ということであったが、10時頃より雨が降りだし、昼食後には風も強く吹いてスコールのような大雨になった。傘を持っていない生徒が多かったこともあり、グローバルビレッジの先生の判断で、結局午後のアクティビティは中止し、アラモアナセンター内でショッピングやゲームをして過ごすかたちへと変更になった。その後も強い雨風が断続的に続く不安定な天気夕方まで続いたため、無理に出かけなかったことは正解であったが、結果として長時間をアラモアナセンターで過ごす形になってしまい、生徒たちはやや退屈気味であった。雨天でも見学できる施設などの代案を、私が提案すべきであったと反省した。

◎11日目（2月7日 火曜日） 天気：晴れ

今日は昨日とはうって変わり、期待通りの晴天で湿度も低く、とても過ごしやすい天気となった。全員元気に登校し、8：30から11：20までジュディ先生の英語の授業が行われた。今日の内容は昨日の続きで、2分の制限時間の中で席を移動しながら、一人ひとりの様々な好みを英語で聞いていくもの、未来形の短い疑問文をお互いに出し合うもの、18枚の対話カードを用いて、その話題に対して簡潔に答えるもの、手相を英語で表現するもの、基本的な英単語を、2チームに別れて、ゼスチャーで当てるゲームなど、多彩なものであった。今日も良い雰囲気、特にゲームでは盛り上がり進めることができた。



グローバルビレッジの授業の様子（11日目 ジェスチャーゲームほか）

授業終了後は、ジェシー先生の引率のもと市バスでワイキキに移動し、水族館近くのフードコーナーで昼食をとり、13:00よりワイキキ水族館を見学し、14:00からワイキキビーチでスポーツという予定であった。しかし水族館見学中に、1名の男子生徒が軽い熱中症の症状で頭痛と吐き気を訴えたため、このまま外で活動させることは困難であると判断し、アラモアナに戻ってILHAの教室で休ませてもらうことにした。他の生徒たちは、ワイキキビーチで予定通り15:30まで過ごし、その後バスで学校に戻り、16:30に解散した。楽しみにしていたワイキキビーチであったので、元気に走ったり、泳いだりしていた。体調を崩した1名も涼しい教室で休ませてもらった結果回復し、無事に帰宅させることができた。毎日の午後の外での活動による疲れと、寒暖の変化で体調を崩しやすい状態にあり、やはり注意が必要なのだと痛感した。



ワイキキ水族館でウニに触ってみる



ワイキキビーチにて

明日はグローバルビレッジの最終日であるが、午後にはアラモアナビーチで、3回目のスポーツのアクティビティが予定されているので、無理をしないこと、また荷物の整理などの帰国の準備を進めるように注意を呼びかけた。

◎12日目（2月8日 水曜日） 天気：晴れ

昨日のワイキキビーチでは思いきり活動したので、今日体調を崩す生徒が出るのではないかと心配したが、全員元気に登校することができた。昨日の午後休んだ1名も今日はすっかり元気であった。8:30から11:00まで、ジュディ先生の最後の授業が行われた。今日の内容は、二人ペアで好きな料理についてのやや長い会話に挑戦するもので、その材料や調理法などを英語で表現することが求められた。次にハワイアンフードのレシピを教室の外から取材してグループにシェアするレッスンで、やや難しい内容であったが、全員が頑張っており、最後にアラモアナセンターのフードコートでハワイアン料理を買って、全員で少しずつ食べた。ホームステイ先で食べた生徒もいて、ハワイ独特の料理を全員が体験することができた。11:10にすべてのレッスンが終了し、全員にジュディ先生から修了証書が手渡された。（最後まで御指導下さったジュディ先生、ジェシー先生、ありがとうございました。）



無事に修了証書を受け取ることができました

11：20から12：15まで、アラモアナセンターのフードコートで、ジェシー先生と一緒に昼食をとり、その後はアラモアナビーチで14：15までサッカーやフットボール、キャッチボールなどをして過ごした。ビーチでの活動は3回目ということもあり、誰も海に入ることもなく、明日の帰国に備えて、余り無理をせずに少し早めに終了した。その後は明日の空港での集合時間や荷物の重量制限への注意、お世話になった家族への感謝とお礼の言葉を忘れないことなどと呼びかけた。生徒たちはアラモアナセンターで最後の買い物をし、17：00までにすべてのグループが帰宅した。

◎13日目（2月9日 木曜日） 天気：晴れ

いよいよ帰国の日である。生徒たちは7：30までにホノルル国際空港にそれぞれのホームステイ先の車で送ってもらい集合した。デルタ航空のチェックインカウンターで荷物を預けた後、出国、搭乗へと進んだ。出国の際は、大半の生徒たちは簡易の荷物検査で通過することができたが、私と3名の生徒だけは、またしても長時間待たされて厳しい検査を受けることになったため、搭乗ゲートに着いたのは、搭乗開始時刻のわずか20分前であった。その後は順調であり、10：43にホノルルを出発し、日本時間の2月10日の16：00に成田空港に到着した。入国審査、荷物受け取り後、学校のバスで宮城野校舎に向かい、夕食休憩を経て21：30に無事に帰ることができた。ローズホールで解散式を行い、22：00に生徒たちは保護者とともに帰宅した。

おわりに

本報告は平成28年度のハワイ研修の第1班の記録である。前期課程2学年の生徒を2週間ひとりで引率することは、私自身とても不安であったが、大きな事故やトラブルもなく、無事に研修を終えて保護者のもとに生徒たちを帰すことができたことは本当によかったと思う。4年前にI-LION HAWAII SCHOOL (ILHA) に生徒を引率した時とは異なり、研修の内容やスケジュール、ホームステイの受け入れ態勢など、様々な課題があることを感じたが、今回の研修が参加生徒にとって有意義な時間となることがまずは第一であると常に考えて、事前に注意を呼びかけ、問題に対処しようと努めた。生徒たちも私が置かれている状況をよく理解し、慣れないホームステイでいろいろなことがあったと思うが、わがままなことを主張することもなく、お互いに助け合いながらよく頑張ったと思う。そして、未熟ながらも英語はもちろん、ハワイの自然や文化、歴史に触れることで多くの啓発を受けたことと思う。今回の研修がこれからの生徒たちの成長につながることを期待したい。

なお、第2班と第3班の研修も無事に終了し、平成28年度の第2学年ハワイ研修は全日程を終えた。これから各班の引率者でお互いの問題点を共有して、来年度の研修に引き継いでいきたい。

最後に、ハワイ研修の実施に際しまして多大な御支援を賜りました、加藤雄彦校長先生に心より感謝申し上げます。

(6) 平成28年度の職員研修について

フレックスコース 多賀 努

平成28年度は本学創立111周年記念の年でした。この記念事業として全職員を対象とした次の2つの研修会が開催されました。

1 仙台育英学園創立111周年記念職員研修会

講演会『学園のリスクマネジメント』

講師：慶應義塾大学大学院 経営管理研究科 教授 大林 厚臣 先生

日時：平成28年9月12日（月）15:00-16:30

会場：本学宮城野校舎「ゼルコバホール」

2 仙台育英学園創立111周年・創立者加藤利吉先生生誕134年職員会津研修

加藤利吉先生顕彰碑・交通安全地藏尊参拝・献花

講話 富岡町3.11を語る会 語り人 青木 淑子 先生

永年勤続表彰式及び昼食会

日時：平成28年10月1日（土）10:15-13:00

場所：会津若松市飯盛山及び郡山市ホテル華の湯

以下にこの二つの研修の記録をまとめ、報告いたします。

1. 『学園のリスクマネジメント』

学園のリスクマネジメント 慶應義塾大学 大林 厚臣

ただいまご紹介いただきました慶應義塾大学の大林です。どうぞよろしくお願いいたします。

昨年、仙台育英学園が創立110周年を迎えられました年に、縁ありまして学園のリスクマネジメントについての研究を受託いたしました。今日ご報告いたしますのはその第一回目といいますか、最初の成果報告の内容は間もなく創立110周年の記念誌に掲載していただきますけれども、その中からとくに仙台育英学園のみなさまにご報告する機会をいただいたということで、先生方の関心にお答えする形で内容をピックアップして、先行的にご報告させていただくものです。

昨年末にヒアリングでお邪魔しまして、多くの方々から本校の取り組みや経験について調査にご協力いただきました。また、みなさまには、加藤聖一先生が作成されたアンケートに回答していただきました。その内容も参考にさせていただいています。そういう意味でさまざまな形で研究のご支援をいただいています。報告に先立ちまして、まずは、みなさまに御礼申し上げます。どうもありがとうございます。

では、内容の説明に入ります。最初に、やや総論的なこととなりますが、「教育機関とリスクマネジメント」ということでざっくりとお話しさせていただきます。

教育機関とリスクマネジメント

全国に5万以上。小規模多数。

活動内容と抱えるリスクには共通点がある。

経験や対策の情報共有の効果が大きい。

全国には教育機関が5万以上あるそうですが、どのような組織であるのか、その特徴を考えると、規模は大小ありますけれども総じて企業などと比べると小規模であって、それが全国津々浦々に多数あるというのが教育機関の特徴だと思います。そうすると、教育機関それぞれのさまざまなリスクに対応しなければならない訳ですが、ひとつの学校、ひとつの教育機関で専門家を雇って調査研究して独自の対応を取るといったことは規模的に難しいのが実情だと思います。教育機関それぞれの活動に独自性はあるものの、大きな目で見てみると共通点が多いと言えると思います。修

学生の年齢は共通しています。小学校なら6歳から12歳で共通しています。授業ひとつひとつは先生方がさまざまに工夫されていると思いますが、カリキュラムという点からは共通していることが非常に多い。行事、校舎の構造や使う設備、組織体制、こういったものは共通している。これは全国5万を超える教育機関で共通しています。細かいところで見えていくと違いがあるはずなのですが、大きな目で見ていくと共通点が多いという特徴が

あります。これが教育界の特徴であります。したがって、各学校の経験や対策について共有する効果が大きいのではないかと思います。全国5万の教育機関と、そこで活動している教育関係者の方々の知見をお互いに共有することができればたいへん効果的だと思います。

このような教育機関の中で比較的大きな仙台育英学園がリスクマネジメントに積極的に取り組まれ、経験を重ね、情報発信をされる意義はたいへん大きいと思います。実際の取り組みにつきましても、これから説明させていただきますが、仙台育英学園に留まらず、全国の教育機関にとってモデルとなりうる、そのような取り組みの方向をめざしていると私は感じています。私自身にとっても、微力ですが、お手伝いができれば光栄ですし、深い活動に参加させていただくことになると考えています。

では、リスクマネジメントそのものについて説明をしていきます。

リスクマネジメント・サイクル

リスクの洗い出しと評価

リスクへの対応計画

対策の実行と訓練

対策の見直しと改良

まず、「どのようにリスクマネジメントをしていくか」という考え方なのですが、リスクマネジメント・サイクルについてお話しします。リスクマネジメントに限らず、組織の経営について、行動の仕方について、PDCAサイクルという考え方があります。これは計画・実行・見直し・改良を継続的に進めていくという考え方です。この考え方をリスクマネジメントに当てはめたものがリスクマネジメント・サイクルという考え方です。

では、どのようなことをするかというと、まずは組織が直面している「リスクの洗い出しと評価」です。

やるべきことの全体像をつかみ、その上で「リスクへの対応計画」ということを考えます。そして、「対策を実行する」あるいは「必要に応じて訓練をする」。そして、その「対策の見直しと改良」を繰り返し行っていきます。このサイクルを一回だけというのではなくて、継続して行い改良を続けていくことになります。

それぞれの活動についてもう少し詳しく説明します。まず、「リスクの洗い出しと評価」についてです。お手元の資料の後ろの方に「リスクマップ」があります。英語で書いてある事例ですが、イギリスの内閣府が作成している「国としてのリスクマップ」を持ってまいりました。これは公開されている資料です。縦軸がリスクの影響度（上に行くほど大きい）、横軸が蓋然性（右に行くほど高い）です。したがって、右上になるほど起こりやすい重大なリスクということになります。図では「Pandemic Human Disease（感染症の大流行）」と書いてあります。影響度も可能性も大きいということです。経済的な問題とかいろいろとありますが、もしそれが発生した時の犠牲者の数がどれぐらいになるかということが大きなウェイトを占めます。真ん中あたりに、「Coastal Flooding」とありますが、「テムズ川の河口域の洪水」です。ロンドンの一部を含んだ大都市災害です。頻度で見ると、右の方に「Attacks on Transport」とあって、意図的な攻撃、テロのようなものを指しています。2005年に起きたロンドンの地下鉄爆破テロのようなことを想定しています。これはかなり頻度が高そうだと考えられています。それから、隣の「Attacks on Crowded Places」は、このリスクマップは2010年に発行したもののなのですが、2年後にロンドン・オリンピックの開催が予定されていました。そのオリンピック会場でテロを起こすようなこと。右下の方の「Cyber Attacks」サイバー・テロです。2016年現在ではもっと頻度は高まっているかもしれません。そして、今では医療機器とか原子力発電の制御機能にも影響を与えると指摘されています。ですから、影響はもっと深刻なものになっている可能性があると思います。これは国レベルで出したもので、イギリス政府は2年毎にリスクマップを作り直して公開しています。そして、予算配分の優先順位を決める参考資料としているということです。アメリカでも安全保障上の軍事的なリスクを含めて半年に一度作成していると言われています。内容が非常に機微に触れるので公表はされていないということです。日本政府はどうか。担当者レベルではあるかもしれませんが、国全体としては作っていないのではないかと思います。リスク対策が進んでいる国では国レベルでこうしたものを作っています。

企業でこのようなリスクマップを作っ



ているところは聞いていますが、実は加藤聖一先生の修士論文で仙台育英学園のリスクマップを作ってもらったわけなのですが、私の知る限りでは、教育機関としてリスクマップを作成したのは仙台育英学園が最初だと思います。

では、この「リスクの洗い出しと評価」なのですが、細かく挙げていけば非常に数が多くなるのですが、対策を取る上での単位になりやすいように、ある程度まとめてあります。仙台育英学園のリスクということで50項目を選びました。あくまで2015年の段階でということ、これから改訂されていくべきものですが、この50項目すべてについて見ていきます。

まず、安全管理に関しては次のとおりです。学校管理下での事故・ケガ、施設・設備・備品管理の不備及びそれに伴う事故、食中毒、不審者の侵入、危機対応の初動不備、病気、感染症流行

安全管理:

学校管理下での事故・ケガ
施設・設備・備品管理の不備及びそれに伴う事故
食中毒
不審者の侵入
危機対応の初動不備
病気
感染症流行

学園のリスク

学校運営:

職員の業務ミス・準備不足
個人・機密情報に関する問題
緊急時における管理職の不在
教育課程の問題
危機対応の初動不備
施設・設備・備品の配置問題

学園のリスク

生徒指導:

生徒の問題・迷惑行為
生徒の犯罪行為
生徒の状態・状況
職員による所有物管理
職員による生徒対応の問題
職員の問題行動

学園のリスク

法務・倫理:

管理職・職員による不正・犯罪行為
不当請求問題
著作権・盗作・肖像権問題
契約書の不備

労務人事:

労基問題
職員の精神的問題・労働災害
職員の人間関係問題

学園のリスク

学園のリスク

他人資本・費用の問題
土地利用制限
資本金運用の失敗
取引業者に関すること
景気・為替変動
少子高齢化
風評被害
競合校や他校

まず、安全管理に関しては次のとおりです。学校管理下での事故・ケガ、施設・設備・備品管理の不備及びそれに伴う事故、食中毒、不審者の侵入、危機対応の初動不備、病気、感染症流行は概念としては重なりますが、対策や予防方策が違いますが分けてあります。

次に、学校運営に関して、職員の業務ミス・準備不足、個人・機密情報に関する問題、緊急時における管理職の不在、教育課程の問題、危機対応の初動不備、施設・設備・備品の配置問題。

そして、生徒指導上のリスクですが、生徒の問題・迷惑行為、生徒の犯罪行為、生徒の状態・状況、職員による所有物管理、職員による生徒対応の問題、職員の問題行動にまとめられます。

法務・倫理に関しては、管理職・職員による不正・犯罪行為、不当請求問題、著作権・盗作・肖像権問題、それから契約書の不備です。

労務人事に関しては、労基問題、職員の精神的問題・労働災害、職員の人間関係問題。

その他、財務管理に関するものとして、他人資本・費用の問題、土地利用制限、資本金運用の失敗、取引業者に関すること、それから、社会経済的な内容になりますが、景気・為替変動、少子高齢化、風評被害、競合校や他校、こういう競争上のリスクもあります。

さらに、法令や政策の変更。人事制度に関するもので、離職・採用難、業務負担の格差、若手教育・引き継ぎの不十分、外国人職員の雇用に関わる問題、資格不所持、進路指導に関するもので、進路選択・進路先での問題。生徒募集施策の失敗。

最後のページで、学園イメージの毀損。その下はハザード・リスクと呼ばれるもので、事故や災害のリスクですね。生徒・職員の事故・事件巻き込まれ、東日本大震災のような大規模地震とそれに伴う津波、地震、火災、天候不良・異常気象・冷夏猛暑・台風等、落雷、近隣の災害、これはもらい事故のようなもので、これによって学園施設・設備・校舎の一時的使用不可にな

学園のリスク

法令政策の変更
離職・採用難
業務負担の格差
若手教育・引き継ぎの不十分
外国人職員の雇用に関わる問題
資格不所持
(進路指導)進路選択・進路先での問題
生徒募集施策の失敗

学園のリスク

学園イメージの毀損

生徒・職員の事故・事件巻き込まれ

大規模地震とそれに伴う津波

地震

火災

天候不良・異常気象・冷夏猛暑・台風等

落雷

(近隣災害) 学園施設・設備・校舎の一時的使用不可

(情報システム) 情報管理での被害・故障

ることがあります。情報システムに関わる被害・故障。以上この50の項目にまとめています。それをリスクマップにしたのがお手元の資料の最後のページです。縦に影響度、横に頻度を取っています。これも昨年度実施したアンケートでみなさんに評価していただいたものの平均値をもとにして、それぞれの分野に詳しい方に調整していただいて作成しています。先ほども申しましたが、企業でこういうものを作っているところはありませんが、教育機関としては最初のものになると思います。そして、かなり多くの学校でも同じようなリスクマップになるのではないかと私は考えています。

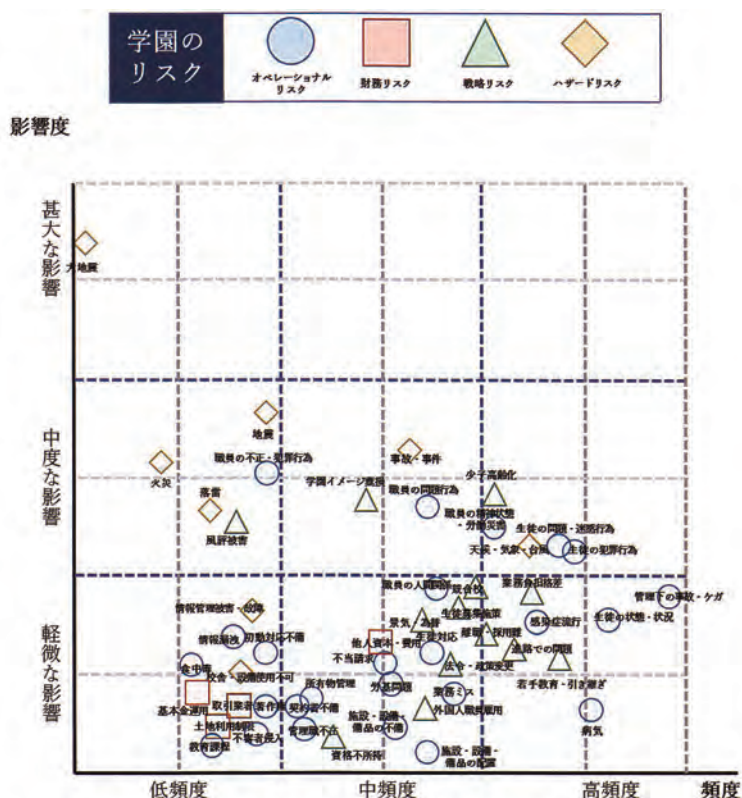


図2：仙台育英学園のリスクマップ

出所：加藤聖一（2016）、「私立学校法人のリスクマネジメント」、慶應義塾大学大学院経営管理研究科修士論文、p.119

このリスクマップで飛びぬけて影響力の大きいものが大地震で、頻度は低いのですが、甚大な影響があります。右上に近づくほどより重大なリスクということになるのですが、影響度の大きいものとしては火災、地震、事件・事故があります。災害などによる影響が大きいということです。その他、右上の方に近いものとして、少子高齢化があります。これは、学校経営を考えると比較的大きなリスクで、どう対応するかということが大切な課題です。頻度でいちばん大きいのが「管理下での事件・事故」です。これは授業であったり、課外活動であったり、仙台育英学園はスポーツが非常に盛んですから、怪我はある程度発生してしまう。そういう学校の特徴を反映しているかもしれません。それから、三角で書いてある真ん中あたり、「中度な影響」に「風評被害」とか「学園イメージの毀損」があります。これは、単独で起きるというよりも他の事件・事故と併せて起こるので評価が難しいものです。このような形でリスクの全体像を捉えた上でリスクへの対応を考えることになります。

リスクへの対応計画

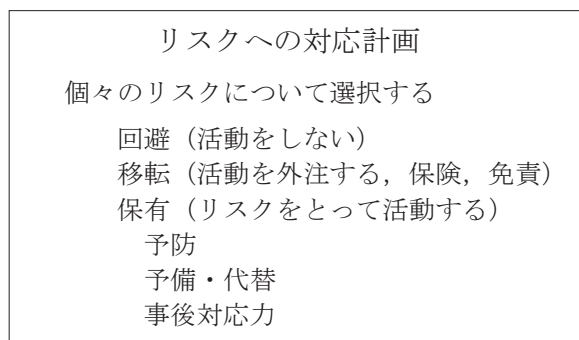
リスク横断的な管理

重大なリスクの特定

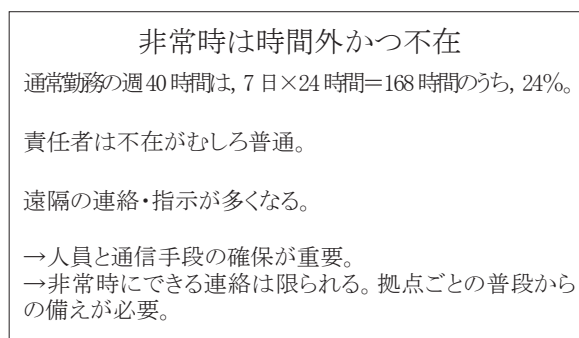
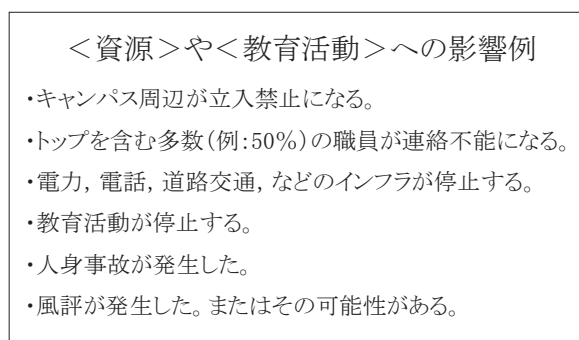
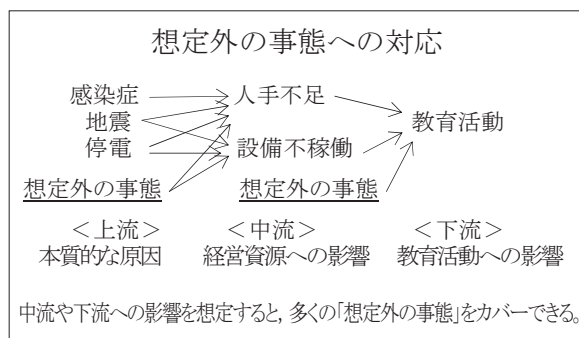
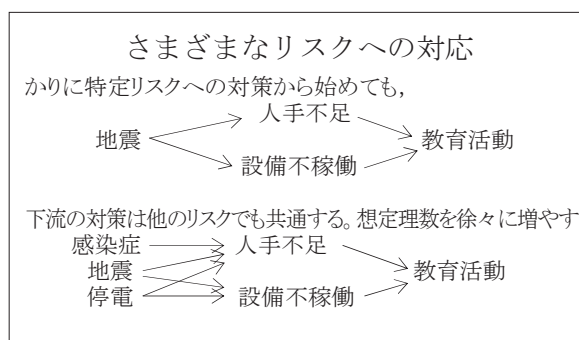
対策の優先順位づけ

年度ごとの対応と目標

リスクへの対応については、全体的な「リスク横断的な管理」と「個別のリスクごとの対応」という視点に分けられます。まず、「リスク横断的な管理」については、先ほどのリスクマップから重大なリスクを特定し、対策の優先順位をつけることになります。もちろん、どのリスクも無視してよいものではありません。しかし、組織として、学園として、予算や人員を考慮しなければなりません。ですから、全体的な目配せは



項目が基本になります。対応を大きく3つに分けることができます。「回避」「移転」「保有」です。「回避」はリスクが非常に大きく、その活動をしなことです。非常に怪我の発生が多い行事やスポーツ種目を行わないこともそのひとつです。費用対効果を考えてということになります。「移転」はリスクの一部を他の人にもってもらうことで、たとえば、保険に入ることは財務的なリスクを保険会社にもってもらうことです。もちろん、管理責任が移転するわけではありません。それから、リスクを取って活動する「保有」。この中でも事件や事故が起き



するものの、とくに1年とか3年とか時間を区切って重点的なテーマに構造的に手を付ける必要があります。大きな投資になることも考えて重点的な取り組みが必要だということになります。重大なリスクとして右上にあるリスクを選ぶこともひとつの切り口になるし、手を打つことの効果の大小も対策の優先順位に影響を及ぼすことになります。もちろん、リスクが差し迫っていて対策が急がれるという場合も優先順位に影響を与えることになります。

次に個別のリスクについて考えます。先ほどの50項目が基本になります。対応を大きく3つに分けることができます。「回避」「移転」「保有」です。「回避」はリスクが非常に大きく、その活動をしなことです。非常に怪我の発生が多い行事やスポーツ種目を行わないこともそのひとつです。費用対効果を考えてということになります。「移転」はリスクの一部を他の人にもってもらうことで、たとえば、保険に入ることは財務的なリスクを保険会社にもってもらうことです。もちろん、管理責任が移転するわけではありません。それから、リスクを取って活動する「保有」。この中でも事件や事故が起きないように予防に注力し、事後的な対応力を身に付けることも必要です。

これらを組み合わせて取り組みレベルを上げることになります。対策としてさまざまなものを組み合わせるわけですが、「さまざまなリスクへの対応」に例を挙げておきました。たとえば、地震が起こって、人手が足りなくなったり、設備が稼働できなくなったりして教育活動に支障をきたすことがあります。リスクマネジメントの基本的な考え方は、できるだけ原因に近いレベルで対策を打って、被害を未然に防ぐことが望ましいというものです。いまの我々の科学技術では地震を防ぐことはできないのですが、地震が起こっても被害を発生させないように耐震化を行うとか、設備を固定するとか、できるだけ原因に近いところで対策を取ることが大切です。そうすると、感染症や停電と書きましたが、地震被害の対応は感染症や停電発生後の対応にもかなり共通します。中ほどに書いてある経営資源、人であったり、モノであったり、お金であったりするのですが、原因がさまざまでも中流や下流の対応は共通することになるので、想定リスクを増やしても、対策がそれに比例して増えるわけではありません。そして、このことは想定外のリスクへの対応にもつながります。

ですから、どのような原因があるかという点から少し目を離して、学校の経営資源に目を向けて、「働ける人数が半分になったら、3分の1になったら、生徒の安全を確保するためにはどうしなければならないか」を考えることも大切です。何が原因かということにあまり注目しないで書いたのが「<資源>や<教育活動>への影響例」です。キャンパス周辺が立入禁止になった時、たとえば隣接する建物が火災になったり有害物質が流出したりしたというときに「どのような対策を立てるべきか」ということを具体的に考えてみたものです。

ゆっくりと進行する事態には対応しやすくて突発的な事態への対応は時間外だったり、管理者が不在だったりするものです。週40時間の勤務時間内の事故は実は全体の24%に過ぎないということになります。災害がいつでも起こりうると考えると、4回に3回は勤務時間外で、それが普通のことだということに

なります。ですから、非常時には、重要な連絡・指示は遠隔の連絡・指示になる可能性が高い。普段から人と人との連絡手段が確保されていることが重要になりますし、通信回線が混雑したりして連絡手段も限られることになりますから、拠点ごとに対応できるような備えをしておかなければなりません。

災害の場合を想定しますと、学校だけでなく、課外活動の場合もあるし、広い視野で地域の住民の方々の安全も考えなければなりません。生徒・職員・来客が「帰宅をする」「避難場所に避難する」「その場に待機する」という3つのどれでも選択できるような準備が重要になります。最も安全なものを適切に選べるのが重要です。帰宅の場合は帰路がポイントになります。避難の場合には避難誘導の訓練ができていないかが重要なポイントになります。待機するには、しばらく滞在できるだけの必需品の備蓄が可能かどうかポイントになります。

学校外、家族、地域の安全

生徒・職員・来客が、次のどれをも選択できる準備

- ・帰宅(帰路の安全)
- ・避難(避難・誘導訓練)
- ・待機(必需品の備蓄)

学校外における・生徒・職員・家族の安全、合流方法

家族がキャンパスに避難できるか。
周辺住民がキャンパスに避難できるか。
(来客の待機と似た課題)

それから、家族・地域の方々の安全について。家族の方々をキャンパスに避難させることがあるかもしれませんが、近隣の住民の方々を収容することがあるかもしれません。その場合には必需品の備蓄が必要になりますし、学校の中に入り慣れていない方々の収容に関しては慣れない場所での転落防止とか、考えておかなければならないことがあります。

次は、このような対策をどのような組織体制で進めていくかということです。組織のリスク対策の考え方として3つのディフェンス・ラインという考え方があります。具体的には、シートの最初に書いてある「現場対応」「管理」「監査」の3つのラインです。組織としてはこの3段階の防衛ラインを考えます。これを今回のリスクマネジメントに当てはめます。まず、一番目と二番目のラインになりますが、リスク項目ごとに、現場の担当者として組織全体の管理者を定めます。例えば、すでに、火災などについては、火元責任者が定められ、学校法人全体としての消防・火災に対する責任者が定められていると思います。そういったものを、それぞれのリスクごとに検討して定めることになります。その上で、リスクマネジメント・サイクル、つまり、対

組織体制

現場対応、管理、監査の役割分担

リスクごとに

現場の担当者と組織全体の管理者を定める。
リスクマネジメント・サイクルを回す。
現場から管理者への報告ルールを決める。

リスク横断的に

リスクマネジメント・サイクルを回す。
リスクごとの管理者から全リスク管理者への報告ルールを決める。

策を考えて、見直しをして、改善改良をしてという作業をします。併せて、担当者からの報告のルールを決めてください。どの程度の危険、どの程度の被害が発生した時に報告するか。発生するたびに組織全体の管理者に報告するのはどの場合か。軽い怪我という程度であれば、1か月とか半期とかにまとめて、件数を定期的に報告する。その程度のルールを決めなければならない。管理者は現場へのフィードバックをしてください。「こういう事故が起こったから、こういう対応を続けていくことで十分だ」とか、速やかに報告を受けて管理者の判断を示すことが必要です。1か月とか1年とか、まとめてフィードバックをすることになります。

それから、リスク横断的に学園全体としてリスクマネジメント・サイクルを回していきます。リスクごとの管理者から全リスク管理者への報告ルールを決めます。全リスク管理者といっても1人ではなくて複数でよいのです。

非常時対応の組織

限られた人数と時間のため、普段より下位の者が意思決定をする傾向がある。→ 訓練で各所にキーマンを養成しておく。

学校内外の異なる組織間では、公式な上下関係がなければ、合意による調整が基本。
(普段から使い慣れた、組織の能力と指揮系統を使う。)

組織内の指揮系統と、組織横断的な調整の、両方が必要。
→ (例)ICS

それから、非常時対応について。組織的な対応ができないような災害や事故などが起きたときです。平常とは違った組織体制が作られるわけですが、その特徴として、対応できる人数や時間も限られているので、普段よりも下位の人が意思決定をすることになります。新人でもその場にその人しかいなければ意思決定をします。上司の到着を待つわけにはいきません。必ずしもベストの判断でなくても放置するよりはよい。それから、学校職員だけでなく、警察や消防のような異なる組織との連携が必要になります。そのような場合にはコンセンサスを取りながらものごとを進めるこ

とになります。トップダウン型の組織が多いアメリカを見ても、異なる組織の上下関係はなかなかうまく働かない。組織の間では常にコンセンサスを作る。どちらかが相手をリードするような連携はうまくいかない。そういうやり方をまとめたものとしてICSがあります。Incident Command System ですが、これはアメリカの消防の分野で標準化された非常時対応の組織的な取り組みです。アメリカでは大規模な山火事がよく起こります。消防団は市町村単位で作られているのですが、少人数の組織が全国にたくさんあります。火災が広がってしまうと、ふだん一緒に仕事をしていない消防団が集まり、警察であったり、州兵という軍組織であったり、これが共同で山火事に対応しなければならないことがときどき起こります。本も書かれていて最近翻訳もされましたから、興味

ICS (Incidental Command System)

非常時対応の標準のひとつ。
米国の山火事対応から発展した。
主として現場における組織横断的な対応に用いる。

非常時対応に欠かせない機能と、
(指揮、対応、ロジ、情報・記録、財務・法務)
適切な単位規模を保ち、柔軟に組織を統合・分割する。

最初に現場に来た者が現場指揮者になる。
後から来た上位者に、必要に応じて指揮を渡す。
中枢は、現場を管理するのではなく、支援する。

ることが必要で、どれかが抜けないように作っていく。非常時にコンセンサスを作りやすく、誰が何をしているかを把握しやすくするために適切な単位として「5人以下のグループ」というのがあります。1つのグループが5人を超えないように、組織をどんどん細かく分けて、例えば、消火を担当する第一チーム、第二チームのように分けていって、それぞれの代表からなるグループで消火全体を管理する。それを記録して抜けないようにする。まずは、最初に現場に来た者がとりあえず現場指揮者になる。専門家でなかろうと、新人であろうと。そして、後から来た上位者にリーダーを代わってもらう。より詳しくはこのICSを読んでいただければと思います。

その他、コミュニケーション、広報。これが風評の予防であるとか、広く協力を得られるかどうかを決めます。非常時の記録もシートに書いた内容を読んでいただければ分かっているかと思えます。記録などについても訓練をしていないといきなりはできませんから、訓練の内容に含める必要があるかもしれません。限られた時間で手際よく書く経験が必要です。

コミュニケーション、広報

幅広い協力が得られるか否かがかかる。
風評の予防や、誤情報への対策にもなる。
信用は壊れやすく、回復しにくい。

広報担当者は、メディアを含めた各方面への情報対応を統括して行うのが良い。

情報対応は対策本部以外の場所で行うのが良いが、広報担当者は対策本部の会合には参加する。

非常時の記録

各部署で、発言・入札した情報のほか、対応を記録しておく。
記録は引き継ぎ交替をやすく、権限を絞る。法廷証拠にもなりうる。
事後の見直しでリスクマネジメントを向上させる。

記録をとる担当者を決めておくか、非常時に責任者が指名する。
訓練のときに、限られた時間の中で記録を取る経験しておく。

次はリスクマネジメント・サイクルに関する訓練についてです。頻繁に起こることは経験で対策が立てられますが、まれにしか起きないことは、足りない経験を訓練で補う必要があります。たとえば、地震に関する防災訓練を考えてみても、さまざまな規模の訓練が考えられます。机上で訓練をしたり、チャートの上で訓練をしたり、あるいは実際に人を動かしたり。机上の訓練は頻繁に行うことができます。使い分ければよいわけです。学園全体で行うのか、数人のメンバーで行うのか。それぞれにメリット・デメリットがあります。小規模であるほど頻繁に行いやすい。そういうメリットはあるわけです。訓練の目的が何なのかにもよります。まず、「習熟訓練」があり、普段と異なる状況でどのように判断するかという「判断訓練」、判断が難しい場面で意思決定をする訓練があります。それから、「課題抽出演習」、自分たちがふだん行っていること、取ろうとしている対策に改善の余地がないのか、リスクが潜んでいないかという課題を見つける訓練です。異なる種類のものを組み合わせた訓練もあります。

訓練

さまざまな目的と規模の訓練を使い分ける。

研究 / 机上 / 実働

小規模 / 大規模 / 組織連携

習熟訓練 / 判断訓練 / 課題抽出演習

大規模にも小規模にもメリット在り。
小規模は開催しやすく、回数を増やせる。

訓練の評価基準 (例)

習熟訓練:	達成度, 所要時間
判断訓練:	対応計画作成の質と所要時間 情報発信の質とタイミング
課題抽出演習:	発見した課題の質と量 対策の改良
組織連携:	連携・情報共有の量と所要時間 対策の普及

訓練と併せて、どのような評価基準で検討していくのかということも大切です。「習熟訓練」ならば達成度や所要時間を基準にすることになりますし、「判断訓練」なら対応を短時間で決められたか、「課題抽出演習」ならどれだけ課題が発見できたか、どの程度の改良ができたか、その他、「組織連携」についても評価基準を考えなければなりません。

訓練と併せて、どのような評価基準で検討していくのかということも大切です。「習熟訓練」ならば達成度や所要時間を基準にすることになりますし、「判断訓練」なら対応を短時間で決められたか、「課題抽出演習」ならどれだけ課題が発見できたか、どの程度の改良ができたか、その他、「組織連携」についても評価基準を考えなければなりません。

実はこうした訓練や演習に参加する方もさることながら、運営する方にとって一番のトレーニングになり

運営する者は、参加者より多くを得ることになる。

生徒さんや家族の方がいたということがありました。連絡手段が複数用意できる、比較的有効なインターネットを活用することで改善できると思います。

それから、家族の方々や周囲の住民の方々の受け入れについてですが、幸い多賀城校舎の近くに避難所があり、多賀城校舎に受け入れ依頼があったのは数名ということでしたが、これを受け入れたことは大変良いことだと思います。宮城野校舎については建物の中に入れることが危険であるという判断だったと思います。避難者を前にして難しい判断だったと思いますが、事後的にその判断が適切であったことが分かりました。現在の校舎は耐震化されましたから、今後は心配なく受け入れることができると思います。大勢の方を受け入れるときにはどうするかということも考えることになると思います。その他、非常に良い判断だったと思われることは、多賀城の校舎に早めに移動したことです。寒さや疲労のために健康を害する方がいませんでした。より設備の整っている多賀城校舎に移動したことで、水道であったり、プロパンガスであったりが活用できました。

それから、休校と特別休暇を早期に決定されました。これも地味ですが大変良い判断だったと思います。職員はすべて家族の一員であり、地域の一員です。もし、職場の仕事をしなくてもよいとなれば、家族や地域のためにすべきことができます。教育は重要な仕事ですが、それが1か月中断したとしても取り返しはききます。非常時には思い切って休校にする、業務を中断することは有効な判断だと思います。

まだ、調べきれてはいませんから、私自身も課題を見つけきれてはおりません。ご意見やご質問があればお願いいたします。本日はありがとうございました。

(質問)

リスクマップの影響度の高さについては、何かはっきりした基準があるのでしょうか？

(回答)

リスクマップの目的や組織に応じて、その都度、考えるもので、これを用いるべしという定説があるものではありません。今回の仙台育英学園の場合では経済的・財務的影響と生徒・職員の生命・安全に関わること、学園の信用という3つの軸でみなさまにお配りしたアンケートによって評価していただいています。それぞれの評価にウェイト付けをして平均値を出しました。そして、何人かのそれぞれの分野に詳しい人から意見を聞いて若干の調整を経た上で、この学園のリスクマップが作成されています。アンケートの結果を集計していますので、みなさまに評価していただいた、影響度に点数をつけていただきました。その加重平均を出して大きく3×3の枠の中の配置という形で表しています。

(質問)

リスクへの対応計画の中で、回避・移転・保有というお話がありました。教育機関の場合は多くのリスクが回避もできない、移転もできない場合が非常に多いと思うのですが、こういう場合はどうすればいいのでしょうか？

(回答)

私の出身高校の例で言うと、夏山登山をしていたのですが、その課外活動から得るものは非常に多いのですが、遭難の危険もあるということで、夏山登山を回避して、代わりに遠泳へ行ったということがありました。実は夏山登山で事故があって継続困難になって海に行ったということなのですが、同じような教育効果が得られるものでよりリスクの少ないものを選ぶという選択があります。

理事長・校長先生謝辞

先生方、最後までご清聴いただき、ご質問もいただきありがとうございました。創立111周年記念の教員研修として、「学園のリスクマネジメント」というテーマで慶應義塾大学大学院経営管理研究科の大林厚臣先生にお願いいたしました。大学院での研究や公的機関でのお仕事もあり、大変お忙しい中で足を運んでいただきました。ありがとうございました。

大学院経営管理研究科という言葉遣いは、私たちはあまりしませんが、慶應ビジネススクール（KBS）と言っていました。同行された研究室の院生の方たちが38期生とお聞きしました。私は3期生でしたので差し引き35年。月日が経つのは早いなと思いました。そして、それ以上に感じましたことは、私自身が大学院で学んだマネジメント・エコノミクス（ME）の内容がこういう形でどんどんと変わっていく姿を見て、研究テーマというのはこうして変遷していくものなのだったということです。

今日大林先生が話された中で、いくつかポイントがあると思うのですが、いま本校でも110周年記念誌の準備を進めているところです。実は創立100周年で大々的なものを作りたかったのですが、ご案内のとおり5月22日に大きな飲酒運転による事故が発生してしまいました。学園としての盛大なお祝いもできませんでした、記念誌の発行もできませんでした。そういう中でさらに私たちは東日本大震災を体験しました。まさに創立110周年記念誌の中に大林先生の研究課題のひとつであるリスクマネジメントを入れることによって、東日本大震災に関わる部分での、学園のひとつの総括ができればと考えました。大林先生にはそのあたりをご理解いただいた上で、さらに執筆までしていただけることになり、たいへん名誉なことであり、ありがたいことです。

ご質問もありましたので今日はあえて聞かなかったのですが、昨日もNHKでMEGA DISASTERを取り上げていましたが、最近NHKを中心にして災害や人災、いろいろなリスクを取り上げるようになっていきます。もちろ

ん起こらないに越したことはないのですが、朝鮮民主主義人民共和国のミサイル実験・核実験に関して、日本国民がもう少し真剣に考え対応していかなければならない時代がやってきたのかなと思っています。隣の大韓民国では、昔ほどではないということですが、抜き打ち的な訓練をしているということです。日本がすぐにそれをするという訳ではないのですが、そういうことも含めて対応を考えなければならぬのではないかと。仮に仙台が被災地になったらどうということになるのか。こういうことは考えなければならぬ事態だと最近思います。また、先生方もお詳しいと思いますが、地球温暖化による異常気象ですね。岩手県の沿岸部が台風によって甚大な被害に遭い、多くの方が犠牲になりました。仙台はたまたま運が良かっただけで、暴風圏の右側に入っていたら、ここで研修していられたかどうかとも考えます。大きな出来事から小さな出来事まで、先生にご指摘いただいたことがひとつひとつ思い浮かべられるわけです。

3つめに、これも大林先生への御礼になるのですが、先生のご指導の中で「リスクマップは常に変わっていくものなのですよ」ということを話していただきました。これは重要なことで2015年バージョンは2017年バージョンと同じではありません。リスクはどんどん変わっていきます。時代はどんどん変わっていきます。大林先生ご指摘のとおり、そして、ご質問いただいた先生にも感謝申し上げますが、「頻度がどのぐらいか」「被害はどのぐらいか」というポイントはここにいる先生方の意識によって変わっていくものなのですね。そういう意味では、これを継続的に先生方で評価し直しながら、過去とどのように変わってきているのかということを考えながら、リスクマップの洗い直しをしていかなければなりません。今日のお話の中で、リスクの内容も頻度も常に先生方の評価によって変わっていくのだということがご理解いただけたと思いますので、これからも時期を追って先生方にご協力いただきながら、新しいリスクマップを、3年ごと、4年ごとに見直してかなければならないと強く感じました。大林先生に感謝申し上げまして、今日の研修会を終えたいと思います。改めて大林先生に感謝の拍手をお願いいたします。

2 会津研修

平成28年度は仙台育英創立111周年、創立者の加藤利吉先生のご誕生134周年でした。言うまでもなく、加藤利吉先生の産土は会津の地です。仙台育英学園の原点というべきこの地を全職員で訪れて顕彰碑に参拝し、本学の伝統と建学の精神を確かめることがこの研修の第一の目的でした。

会津若松市の飯盛山にある加藤利吉先生の顕彰碑は、利吉先生の生誕110周年にあたる平成4年に会津の方々のご協力をいただいて建立されました。那須研修センターがあった当時は、職員対象の那須研修に向かう途中に立ち寄って参拝していました。しかし、那須研修センターを平成19年に那須塩原市に無償譲渡して以後は、入学生を対象にしたフレッシュマン・デイ会津研修の一環として生徒たちを中心に参拝することとなり、近年は情報科学コースの会津研修の中に組み込まれていました。したがって、冒頭に書いた目的での全職員対象の研修会は数年ぶりのことでした。200名程度の大所帯で飯盛山に上り、顕彰碑と、その隣りに建立された交通安全地蔵尊に参拝し、献花をしました。交通安全地蔵尊は「5.22」の交通事故を風化させないために「アイライオンデイ」として引き継がれている、危険運転で命を失った生徒たちの鎮魂と交通安全祈願の地蔵尊です。

幸い天候にも恵まれ、10月の会津としては暖かい穏やかな一日でした。参拝のあと、伯山交通のバスに分乗して郡山市にある磐梯熱海温泉ホテル華の湯に場所を移し、「富岡町3.11を語る会」の語り人青木先生のお話を聴きました。講話の内容については次にまとめておきます。

講話終了後に、鈴木孝司先生と箱島道泰先生の永年勤続表彰式がありました。お二人の先生方の長年のご労苦に心より敬意を表します。

富岡町3.11を語る会 語り人 青木淑子先生の講話

こんにちは。富岡町3.11を語る会の青木淑子と申します。仙台育英学園のみなさまに私たち富岡の話をお願いただけに心に感謝しております。ありがとうございます。

2011年3月11日から5年半が経ちました。私がこれからお話しするのは富岡という小さな町の話ですが、それだけでなく、双葉郡の話であり、福島の話であり、そして、日本全国の日本人が考えなければならぬ話だと思っています。どうぞ想像力を豊かに聞いていただければ幸いです。

富岡町はとても桜のきれいな町でした。人口は1万5,827人でした。現在はそれより1,000人ぐらい減っているかと思います。高齢化率が26.1%ととても低い、地方の小さな町です。なぜ、高齢化率が低いかというと、それは若者が町を出ていなくてもよかった町、働く場所があり、3世代同居・4世代同居がごく当然にあった町でした。それはなぜか。40数年前に原子力発電所が福島に、双葉郡に、富岡町に誘致されたということと深くかかわりがあります。

福島県の地図でいうと、太平洋に面した浜通りといわれる地域のど真ん中にあるのが富岡町です。海あり山あり原子力発電所ありの町でした。そこに2011年3月11日午後2時46分に地震が襲ってきます。みなさんのお住いの宮城県でも同じでしたでしょうし、人的被害については宮城県も大きな犠牲を出しましたよね。みなさん

もたいへんな思いをされたことと思います。

この写真は常磐線富岡駅を襲う津波の第二波の写真です。小さな集落は流され、富岡駅は駅舎もろとも流されてしまいました。この日襲った津波の高さは21.1mでした。この福島県の沿岸を襲った波の中では一番高い波でした。ただ、幸いなことに富岡は海の近くに町の中心部がなかったことと、波が内陸まで押し寄せない地勢だったために、このとき津波で亡くなった人は24名でした。東日本大震災による富岡町の直接死は24名。「あら少ないわ」と思われるかもしれませんが、岩手、宮城、そして、福島でも相馬や浪江に比べれば、人数としては、人の命を数で数えるのはいかなものかとは思いますが、非常に少ないです。23+1と昨年まではなっていました。1名の若い、20代の警察官が最後までパトカーに乗って避難を呼びかけ波にさらわれました。パトカーは打ち上げられましたが、未だにご遺体は上がりません。ご遺族の方がようやく4年目にして息子を死者の数の中に含めてくださとおっしゃったので24名になっています。ところが、5年たった現在、関連死と認められた数は290名を越えています。これが富岡を、双葉を、福島を襲っている原発事故の恐ろしさです。この災害、地震と津波によって駅前^{けがや}の情景は変わってしまいました。

そして、この写真は毛萱という地区の写真ですが、奥に移っているのが福島第二原発です。爆発したのは福島第一原発ですが、この第二原発からも建物の上から何やらもやもやしたものが立ち上っています。

双葉郡には二つの原発が建っていました。富岡町と楡葉町の間にあるのが第二原子力発電所、双葉町の大熊町の間にあるのが第一原子力発電所です。爆発したのは第一原子力発電所です。先ほども少し話しましたが、原子力発電所が誘致されたのは45年前ですね。それまでは、農業、水産業、林業といっても、そこに住む住民の所得につながるような産業はなくて、福島県内でも下から数えた方が早かったといえます。それが、原発を誘致することによって町が豊かになる。富岡町の町民歌に「あたらしい 科学の技術に ふるさとの未来をひらく」という言葉があります。もちろん反対した人もいます。賛成・反対がある中で、現実には2か所原発が誘致されました。その後の所得はトップから5番目に入るほどに伸びていきました。若者も町を去らなくなりました。そして原発は安全なものだということが徹底して教え込まれました。みんなあの日まで原子力発電所ほど安全な場所はないと思っていました。ところが、こんなことになってしまったんですね。そこで、賛成をした70代や80代のおじいちゃんたちが泣きながら「私は子どもや孫に何と言って詫言たらいいのか分からない」と、そう言います。誰が悪いとか、賛成した人たちの責任だとか、そういう問題ではありません。しかし、現実には子どもや孫に自分の選択を詫言なければならぬと感じる高齢者がいます。こういうことを繰り返さないことは本当に絶対に考えなければならぬことだと思います。

この原子力発電所2つに囲まれている富岡町。このとき町民は地震が来て、津波が来て、電気も、水道も、携帯もダメで、情報がない中で一晩を過ごしました。心細いので、避難所にみんなで集まって過ごすんですけども、翌日、さあ、家に帰ろう、親戚の家に行ってみようと思っていた矢先に、町の防災無線が鳴り響きます。「富岡町民のみなさんは全町、町の外に出てください。」これは内閣総理府から出された避難指示命令です。これが無線で町の中に流されて、町民が避難していく写真がこれです。1万5,827人、6,300世帯の富岡町民がほとんど車に乗って逃げていきます。写真の奥が富岡の中心部で、これから川内村という内陸にある村に向かっているところです。富岡から10キロぐらいの、人口2,600人ぐらいの小さな村です。普通だと30分ぐらいで着くところですが、このときは最長で9時間かかったそうです。この車の一台一台に町民が乗っています。この写真が撮られた瞬間には、このあと自分の住み慣れた家に帰れなくなるなんて誰も考えていないですね。住み慣れた家や丹精込めた田畑やペットや家畜のすべてがこの瞬間から失われます。生活が根底か



ら覆されていくんです。この写真に乗っている方たち、誰一人、町に帰れている人はいなんです。これが原発事故の怖ろしさです。

いちばん先頭の方を見てください。「これは俺だ」という町民が5〜6人はいます。「俺じゃない」理由がないんです。寒いからジャンパーを着てマスクをして、みんな同じ恰好をしているんです。でも、交通整理の警官の服装は違います。この人たちには情報が来ています。町民には情報は来ていません。避難しろということだけです。福島県民すべてがああとき何の情報も与えてはもらえませんでした。原子力発電所が爆発したことは分かって、それがどんな爆発で、どれぐらいの放射能が出て、どれぐらい危険なのか、どうしなければいけないのか、ということが一切何も分からないままに、避難をしていったのがこの状況です。



もうひとつ、原発事故の怖ろしさは物流がストップするということです。いまの日本の物流では3日も我慢すれば何かが届く。だから、備蓄は2日分といわれています。ところが、この日、川内村に向かった町民は、川内村で4日間お世話になりますが、3月16日の最後の日に4人家族に渡された食べ物はおにぎりが2個だといわれています。つまり、何にもなくなってしまうのです。福島県みんなそうだったと思います。人もいなくなる。物もなくなる。「ああ、こうやって私たちは置き去りにされてしまうんだ」という感がみんなあったと思います。そんな状態が一週間ぐらい続きました。これが原発事故の怖ろしさではないでしょうか。

第一原発はその後も爆発を続け、その結果、3月16日、川内村も危険ということで、川内村と富岡町は同時に、中通にある郡山市の県の建物、「ビッグパレットふくしま」という大きなイベントハウスに避難してきました。町長、村長以下、町の行政、村の行政、その中心が移ってくるのです。最大ピーク5,000人の町民村民がビッグパレットになだれ込みます。もちろん、ビッグパレット以外にも避難します。この時点でバラバラの避難が始まっていきます。だいたい、川内村そのものが富岡の全町民を受け入れることのできる状況ではありませんから、川内に入れなかった人はどんどん次の町次の村次の市というふうになって、49号線は新潟まで車で埋まりました。この時点で、富岡町民は北海道から沖縄まで、全都道府県に避難をしています。ただ、一番多かったのが、ビッグパレットふくしまで、県内最大の避難所が生まれるわけです。このビッグパレットのお話を少しさせていただきます。

ビッグパレットふくしまは人・人・人であふれました。この時点でプライバシーなんてものはなくなっていきます。この避難所での5か月間、ものすごい混乱が起きました。場所がないのは当たり前なのですが、そして、物流もこのころには回復している…、物流というよりも全国からの支援がどーっと入ってきました。ごはん時になると全国からの支援物資が配られます。自衛隊によってお風呂が提供されました。10日間ぐらいぶりにお風呂に入り、支援物資の着替えを配られ、ようやく心地が付けたんですが、すぐに帰れると思っていたわが家にどうも帰れないらしいということが分かってくるわけです。富岡町は町のすべてが立ち入り禁止になって、バリケードが張り巡らされました。家畜やペットはどうなるのか。重要なものはほとんど置いてきているから、それはどうなるんだ。もう全員がパニックです。こういう状況の中で、人であふれている中で、病気でも出たらひとたまりもないわけです。「これ死人が出るぞ。せっかく助かった命、こんなところで失ってられないじゃないか」ということで、実はビッグパレットの中に「おだがいさセンター」という、被災して避難している人たち自身による、避難している人のための救済センター、支援センターが避難所の中にできあがるんです。県の災害復興チームが音頭を取ってくれました。富岡の社協、川内の社協の職員、さらにはそこに避難者がボランティアで加わり、災害支援を始めるんです。「死人を出さない」を合言葉に人間復興に努めるんです。そんなオーバーなものではないのですが、やったことはたくさんあります。ここでは2つ紹介します。



ひとつは「女性専用スペース」を作りました。女性の権利が守られること、これが世の中の秩序を穏やかにするという目の前で学びました。男性はストレスを解消することが下手です。家に帰れなくなるかもしれない。将来はどうなるんだろう。仕事はどうなるんだ。イライラいらしたお父さんがお母さんに当たります。お酒に手が出ます。そういうとき女性はどうしたらいいかわからない。女の人たちが集まって自分の状況を話します。慰めあい励ましあって女の人たちが少しずつ「美味しいコーヒーを飲めるようにしようか」「散歩しようか」「花を植えようか、草をむしろうか」と動き始める中で、ちょっとずつ、ちょっとずつ…。こうやって自治活動

が生まれてくるのですね。

そして、もうひとつは情報を発信しよう。ごちゃごちゃしていて誰がどこにいるか分からない、何がどこにあるか分からない。「じゃあ、館内放送をラジオ放送のように流そう」ということになって小さな小さなFM局が誕生します。

そして、8月30日、避難所が閉鎖して避難者の状況が分かります。ひとつは仮設住宅に15,000人の町民の約13%が入りました。入りきれない人たちはアパートを借りたり一軒家を借りたりして借り上げ住宅というふうにして、それぞれの住居を定めました。さらには、県外に避難している人たちが約30%、それぞれの都道府県でお世話になっています。いずれにしてもバラバラです。貧しい時代もあったけれど、これまで営々と先祖伝来築いてきた富岡町というコミュニティは完全崩壊しています。ここから、ゼロから始めるコミュニティの再生が私たちには課せられてきたわけです。

そのひとつとして、ビッグパレットふくしまの中で生まれたFM局が臨時災害FMとして郡山のスタジオから全国の富岡町民にラジオの電波を使って流れています。小さな細い絆かもしれませんが結ばれています。臨時災害FMというのは小さな電力ですので、電波がそんなに遠くまで飛びません。しかも、富岡町ではなくて郡山のスタジオからです。異例中の異例で、全国でただ一つ、総務省が渋りながら許可をしてくれています。遠慮しながら電波を流しているのですが、タブレット端末機が富岡町民全世帯に配られていますので、端末の「おだがいさまFM」というボタンを押しますと、郡山で流れる小さな電波のFMが全国で聴けることになっています。生放送でも録音でも聴けます。ですから、私たちは全国に散らばっている富岡町民に、超ローカルなニュースを流すことができるのです。この放送が聴いてくれている人たちの心の支えになっていると私たちは信じています。こんなことをしながら、もうかれこれ5年以上が経っているのですが、富岡町は現在こんなふうになっています。あの3月12日に避難した時からバリケードで閉鎖されていたのですが、2013年の3月25日から3区域に再編されています。その中の夜ノ森を中心とする夜ノ森地区、ここが一部「帰宅困難区域」として今でもバリケードの中にあります。その他の地域は午前9時から午後3時まで帰っていいことになっています。少しずつお家へ帰って片づけを始める方々が増えています。これが富岡の現状です。あとで資料を見ておいてください。



富岡の町はいま誰も住んでいないので、雑草が生えて、屋根にはぺんぺん草があって、家の中はネズミに食い荒らされています。ここでもひとつ課題があります。いま富岡は来年の4月に帰還するということを町長が宣言されましたので、除染が始まり、倒壊家屋の解体が始まっています。4年ぐらいそのまま手付かずだったので、かなり町の様子が変わりました。きれいに更地になっているところがあります。片づけて、いろいろなものを捨ててもらって、でも、こんなネズミに食い荒らされた家にすぐに入れるのでしょうか。1年目は田んぼがセイタカアワダチソウに囲まれてしまいました。2年目はセイタカアワダチソウが消えて柳が生えました。いまは田んぼの表土がはがされ、山砂が敷かれて、きれいに茶色の平地になっています。山砂を敷かれた農地が農作物を实らせるまでには非常な時間がかかると農家の方たちが言っています。町が除染され解体されていく中で今後どのように町を再生していくかということが大きな大きな課題です。

この写真は富岡町にただ一つあった富岡高校の写真です。私は2004年から2008年までこの学校の校長をしておりました。J ヴィレッジができたことがきっかけでそれまでの普通科を再編して国際・スポーツ科を新設し、



サッカーのピッチやゴルフの練習施設等、福島県教委が力を入れて施設・設備を整えて、周囲からもうらやましがられた高校です。しかし、原発事故によって警戒区域に入ったため、こんな立派な校舎ですが、誰もいません。4年半放置されてボロボロになった硬式野球のボールが転がっています。あたりまえの高校生の生活が突然断ち切られて、あの日のまま残っているわけです。校舎のあちこちに、普通の、あたりまえの高校生の日常がそのまま残っています。在校生たちは県内外のサテライト校に分かれて勉強してきましたが、来年の4月から富岡高校は休校となることが決まっています。この校舎での再開が叶うまでの措置ということですが、それがいつになるかはもちろん分かりません。

私たちが一番望んでいることは福島を知っていただくことです。福島は復興していません。復旧はしているかもしれませんが、復興にはまだまだ遠い道のりがあります。それでも私たちは福島に生きています。富岡町とともに生きようとしています。来年の4月に町が帰り始めたとき、どんなふうに富岡が変わっていくのか、それをずっとたくさんの方々が見てくださっていることが私たちにとっては最高の支援です。

そして、私たちが苦しめられている災害は自然災害ではありません。人災です。人災は人の知恵によって防ぐことができます。ですから、このようなことが二度と日本のどこでも起こらないようにみなさんにこのような話を聞いていただいています。どうぞそれを誰かにお伝えください。それが私たちにとっていちばん嬉しいことです。ありがとうございました。

千田副校長先生謝辞

僭越ながら仙台育英学園を代表しまして、青木淑子先生に心からの御礼を申し上げたいと存じます。

本日は私どものために、遠路この会場までお出でいただいて貴重なご講話を賜り、大変ありがとうございました。胸が締め付けられるような、しかし同じ東北人として、まだまだ共に頑張っていかなければという思いを新たにする機会となりました。

東日本大震災で、特に福島・宮城・岩手の三県は、地震・津波でそれぞれに未曾有の人的・物的損失を被ったわけですが、福島県はそれに加えて原発事故という、いつ終息するとも知れない気の遠くなるような被害を背負いました。

こんな言い方が妥当かどうか分かりませんが、地震・津波の物理的被害は目で分かります。

津波が押し寄せた場所とそうでない所の差は歴然としており、気仙沼や女川の知り合いなどからも、我が家はぎりぎり津波を逃れたが、隣の家は壊滅的だったなどという話を良く聞きます。しかし、原発被害となりますと、目に見えないし、ボーダーもはっきりしません。

本日のお話を伺う予備学習にと思って、パソコンのグーグルアースで富岡町を見てきたのですが、上空からの映像では、一見すると緑豊かな田園風景や先生が校長を勤めておられた立派な施設の富岡高校などが先ず目に入り、のどかな地方都市の風景が広がっているように見えるのですが、注視すると人の居住している気配は無く、また汚染物質を収納した黒い袋が一面に敷き詰められた異様な光景が広がっている地区もあります。

それが、放射線という目に見えないものの脅威や風評被害にさらされ、町ごと長い歳月の避難生活を強いられている地域の姿であり、先生のお話しでその実態があまりにも理不尽で過酷なものであることを改めて思い知らされました。

そして我々も、これは福島・宮城といった行政単位のくくりで捉えるようなものではなく、県境のボーダーを超えて、地域の繋がりに思いを致さねばならない事だと思っています。

そもそも、仙台育英学園には昔も今も、福島県の沿岸部、特に相馬・双葉地区から沢山の生徒が入学し通学してきています。

学校のシャトルバスで遠距離通学をする者もいれば、震災後は生徒本人だけ親元離れて寮に入ったり、家族の一部が仙台に住んだりといったケースも増えているようですが、いずれもまだまだ厳しい条件のもとですが、頑張って高校生活を送っています。

そして、3年生の進路模擬面接をすれば、大半の生徒が被災体験を自分の進学動機に結び付けており、つらい体験をバネに自分の将来と社会との関わりを深く考えて、「志」へと高めている生徒が実に多いと実感します。

工学部で土木・建築を勉強し復興の力になりたい、公務員となって郷土に貢献したいとか、医者になって地域医療に従事したいなど、そうした様々な彼らの夢を実現させること、そしてまだまだ長い歳月がかかって未来に引き継がれていくであろう地域再生の担い手を育成していくこと、それが我々教員の為すべき東北復興支援であることを、本日の青木先生のお話を伺いながら改めて再確認した次第です。

青木先生におかれましては、どうぞこれからもお元気で、この大事な「語り部」のお役目を続けていただき、そして地域の重要なキーマンとして富岡町のコミュニティ再生と創成にご活躍されますようお願い申し上げます。御礼の言葉とさせていただきます。

Ⅲ その他

(1) 広域通信制課程 ILC青森校の状況報告

ILC青森 所長 三笠 勝彦

1. はじめに

「学校に来づらい子でも安心して通って来ることができて、その生徒なりの努力によって高校卒業の資格を得られる学校」。このような学校づくりをめざして平成14年4月にILC青森が開校されました。そして今では、卒業生が550名を超え、また在校生も200名弱までになり、仙台育英学園高等学校広域通信制課程ILC青森校としての位置づけができてきました。さらに、仙台育英学園創立110周年記念事業の一環として、今年度、ILC青森の新校舎を八戸市の湊高台地区に建築し、新たな一歩を踏み出しました。

2. ILC 青森校の地域の概要

ILC 青森校は、八戸駅から東に約10kmのところに位置し、国道45号と八戸環状線県道29号が通っており、商業施設が多数立地している。また、地区内には、保育園・幼稚園・小・中・高等学校があり、学園都市ともいわれ教育関係施設が整備されている。さらに、近隣には八戸市東運動公園があり、陸上競技場、自転車競技場、体育館、テニスコートを備えた体育施設が整備されており、バスの便が良く、落ち着いた環境にある。



学校法人 仙台育英学園 仙台育英学園高等学校 広域通信制課程 ILC青森校舎

ILC 青森校舎 お問い合わせ TEL (0178)80-7280
青森県八戸市湊高台 3丁目-2-2

ILC 青森スクーリング会場 お問い合わせ MOBILE (080)2823-6895
青森県八戸市美保野 13-384 八戸学院短期大学内

3. 地鎮祭並びに竣工式

平成28年1月8日に仙台育英学園・ILC青森校の教職員・工事関係者が参列して建設場所地で地鎮祭が行われた。式では、加藤雄彦理事長・校長先生の玉串奉奠に続いて関係者や生徒代表の山口緋乃さんが神前に拝礼し、本格的に工事が始まった。

およそ3ヶ月という短い期間ではありましたが、平成28年4月23日には、加藤雄彦理事長・校長先生はじめ仙台育英学園並びにILC青森校教職員・工事関係者・生徒代表村井里沙さんが参列して竣工式が厳かに行われ、学校としてスタート致しました。



地鎮祭



地鎮祭集合写真



校舎竣工式



理事長玉串奉奠



理事長挨拶



校舎外観



シンボルマーク

4. 校舎の概要

校地は770㎡・校舎344㎡で地上2階建てで、校舎の正面には、シンボルマークと 建学の精神を、さらに生徒のがんばりを賞賛する横断幕が設置できるように工夫されている。

1階

- 生徒・来客用玄関から入ると、約58㎡のホールがあり開放感を感じる。
- 職員室・事務室が一体で広さが約36㎡あり、床暖房や冷暖房が完備されている。
- ユニバーサルトイレも設置されている。
- 食堂は36㎡あり、システムキッチン、冷蔵庫や電子レンジ、IHヒーターが備えられており、各種行事や家庭科の実習等、また生徒同士で楽しく食事ができる。
- 各教室に掲示板を設置し、生徒への連絡や情報が行き届くように工夫されている。
- カウンセリング室を設置し、落ち着いた雰囲気、随時生徒の相談に応じられるように、また保健室も設置され、生徒の身体状況に対応できるようになっている。

2階

- 踊り場には、安藤清一先生が描かれた「クスコ」の額が飾られ、アカデミックな雰囲気が感じられる。
- 講義室は約61㎡あり、通常の授業や入学式・卒業式など儀式等でも活用している。
- IT室は約52㎡あり、天吊り型のプロジェクターやスクリーンさらにノートパソコンが12台も設置され、ネットスクリーニングでの授業映像を視聴し、より幅広く学習環境が保たれ、個別学習への効率的な対応が図れる。



玄関ホール



職員室



講義室



IT 室



キッチン

以上のことから、学ぶ場として素晴らしい校舎を建設して頂いたことに對しまして、ILC 青森教職員一同は、これまで以上に生徒一人一人への指導に誠心誠意努めますと共に、加藤雄彦理事長・校長先生はじめ関係者の皆様方に心より感謝申し上げます。

5. 今年度の学習活動・主な学校行事

①前期入学式 4月23日

ご来賓として開設時から ILC 青森の代表を務めた安藤清一先生、八戸学院光星高校橋場保人校長、ILC 沖縄の吉味典子氏を迎え、加藤雄彦理事長・校長先生の入学許可・式辞など厳肅の中で式が進行し、新入生男子8名、女子19名合計27名が入学し、在籍総数190名で28年度がスタートした。



入学式宣誓



新入生



入学式集合写真

[生徒の感想文から]

4月仙台育英学園高等学校広域通信制課程ILC青森校の入学式では、緊張して少し混乱することもありましたが、無事に終えて仙台育英学園の生徒として新しく仲間入りできたこと嬉しく思いました。私は、人と話すことや近づくことが苦手で、また、年齢も離れている人が多く不安でしたが、個室で学習できることで不安が解消されました。学校生活に慣れ、レポート作成の方法もわかり、中学時代より過ごしやすく、勉強も前よりわかるようになりました。また、先生方が親身になって教えて下さり、すごく嬉しいです。これから3年間この学舎で頑張ります。(S・S)

3月中旬、不安と緊張で迎えた入学試験の日。私は以前通っていた高校を中退しているのですが、無事に試験を終え、会場の入り口に貼り出された合格者一覧の中に、自分の受験番号を見つけた時、嬉しさと同時に懐かしさも憶えて、また改めて学生生活を送れることにとてもわくわくしました。

初めて足を踏み入れた新築の校舎のにおいはとても清清して、教室に静かに響く教科書をめくる音や問題を解くペンシルの音が耳に心地よく、集中して授業に取り組むことができます。

また、わからない部分については、先生方が丁寧にご指導下さったおかげで、自分のペースで順調にレポートを仕上げることができます。今後は、勉強だけでなく様々な学校行事などへの参加を通して、多くのことを学び、仲間作りに励みながら高卒認定資格の取得のために努力していきたいと思います。(N・Z)

②八戸学院短期大学でスクーリングが始まる。 4月24日

これまで学校法人光星学院のご高配によって八戸学院大学の施設を借用して日曜日スクーリングを実施してきましたが、大学の事情により八戸学院短期大学でスクーリングを実施することとなり、慣れない場所で教職員・生徒らが戸惑いながらも無事に初日のスクーリングが終了した。



短大で



授業の様子①



授業の様子②

③湊高台校舎での授業が始まる。 4月27日

午前・午後と教科を指定した平日のスクーリング、そして環境が変わったことで生徒はどの程度登校するか職員は不安であったが、初日は16名の生徒が登校し少し安堵した。新しい校舎で学ぶ生徒は、気持ちも新たに授業に取り組み、学校生活を楽しんでいる。



青森校での授業①



青森校での授業②

④ボウリング教室Ⅰ 5月21日

体育の授業の一環としてまた生徒同士の交流を図るという目的で、年2回開催している。

今回は、生徒20名と先生方5名が参加し、ゆりの木ボウルのインストラクターからボウリングの歴史やルールそして投げ方などの講義を受けた後、1ゲーム目は個別指導を受けながら練習し、2ゲーム目は大会に移り、その指導を生かして思い思いに投球していた。ストライクを見事にだしガッツポーズしながらみんなとハイタッチする姿や残念がる姿など、とても楽しい雰囲気で行われた。その後表彰式が行われ盛会の中で終了した。



ボウリング大会①



ボウリング大会②



集合写真

〔生徒の感想文から〕

私は昨年春に入学し、これまで2度参加しました。2度とも、初めのうちは緊張していましたが、すぐに回りのみんなと打ち解けることができました。初めにインストラクターから講義を受け、ボウリングの歴史やルールそして投げ方を学び、実践に移りました。生徒も先生方もみんな一生懸命で、とても雰囲気が良く、学校にいる時とはまた違う一面も見れたかなと思いました。優勝すると賞状や景品が頂けるので、それもまた楽しみの一つ

です。また、竹ノ子先生はとても上手でまだ勝てていないので、最後の11月には勝てるように頑張りたいと思います。皆さんも参加して一緒に楽しい思い出を作りましょう。(R・A)

⑤社会人養成講座Ⅰ 6月4日

八戸ポータルミュージアム「はっち」で開催された。本学園生徒・保護者・市民ら120名が、ロンドンオリンピック女子レスリング48キロ級金メダリスト小原日登美氏を講師に迎え、「最初で最後のオリンピックを目指して」の講演に耳を傾けた。小原氏は八戸市白銀地区の出身で、これまで多くの挫折を乗り越え見事に自分の夢であるオリンピックの栄冠に輝いた体験を語り、生徒たちに夢を諦めない大切さを伝えた。



小原氏の講話



金メダルを下げて



メダルを手に

〔生徒の感想文から〕

「小原日登美さんの講演」を聴いて Ⅰ

来年3月に卒業予定で、盛岡の専門学校に進学を考えている中、今回初めて小原日登美さんの講演を聴いて、大変勉強になりました。

オリンピックの映像を見ましたが、息が詰まる試合は、まるで会場にいるかのようでした。

決勝戦で勝利した時の小原さんの喜びようを見て、とても感動しました。自分の階級がオリンピック種目にならず、くじけそうになっても、コツコツ努力を積み重ねて金メダルを掴むことができたので、頑張れば報われると思いました。

くじけそうになった小原さんを支えた家族もすばらしいと思いました。コーチや先生、家族の支えで金メダルを取ることが出来たのだと思います。また、金メダルに実際に触れることが出来、手に取った時とてもどっしりと重く、あの重さに小原さんの努力が詰まっているのだと思いました。

オリンピックの金メダルに触れることは、滅多にないので、このような機会があって良かったです。私も、何か一つ打ち込めることが出来るものを見つけて、コツコツ努力をし、人の役に立てる人になりたいです。貴重なお話をありがとうございました。(H・H)

「小原日登美さんの講演」から学ぶ Ⅱ

毎月学校からの通信で、「そういえば金メダリストが、はっちに来るのか…見に行ってみようかな。」と思い、ふらっと行ってみた講演会。本物の金メダルそして金メダリストが見れてラッキー！最初はそんな感じでした。

講演を聴いていてとてもびっくりしたことがあります。それは、「手術後の復帰戦で、吉田沙保里選手に完敗して、ショックで実家に戻り、何ヶ月も引きこもった。」ということです。まさか金メダリストにも、そのようなことがあったなんて、とてもびっくりしました。その後、実家や周りの人に支えられて、悲願の金メダルを獲得することが出来たことを聴いて共感できる部分がありました。

私は、高校2年生の時に、あまり学校へ登校していない時期がありました。学校へ行っても午後から授業に出たり、クラスに行かなかったりしていたからです。でも今は、周りの友達や育英の先生方に支えられて、自分の将来の夢に向かって頑張っています。そんな今の自分に、小原さんの講演はとても励みになりました。過酷な試練を乗り越えてきた小原さんの「諦めなければ夢はかなう」は、とても説得力がありました。私は来年3月卒業予定です。これから、いろいろな試練があると思いますが、諦めないで乗り越えていきたいと思っています。

とてもためになるそして多くの感動を得た、講演をありがとうございました。頑張ります。(K・S)

⑥ ILC 青森ウォーク 7月2日

平成25年5月、「三陸復興国立公園」の指定を受けた種差海岸は、鳥瞰図絵師・吉田初三郎や日本画家東山魁夷など、多くの文化人を引きつけた名勝地です。白砂青松、奇岩・怪石の織りなす海岸、何百種にもおよぶ山野草の宝庫を散策する、恒例の「ILC 青森ウォーク」が初夏の訪れを感じさせる清々しい天候の中、生徒30名教職員6名が参加して風光明媚な海岸線を楽しみ歩きました。



種差ウォーク①



種差ウォーク②



集合写真

[生徒の感想文から]

今回初めて参加しました。三陸復興種差海岸の遊歩道を歩きながら、加藤先生から周りに咲いている植物についてお話ししていただき、種差海岸についてより興味が湧きました。曇り空で澄んだ景色は望めませんでしたが、会話をしながら自然の中を歩くにはちょうど良い気温でした。私は、八戸に住んでいますが、遊歩道を歩くのは初めてでした。今回参加して、八戸の新たな魅力に気づくことができ嬉しく思います。初夏の訪れを感じさせる種差海岸を育英の仲間と楽しく歩き、すばらしい一日になりました。今度は、きれいに晴れた日に友だちを誘って歩いてみたいと思いました。(K・S)

⑦ 青森前期卒業式 9月25日

男子4名、女子15名計19名の生徒が卒業を迎えた。湊高台校舎の講義室で行われた卒業式には、卒業生、保

護者が多数参加し、加藤雄彦理事長・校長先生から一人一人に卒業証書が授与された。式に臨んだ卒業生たちからは、本学園で学んだ日々を振り返ると同時に、これまで支えて下さったご両親・家族・先生方に感謝の気持ちを伝える姿が見られた。また、国語表現で学習したことを生かした答辞では、涙ながらに読む姿に卒業生や参列した方々が多くの感動を得た卒業式でした。



卒業式



卒業生



集合写真

〔生徒の感想文から〕 高校生活を振り返って

私は、水産高校に通っていましたが、学校に馴染めず休むようになってから、ここの通信制の学校を知りました。面接時には人と仲良くやっていけるか不安でしたが、教頭先生が優しく迎えてくれ、生徒たちが楽しそうに活動していたのが最初の印象でした。

その後、学校に通うようになり、先生方が優しくそして詳しく指導していただくことで、不安が解消され、学習に取り組むことができました。また、学校行事にも参加し、友だちとの交流も図れました。

私は、平日にアルバイトをしながら学校に通っていたのですが、忙しくてレポートに手がつけられない時がありましたが、スクーリングで先生の分かりやすい説明に助けられ無事に終わらせることができました。

本当にこの学校に入学できて良かったです。水産高校を辞めてそのままだったら、今の自分とは正反対自分だったと思います。卒業後は、アレック専門学校で医療事務資格を取得するという夢ができました。

この学校に通って思ったことは、「高校を辞めても、本人次第で変わるんだ」と思いました。諦めないで自分の夢に向かって頑張ろうと思います。仙台育英学園高等学校ILC青森に出会えて本当に良かったです。ありがとうございました。(S・T)

⑧青森後期入学式 9月25日

同日、午後2時から後期入学式が新生22名（男子5名・女子17名）を迎えて、講義室で行われた。これからの学校生活に期待しながら、それぞれの目標に向け頑張る姿が感じられた。



入学式校長挨拶



新入生



職員紹介

[生徒の感想文から]

私がILC青森に入学して思ったことは、校舎の設備が整い、先生方と生徒の関係がとても良いということです。以前通っていた学校は、施設・設備が古く、また、先生方が生徒に接する姿には裏表があり学ぶ環境としてはあまりいいとはいえませんでした。そういうことから、ILC青森に転校しました。転校して感じたことは、先生方が優しく、質問したことには何でも教えてくれます。また、前の学校では当たり前だったことを、たくさん褒めて認めてくれました。私はそのことが一番嬉しかったです。今は、まだはっきりとした夢は持っていませんが、これからILC青森で学びながら、自分の夢を発見できるように頑張っていきたいと思います。(N・K)

⑨進路の学習会 10月7日

三八地区の高等学校における特別支援教育や不登校に関する取り組みや現状について情報提供をし、現況や課題点を共有することを目的として、八戸第一養護学校を会場に「進路の学習会」が今年度開催された。対象者は県南地域の小・中・高等学校の教員、特別支援学校の教員で、参加校は6校で、各校ごとにブースを設定し、参加者が聞きたいところを巡回し高等学校段階における学校の概要を知る機会となった。本校からは戸崎教頭が出



学校紹介①



学校紹介②

席し、ILC青森校の概要を詳しく紹介した。我がブースには、45名の先生方が集まり、不登校生への対応や個別指導等について興味深く説明を聞いていた。

6. 終わりに

原稿の締め切りの関係で4月から7ヶ月余りの学校の取り組みを紹介いたしました。

今後の主な学校行事は

⑩ 11月26日 ボウリング教室Ⅱ

⑪ 2月1日 社会人養成講座Ⅱ「社会人としての心構え・テーブルマナー」

⑫ 2月14～16日 山形蔵王研修

⑬ 3月5日 ILC青森第15回後期卒業式が予定されている。

加藤雄彦理事長・校長先生はじめ仙台育英学園の先生方のおかげで校舎が新築され、素晴らしい学習環境の中で、在校生179名の生徒たちが教職員と共に「高校卒業を目指し、思い出づくりに励む」をスローガンに掲げ、学習や学校行事に取り組めることに心から感謝申し上げます。

今後も、日々の授業や各種学校行事を通して、個々の学力向上はもちろんのこと、心身ともに成長する姿に期待しながら、生徒一人ひとりの確かな居場所としてのILC青森を目指していきたい。

最後に、今年度新たにできました、ILC青森の生徒募集のポスターを掲載して報告とさせていただきます。



ILC 青森募集ポスター

(2) 職業調査とジョブミーティング ～ 12職種の職業に関する調査とその発表活動を通して～

情報科学コース 志賀 貞昭

1. はじめに

情報科学コースの生徒たちの大半は大学または専門学校に進学し、そしていずれは就職することになります。この就職について考える機会をもってもらおう目的で企画されたのがジョブミーティングです。ジョブミーティングが始まったのは今から4年前、早いもので今年でちょうど4回目になりました。

さて、最近の一般的な傾向として、「今の高校生には、働きたいという意欲がない。」といわれます。おそらく、情報科学コースの生徒たちも、このような平均的な高校生が多いと思います。しかし、「働きたい」という意欲は、「何のために働くのか」という動機がないと生まれてきません。働く動機には、生活するため、やりたい仕事があるため（自己実現）、必要な人間と認められたいため（社会参加）など、いろいろあります。ところが、実際は誰もが希望する仕事に就けるとは限りません。しかし、希望しない仕事でも、みんな精一杯働いています。それは、働く動機があり、仕事にやりがいを感じているからです。「その仕事にどんなやりがいがあるのか。楽しいのはどんなときか。つらいところはどんなところか。」を知ることは、この動機づくりのために大切なことなのです。

2. テーマ設定の理由

～インターネットを活用した調査活動をととしてICTスキルの向上を図る～

情報科学コースでは、IT関連技術の知識・技術の向上を図る目的で情報処理関連資格のMOS取得を目指しています。このような素晴らしい教育活動を展開している普通科高校は、東北で唯一仙台育英学園高等学校だけです。このように情報を学ぶ生徒たちは、大学進学に必要な知識ばかりでなく、職業選択に直結するスキルを学ぶこともできます。

したがって、情報科学コースで学ぶITスキルが、企業においてどんな形で実践されているかを学ぶことは、生徒たちにとって大変意義深いことだと考えます。なぜなら、情報社会において、職業それぞれにどのような知識・技術が必要であるか、学ばなければならない情報リテラシー（情報の知識・技術）は何か、を感じ取れることはとても大切なことだからです。このように情報リテラシーの重要性を生徒に気付かせること、または再認識させることもジョブミーティングの目的の一つです。

3. 授業計画

月 日	配当時間	内 容
10月 4日（火）	5校時（1時間）	調査を希望する職業の決定
10月18日（火）	5校時（1時間）	1回目の職業講座について調査
10月25日（火）	5校時（1時間）	2回目の職業講座について調査
11月 1日（火）	1回目 13:45～14:15	職業講座1回目の研修
	2回目 14:30～15:00	職業講座2回目の研修
11月 8日（火）	5校時（1時間）	お礼状作成
11月15日（火）	5校時（1時間）	発表資料の作成①
11月29日（火）	5校時（1時間）	発表資料の作成②
12月 1日（木）	5・6校時（2時間）	まとめ発表

4. ジョブミーティングの概要(対象企業12職種、1職種／1グループ)

- (1) 同じ職業講座の聴講を希望する生徒同志でグループを構成する。
- (2) 各グループの代表者に聴講した職種について、調査結果を発表させる。

No.	職種	企業名	講話内容
1	情報関連会社	株式会社エクシオン	ソフトウェアの開発について
2	音響・映像関連会社	株式会社エーフィテック	映像とネットワークの融合
3	広告代理業	アドプランニング	広告の作り方―依頼者の広告目的を形にしてい
4	大型百貨店	株式会社藤崎	百貨店内の各部署の仕事内容。販売職の主な仕事と必要なスキル
5	放送制作会社	株式会社エフエム仙台サウンズ	ラジオの力
6	ホテル接客業	ホテルキャスルプラザ多賀城	人と人をつなぐ仕事
7	生命保険会社	ジブラルタ生命保険株式会社	お役に立った生命保険―震災の時
8	旅行業	東武トップツアーズ株式会社	旅行業とは―仕事内容と必要な資格と能力
9	動物看護師	東北愛犬専門学校	トリマーと動物看護師の現状と今後
10	事務用品販売	コクヨ東北販売株式会社	文具・家具業界の最新状況―この文具知っている
11	建築施工業	株式会社大林組	建築業の仕事内容と「ものづくり」とは
12	自動車販売	カメイオート株式会社	働く営業マン

5. ジョブミーティングの成果

発表については、各グループを代表する12人の生徒が実施しましたが、慣れないパワーポイントでの発表に最初は生徒たちも緊張を隠せない様子でした。しかし、始まってみれば予想外に立派な発表をしていた生徒たちの姿は、とても頼もしく印象的でした。発表者の12人にとっても、この経験は普段の授業だけでは得られない貴重な体験だったことでしょう。

今回の調査・発表活動は入学以来、初めての取り組みだったため、発表する上での重要なポイントについても事前に指導を行いました。また、事前調査、企業講話、ジョブミーティング、グループ発表後に、それぞれの発表内容をネットワークの共有フォルダに保存して、全体で情報共有できるように配慮しました。調査で浮かび上がったそれぞれの職業のよい点と悪い点を共有することは、生徒たちの今後の学習に大いに役立つと同時に、将来の職業選択にも活かせると思います。

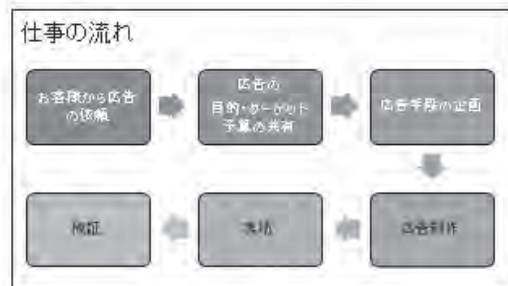
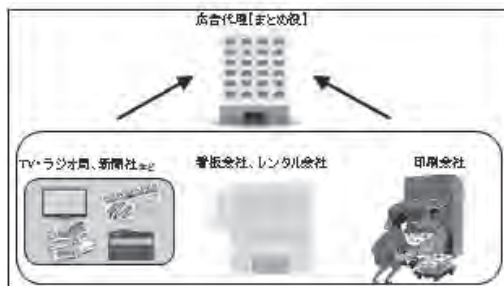
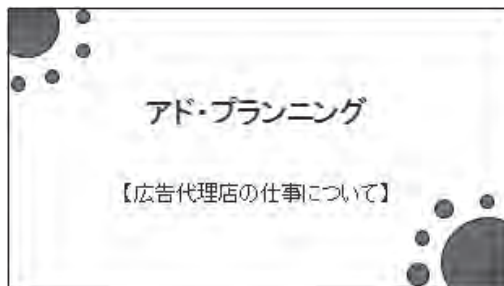
〈1〉ジョブミーティング聴講風景



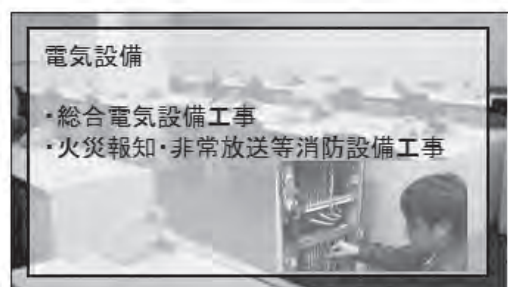
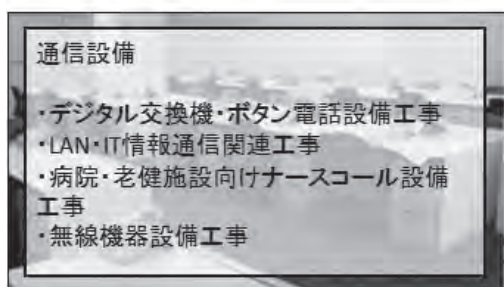


〈2〉生徒の発表内容の一例

●職種：企業名：アド・プランニング



●職種：企業名：(株) エーブイテック



〈3〉生徒の発表風景の一例



〈4〉ジョブミーティングの発表について（生徒の感想の一例）

- ・ 実際にジブラルタル生命株式会社の発表をしてみて、正直すごく緊張したのですが、自分が発表したいことを確実に発表できたのでよかったです。しかし、一つ一つの内容があまり濃くなかったので、次回またこのような機会があったら、一つ一つをもっと丁寧に作成したいと思います。
- ・ みんなとても見やすく、わかりやすい説明をしていてすごいと思った。自分は文字が小さく話すスピードが速く、声がとても震えていたので今回の反省を活かして、また次の機会にチャレンジしてみたい。
- ・ 短い時間で、これだけのものを作るのはすごいと思いました。私は全然終わらなかったで、このレベルに仕上げるには大変だったのではないかと思います。私も発表した人たちのように素早く丁寧にできるようにしたいです。発表内容も、それぞれの会社のことがよく分かって、将来の参考になりました。自分でも調べて将来の仕事選びに役立てたいです。
- ・ パワーポイントを皆うまく使えてすごかったです。私と比べるとアニメーションの機能がたくさん使われていて見やすいなと思いました。最後に、野坂先生が教えて下さった「重要ところを大きく工夫して書く」をすれば飽きなくてわかりやすいなと思いました。このような授業をたくさんして色々なことが身につくように頑張りたいです。
- ・ 代表者のパワーポイントの技術がとても高く見やすかったです。僕は、エービテックとコクヨ東北販売株式会社に興味がありましたが、代表者の発表を聞いて、他の企業にも興味を持ちました。僕は、パワーポイントが得意ではないので、これから少しでも上達できたら良いと思います。
- ・ 今回、ジョブミーティングの発表を聞いてこれからの進路に参考になった話もたくさんありました。12人の発表を見て取り入れたいと思ったことはPowerPointでアニメーションを上手に使いながら話すことを自分では取り入れたいと思いました。話の内容については、将来の進路についてよく考えて達成できるように頑張りたいと思います。

6. おわりに

今回の12職種の調査とジョブミーティングでは、発表活動を通して生徒たちが楽しんで主体的に発表できていました。生徒たちは、それぞれのテーマについて調べ、それをどのように発表するかをそれぞれ決定し、パワーポイント原稿を作成しました。生徒たちにとって、それは想像以上にエネルギーを要する活動であったと思います。そして、誰よりも良い発表にすべく、決して途中で妥協せず最後まで発表の練習をしていたのが印象的でした。このように限られた時間の中でお互いにアイデアを出し合い、それらを共有し、お互いの良さを認めあう活動は、職業理解だけにとどまらず、将来、仕事をしていく上でも必ず役に立つ活動であったと確信します。

発表を通して、情報リテラシーの重要性を再認識できたことは情報社会に生まれ、情報社会で生きていかなければならない生徒にとって大きな収穫でした。また、自分が発表しただけでなく、他の生徒が実施した発表をみることはとても良い勉強になりました。そして何よりジョブミーティングを通して、情報活用について直に企業の方から聴くことができたことは心から幸せなことであったと思います。

7. 謝辞

未来を見据え、素晴らしい教育活動を実践している仙台育英学園高等学校、加藤雄彦理事長・校長先生を始め、ジョブミーティングの実現に尽力してくださった佐藤教頭先生及び情報科学コースの先生方、また、今回の企画のために講師派遣の協力を快諾してくださった協力企業の皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。

(3) 平成28年度フレックス・技能開発コース1学年における 公文式教材（国語）の学習について

フレックス・技能開発コース 島倉 尚子

今年度フレックスコース・技能開発コースの1学年で、公文式教材を使用して週1回学習を行った。

若年層の「国語の乱れ」が指摘されるようになって久しいが、現実是非常に根深い。語彙力・読解力・表現力とも著しく低下している為、進学の際の小論文や自己推薦文、就職する際の面接など、あらゆる場面で弊害が続出している。自分が書いたり話したりしている内容のどこがおかしいのか理解できない生徒も増えてきた。また、判別できないほど雑な字を書く生徒も相当数いて、受験の願書や履歴書を提出した時点で不利になる可能性が懸念される生徒が男女とも見られた。

そうしたごく基本的な部分を振り返るといって、自分の書いた文字を全く知らない他者はどのように見るかということ、また生徒自身がどこでつまづいているのかをそれぞれ自覚するために、今年度公文式の教材を半期に限って導入し学習を行った。半期と短い期間ではあったが生徒自身からの反応も様々であり、今後の学習計画に反映できる内容が得られたと考えている。

以下はそれぞれのコースの「学習の振り返り」として英進進学コースの公文担当の先生方・公文教育研究会の本校担当者との会議で使用した報告を、一部改訂してまとめたものである。

【 実施クラス 】 フレックスコース・技能開発コース1学年全クラス

【 達成進度等 】

・9月までの間に100枚を目標に学習する

・1コマ50分の授業の中で、30分～35分程度を公文教材の学習時間に充てる

・技能開発コース全クラスと1F1～1F3は1コマ中最低5枚、1F4～1F6は1コマ中最低6枚程度を目標として学習するよう指示（運動部所属生徒が多いクラスは、大会等で欠席が増えることが予想されるため、枚数を多めに設定した）

※4月～夏休み前までの進度※

【 授業状況 】

技能開発コース1学年全クラスと、フレックスコースの1F1～1F5までのクラスには、個々人のレベルに合わせた教材を実際にスタートする前に、就職や進学において国語の力がどのくらい必要なかを説明し、やり方だけでなく学習することの意味にまで踏み込んでガイダンスを行った。

現在上記9クラスのほとんどの生徒は20枚前後を学習している。個人のレベルに合わせた教材で学習を始めたのが5月の連休明けであるにもかかわらず、相当なペースで学習をしている。コース内でよく問題になる授業中の携帯使用や、過度な私語も6月上旬の段階でほぼ皆無である。

高校入学後の現在まで、それぞれの生徒が「100点を取る」という経験が少なかった事や、5年前の震災時小学校4年から5年に進級する時期にあたるため、落ち着いて学習できない環境にあった生徒もあり、主・述語、指示語や「て・に・を・は」等基礎がごっそりと抜けている生徒が若干名見受けられた。学習したプリントがすべて100点の答案を無邪気に喜ぶ生徒も多数おり、生徒自身の手ごたえにもなったようだった。

一方クラス全員が野球部の1F6については、他のクラスに比べて相当な遅れが見られる。大会等で他のクラスとは動きが違う為、学習のペースという意味で遅れるのは否めないにしても、注意力の欠如と学習の内容が非常に雑である生徒が複数存在することが気にかかる。

他のクラスと同様に、採点すると出来もまずまずな生徒がいる一方で、基本的な注意力を欠いている為、思うように捗らない生徒が見られ、集中して学習してはいるものの、学習内容そのものではなく「時間勝負（クラスや仲間内で他の誰よりも早く課題を片付ける）・枚数勝負（仲間内で一番枚数を多くこなす）」が目的になってしまっている生徒がほとんどであることが現状である。都度注意はしているものの、過度な競争意識もあり、枚数での勝ち負けや点数での勝ち負け等目先の事柄に拘ってしまうことが多かった。こうした生徒は他のクラスにも若干名存在するが、大半は30分前後で自分がどのくらい集中して学習出来るかを確認しながら教材に取り組んでいる印象が強い。1時間当たりでこなす枚数も多くなり、個々の生徒の自信になっているように見受けられる。

【 所感等 】

現状では、大半のクラスが思った以上のペースで学習している。教材に対する喰いつきも思った以上によく、授業時間内での課題枚数を全部100点にして次の課題につなげるという事に対して食欲になってきた。当初一部の生徒のみ熱心にやるのではないかというイメージが先行していたが、非常にいい意味で予想を裏切られた感がある。今後はそのモチベーションを保って学習する事、他の授業にその集中力を活かしていくことが課題ではないだろうか。

野球部クラスはとにかく時数を確保することが難しい為、どのようなやり方が適切で確実なのかを学年や顧問・生徒等と連携して進めていこうと考えている。

ペースの速い生徒は30枚を目前にしていたり、4月下旬の学力診断テスト当初より記述力や学習への取り組みが変化して来たり、ケアレスミスが減ったりして個々に変化がみられた。丸々1時間集中して学習することは難しくても、30～35分程度の短い時間で集中することは苦しく無いようで、むしろ達成感をもって学習することが出来ているようだった。

＊夏休み明け～9月末＊

【 授業状況 】

授業については、引き続き熱心に取り組んでいた。学習開始当時の教材から、レベルを上げてほしいという申し出が生徒自身から出て来たり、質問自体も多くなり積極的に問題にあたる姿勢が見えて来たりして、「わかる」→「出来る」→「挑戦したい」というプラスの姿勢が見られた。

学習開始当時、やや粗さが見える生徒も見られたが、学習時間や教材の調整である程度の枚数をこなせるようになった。採点スタッフの方々にも協力していただき、付せん紙やスタンプを活用して生徒の意欲を保てたことも大きい。4月の段階で「他者の目を意識して文字を書くこと」を指導し、かなり改善されてきた面もある。自分たちの書いた文字を、大人はどのように判断するのかという事が理解できたのではないか。時折進路の話をしながら授業を進めていったが、引退した上級生からスポーツ推薦やAO入試の話が出てくる時期だったこともあり、公文学習以外の部分でも熱心に考えられた時期だったのではないか。

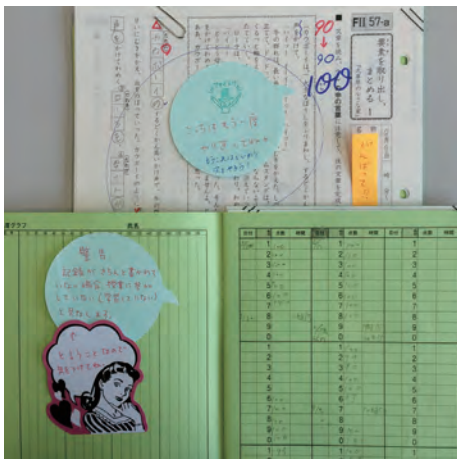
対して野球部クラスでは、授業が出来て月1回というような状況が続き、他の9クラスに比べてほとんど進めない事態になった。担任と現状を共有し、夏休み中の課題として40～50枚程度の教材と生徒記録を預け、休み明けに提出するように指示した。大半がある程度自己管理の出来る子どもたちであるという担任の判断からそうした形態をとることになった。何人かの保護者も公文の学習が課題として配られたことについて認識しており、各家庭での協力が得られたことも大きかった。

実際に夏休み明け、課題を提出させると全員が準備したすべての課題を学習していた。自分たちの空き時間を利用して約30分程度の時間で集中して出来たことが、すべての課題をこなせた要因であると考ええる。

【付箋紙やスタンプの活用について】

生徒たちのモチベーションの源となったものの一つに、ランダムに書き込んだり貼り付けたりする付箋紙や、押印されたスタンプがある。

私自身が単独で約400人分を採点していた時にやっていたことを、採点スタッフさんたちにもお願いするような格好で継続した。出来るだけ興味を引くように、派手なものや変わった形のものを推奨し、なるべく目につくようにしてもらった。生徒たちは当初何気なく見ていたようだったが、付箋に書いてあることやスタンプの意味が解ってくるにつれて、モチベーションを落とさずに学習するようになっていった。中にはついてくる付箋を集める生徒や、どうすれば付箋やスタンプを付いてもらえるのか聞いてくる生徒も出てきた。付箋紙やスタンプは、生徒自身の学習の確認やきっかけになっているようにも見受けられる。



基準は大雑把であるが、①授業中に学習した教材すべてが100点（全問正解）であること、②学習開始に比べて文字や答え方が格段に上達していることの二点である。

あえて全員に平等に貼り付けることを指示しなかったので、「付箋は条件を満たしたものでなければもらえないもの」という認識や、「評価されうる答え方や字体とはどのようなものか」という個人の課題を気づかせられたのではないだろうか。その結果机間巡回中の質問が増えたり、書き方をいろいろ考えて解答して来たり、それぞれが無意識で解答しこれまで躓いてきたことが何だったという事について考えるきっかけとなったようだ。そして生徒も、「先生方はちゃんと自分の解答を見てくれている」という安心感につながりより頑張る下地となっていると推察する。

「平等でないこと」に対して賛否はあろうと思うが、自分自身と他者の解答の内容についてどこが違うのかという事や、学習に対しての取り組みの違いは何かについて考えられたのではないだろうか。授業の終わる何分かに、同じ教材を学習している生徒同士で、評価の書かれた付箋紙のついた解答を見せ合って自分の解答と比べていたり、自分が学習している教材よりも難しい教材を見せてもらって、どうしたらここまで行けるかを考えたりする生徒が見受けられた。

【 所感等 】

私自身が当初考えていたよりも、生徒たちは熱心に学習していたということが最大の成果であり驚きであった。付箋やスタンプの活用は、一人で400人分の採点を行っていた時に自分の心が折れないようにするための逃げ道であったのだが、そうしたものが生徒の反応として返ってきたことは意外な事であった。

自分の答えの何が間違いだったのかをじっくり見なおしたり、今までなかなかやり難かっただろうと思われる問題に関する教員への質問が出来たり、個々それぞれが何かしらの課題を見つけながら学習できていた。

1時間でこなす枚数は若干減ったものの、100点を取る（全問正解をする）回数が増えた為か、入学当初より「読むこと」「書くこと」に対して抵抗感が薄くなってきたように感じた。中には「教材の物語が楽しい」と言ってどんどん進める生徒とか、「もっと難しい問題をやってみたい」とか、各自で楽しみや目標を持って取り組んでいた生徒もいる。居眠りや携帯使用などの問題行動も多くなか、個々それぞれ黙々とやっていた。一方的に教員が教えて終わり、という今までのスタイルではなく一人ずつスタート地点が違い、目的を持って課題に取り組むことが新鮮だったようである。

枚数（学習量）的には平均60枚程度と、当初の見込みよりだいぶ少なかったが、急遽入った行事や大会応援、台風での休校や短縮・授業開始時刻の繰り下げ等で授業を割愛したことが原因であり、一部を除いては概ねよくできたと思う。

【進路と公文学習について】

問題文を読んで解答することは、学習の基本である。しかし、問題文を面倒臭がって読まずに解答した結果、どんどん点数を下げしまい、勉強する気が起きない生徒が増えたように思う。どんな教材を与えても何をするにしても面倒臭いとか怠いとか言い訳をして、結果的に何もやらない生徒は一定数存在する。それらは別として、大半は公文の教材を使用して基礎・基本に立ち返って勉強する事に抵抗を示さなかった。

多くは自分の進路に対して不安を持っていたり、中学校での勉強で躓いてしまったが修正できずに来てしまったりした生徒だ。「なぜ今これをやるのか」「やる事でどんな意味があるのか」「これが将来的にどんな面で役立ってくるのか」をある程度明確にすることで、ほとんどが納得して学習したように思う。授業中に携帯をいじったり無駄話をしたりすることも殆どなかったことはそうした説明が折々にできたことが要因ではなかったろうか。

1年生では、漠然とした進路希望とそれに対する不安が多く見られる。例えばスポーツ推薦を希望していても具体的に何をすればいいかが見えない為、部活一辺倒の生活になってしまい、疲れ切って授業に集中が出来ず前述のようにどんどん点数を落としてしまうことがある。今しか基本に戻ることは出来ないことや、基本に戻って勉強することは決して恥ずべきことではないことを何度も指示して学習した。

「勉強＝大学入試レベル（あるいは特別進学コースや公立のナンバースクールで学習するレベル）の難しい問題をたくさんやること」という刷り込みがいつの間にか出来上がっている為か、簡単なレベルをどんどんやっていく公文のやり方に対して初めは戸惑っていたが、自分が出来なかったところが少しずつ分かっていくことが単純に嬉しかったようである。こうした思い込みが勝手に「自分は出来ない」という自己否定につながるように見えた。

「簡単な問題」であっても、「数多く問題をこなせる」ことで100点を取ることが「面白い」とか「勉強した」という感覚になってくれたことは、意外な成果であった。

最終週に近づくにつれて、他の人がどこまで出来ているかを気にする余裕も生まれ、お互い見せ合って何が違うのかを意見しあっている姿もあった。自分の凡ミスに対して露骨に悔しがったり、100点の枚数が増えてくることに對して自信を持ったりすることもあった。それぞれに手応えのあった半年間であったと思う。

総目録(第1号～31号)

1986年3月 第1号

巻 頭 言……………加藤 昭

I. 各種研修会・研修講座に参加して

- ・全国私立中高全国私学教育研究集会……………2
第33回 全国私立中学高等学校
全国私学教育研究集会山口大会参加報告(1)
柏倉 拓
全国私学教育研究集会山口大会参加報告(2) 国語部会
—新学習指導要領における文学教育— 青野 宏一
- ・全国私立中高国際教育研修会……………7
第7回全国私立中学高等学校
国際教育研修会に参加して 教諭 宝槻 隆史
- ・第12回「米国における社会研修講座」……………10
第12回アメリカ社会研修講座に参加して
副題日米社会の相違と文化摩擦 佐々木 豊
- ・第7回「私学の新任若手教員の研修講座」……………12
第7回私学の新任・若手教員研修講座に参加して
渡部 進
- ・「名取平野の文化財」史跡見学会の記録より……………14
渡邊 泰伸

II. 昭和60年度職員研修会

- ・授業研究・各科研究会……………27
国語科(現代文)学習指導案 遣水 満雄
社会科(日本史)学習指導案 駒板 泰吉
数学科(数学I)学習指導案 乾 敬
数学科学習指導案 鈴木 豊治
理科学習指導案 丸山 実信
TEACHING PLAN By Akiyoshi Ohmi
情報処理科 研修のまとめ
公開授業 教科:ベーシック
担当者:野村コンピューターシステム(株) 西村 昌郎
保健体育科柔道学習指導案 佐々木 豊
芸術科研修のまとめ

編集後記

1987年3月 第2号

巻 頭 言……………加藤 昭

I. 研究

- ・宮城県加美郡中新田町熊野堂遺跡調査略報……………2
渡邊 泰伸
- ・コンピュータによる学業成績処理……………28
瀬戸 信男
佐々木一郎

II. 各種研修会・研修講座に参加して

- ・第13回米国における社会研修講座に参加して……………39
沢田 敏明
- ・英語教師のための夏期セミナー講演会報告……………42
山田 昇
- ・第24回全国私立中学高等学校
保健体育科研修会に参加して……………50
阿部 俊英
- ・第28回全国私立中学高等学校
理科(生物)研修会に参加して……………52
今野 良裕
- ・第1回全国私立中学高等学校
ニューメディア教育研修会に参加して……………54
瀬戸 信男

III. 昭和61年度職員研修会

- ・授業研究・各科研究会……………59
国語科研究会報告 遣水 満雄
社会科研究会報告 渡邊 泰伸
数学I C不等式の表す領域 中川 良雄
代数幾何学習指導案 渡部 進
数学科研究会報告 中川 良雄
理科I 学習指導案 砂沢 準助
英語科研究会報告 宝槻 隆史
芸術科研究会報告 安倍 一男
情報処理I (BASIC) 小林 慶三
佐々木一郎
保健学習指導案 佐々木松治

編集後記

1988年3月 第3号

巻 頭 言……………加藤 昭

I. 研究

- ・仙台市安養寺下窯跡……………2
渡邊 泰伸
- 研究発表
・大学入試に取り扱われたカタナリー・サイクロイド・
インボリュート曲線について……………22
鈴木 弘

II. 各種研修会・研修講座に参加して

- ・第十四回 米国における社会研修講座(CIAA主催)
に参加して……………29
今野 良裕
- ・アメリカテキサス大学語学研修報告……………60
柏倉 拓
- ・第二十五回全国私立中学高等学校
保健・体育科研修会報告……………71
沢田 敏明

・第二十一回全国私立中学高等学校 生徒指導研修会報告	76	佐々木 豊
・第二十三回全国私立中学高等学校 道徳宗教教育研修会報告	78	及川千一郎
・第二回全国私立中学高等学校 ニューメディア教育研修会報告	81	大場 幸
・第九回国際教育研修会報告	86	出井まち子
・ジェラルド・ロビンス ピアノリサイタル報告	89	荒井 恵子

Ⅲ. 昭和62年度職員研修会

・授業研究・各科研究会	91	
・短歌教材指導について		高橋 正幸
・社会科研究会報告		柏倉 拓
・数学科（基礎解析）学習指導案		乾 敬
・校内公開授業		中川 良雄
・数学科研究会報告		佐藤 亘 松尾 勝郎
・理科（化学）学習指導案		櫻井 忠良
・理科研究会報告		砂沢 準助
・英語科研究会報告		小野 明夫
・書道Ⅱの学習指導について		安倍 一男
・ワープロ学習指導案		遠藤 卓 大場 幸
・保健体育指導		阿部 由晴

編集後記

1989年3月 第4号

巻頭言

I. 研究発表	1	加藤 昭
1. 安養寺下窯跡第3次調査	2	渡邊 泰伸
2. 同一素材の外国語翻訳を試みて	28	波里 光彦
Ⅱ. 海外研修	45	
1. アメリカ夏期語学研修についての報告と所感	46	坂爪 英夫
2. 地球の裏から「オブリガード」	51	宮本 昇
Ⅲ. 全国私学研修報告	63	
1. ニューメディア教育研修会報告	64	大場 幸
2. 現代社会とこれからの体育	96	丹野 博太

Ⅳ. 第36回全国私学教育研究集会新潟大会	99	
1. 特色教育部会報告	100	高山 直光
2. 福祉活動を中心として	110	小林 慶三
3. 教育課程部会報告	114	庄司 均
4. 国語分科会	121	笠岡 庸志
5. 英語分科会	134	宝槻 隆史
6. 商業部会報告	138	遠藤 卓

V. 校内公開授業各科研究会

・国語科研究会報告		遣水 満雄
・国語研究会報告		ソビエト連邦の教育事情と日本
・社会科研究会報告		小野寺文雄
・数学科研究会報告		校内研究授業〔数学Ⅰ〕学習指導案
・校内研究授業〔確率・統計〕学習指導案		岩渕 定義 鈴木 弘
・理科研究会報告		砂沢 準助
・理科授業研究…“ヒトの生殖と発生”を行うにあたって		横澤 秀夫
・英語科研究会報告		宝槻 隆史 谷津 繁勝 小野 明夫 大沼 洋二

・芸術科研究会報告		時代に即した音楽教育
・保健体育科研究会報告		保健体育「柔道」指導案
・情報処理科研究会報告		「進化する紙」
		佐々木一郎

Ⅵ. 編集後記・奥付

1990年3月 第5号

巻頭言		加藤 昭
I. 研究		
・仙台市安養寺下窯跡 第4次調査概報	1	渡邊 泰伸
Ⅱ. 各種研修会・研修講座に参加して		
・全国私学教育研究集会講演（教育課程部会）より	25	小林 慶三
・平成元年度 高等学校学習指導研修会	27	渡部 進
・私学経営研究会教員研修セミナー		

第11回私学の新任・若手教員研修講座報告	35
若澤 幸弘・及川 隆夫	
・第37回全国私学教育研究会大阪大会	
岩渕 定義	
〔1〕数学科分科会報告	49
〔2〕進路指導部会報	63
・全国私立中学高等学校	
第4回ニューメディア研修会に参加して	74
渡部 進	
・第30回東北地区私学教育研究会に参加して	86
山田 昇	
・第25回全国私立中学高等学校家庭科研修会	90
庄司 均	
・カナダ語学研修について	93
佐々木清彦	
・英国語学研修報告	102
阿部 徹・出井まち子	
・カー先生の日本体験記	117
波里 光彦	
Ⅲ. 授業研究・各科研究会	
・国語科学習指導案	143
千田 亥彦	
・数学科学習指導案	146
渡部 進	
・数学科学習指導案	152
菅井 了	
・数学科研究会報告	157
・理科（化学）学習指導案	161
半澤 健	
・化学実験の一考察	167
半澤 健	
・情報処理科（簿記会計）学習指導案	173
佐々木英明	
・保健体育科学習指導案	177
丹野 博太	
編 集 後 記	

1991年3月 第6号

巻 頭 言	加藤 昭
Ⅰ. 国際化教育への模索	
・日本の「国際化」に思う	1
波里 光彦	
・創立85周年記念事業 国際理解のための講演会	17
研 修 課	
・全国私立中学高等学校	
第12回国際教育研修会に参加して	34
佐々木清彦	
・夏期イギリス語学研修（女子）	60
関谷 照夫	
・夏期イギリス語学研修（男子）	73
桜井 忠良	

・女子卓球部中国遠征報告	85
若澤 幸弘	
・仙台育英学園高等学校創立85周年記念	
日本、カナダ国際親善ラグビー遠征記	89
伊藤挺一郎	
・第31回東北地区私学教育研修会 英語分科会	
「How to give the motivation to the students」	104
キャム・カー	
Ⅱ. 多賀城フォーラム	
・「多賀城フォーラム21」行わる	121
加藤 雄彦	
Ⅲ. 研究・研修	
・第25回全国高等学校体育学科連絡協議会に参加して	137
丹野 博太	
・平成2年度 研修課年間計画	
情報処理研修報告	144
佐藤 正行	
・平成2年度全国私立中学高等学校	
第5回ニューメディア教育研修会報告	167
佐藤 正行	
・私学経営研修会教員研修セミナー	
第12回私学の新任・若手教員研修講座報告	222
佐藤 正行	
・第12回私学の新任・若手教員研修講座	227
佐々木英明	
・西多賀養護学校を訪問して	228
若澤 幸弘	
・宮城県生徒指導研修会に参加して	230
佐々木英明	
・国語科（漢文）公開授業並びに教育研究会	241
寺尾 幸吉	
・数学科公開授業並びに教科研究会	248
近藤 精宏	
・英語科公開授業並びに英語科教科研究会	255
立谷 梨	
・理理科公開授業並びに教科研究会	260
男澤 文義	
・社会科教科研究会	263
阿部 徹	
・保健体育科（保健）公開授業並びに教科研究会	266
沢田 敏明	
編 集 後 記	269

1992年3月 第7号

巻 頭 言	加藤 昭
Ⅰ 研究	
・仙台市安養寺下窯跡	1
渡邊 泰伸	

II 多賀城フォーラム	
・第2回多賀城フォーラム	37 加藤 雄彦
III 講演「山形の一教師の実践論」	55 山形県生涯学習人材育成機構専務理事 打田 早苗
IV 研修報告	
・平成3年度高等学校教育課程講習会	75 凌 時哉
・東北国語教育研究会	83 佐々木隆男・板橋 敏男
・平成3年度宮城県高等学校教育課程講習会外国語部会	94 関谷 照夫
・第13回私学の新任・若手教員研修会	120 佐藤 弘
V 海外遠征報告（平成3年度）	
・夏期カナダ語学研修	125 関谷 照夫
・夏期イギリス語学研修（男子）	135 山田 紀英
・夏期イギリス語学研修（女子）	150 砂金 紀
・オックスフォード紀行	162 高平たつみ
・軟式庭球部台湾遠征	172 佐藤 正行
・女子卓球部スウェーデン遠征	176 大岡多津子
・イタリア知識旅行事前調査	180 小林 慶三・渡部 進・佐々木順子 武田 美法・加藤 晃孝
・女子卓球部中国（上海市）遠征	191 若澤 幸弘
VI 研究・研修	
・校内研修会実施要	193
・国語科公開授業並びに教科研究会	194 及川千一郎
・数学科公開授業並びに教科研究会	224 佐藤 孝
・英語科公開授業並びに教科研究会	230 秋山なみ江・出井まち子
・理学科公開授業並びに教科研究会	232 渡辺 重隆
・社会科教育研究会	238 加藤 晃孝
VII 論文	
・国語科短歌鑑賞会	
一高校生の読み物として一名歌少考	245 高橋 正幸

・「うたごころ」	256 加藤 武夫
編集後記	259
1993年3月 第8号	
巻頭言	加藤 昭
I 研究	
・仙台市安養寺下窯跡（第7次調査概報）	1 渡邊 泰伸
II 研修・遠征報告	
・第14回私学の新任・若手教員研修講座	47 槇 統
・全国高等学校選抜卓球大会二連覇を達成して	50 大岡 厳
・オーストラリア英語に接して	52 庄子春一郎
・平成4年度夏期イギリス語学研修	54 渡邊 泰伸
・男子陸上チームのカナダ・バンクーバー遠征	106 二階堂 進
III 校内研修会	
・平成4年度校内研修会実施要項	109
・国語科教科研究会	110 佐藤 秀一
・数学科公開授業並びに教科研究会	154 加藤 晃孝
・理学科教科研究会	163 八木 浩
・社会科教科研究会	203 佐藤 林平
・保健体育科公開授業並びに教科研究会	212 槇 統
・情報処理科公開授業並びに教科研究会	217 佐々木英明
編集後記	223
1994年3月 第9号	
巻頭言	加藤 昭
I. 加藤利吉先生生誕111年 学園創立88周年記念事業	
・多賀城校舎グロリーホール落成を記念して	1 半沢 健
・記念講演—大きく変わりつつある世界そして学校のゆくえは	7 ロバート・カークナー
・平成5年度父母教師会総会講演	26 トミー植松

II 研究		
・仙台市安養寺下窯跡（第8次調査概報）	37	渡邊 泰伸
・宮城県志田郡松山町下伊場野窯跡調査略報	58	渡邊 泰伸
III 海外研修・遠征報告		
・女子バレー部韓国研修旅行	105	佐藤 幸雄
・サッカー部ドイツ遠征	107	佐藤 脩
・中国グランプリ国際大会報告書	123	大岡 巖
・ボーンマス再訪	124	渡邊 泰伸
・平成5年度イギリス語学研修に参加して	180	高谷 功
・平成5年度カナダ研修旅行	195	今野 仁
・クリスマスをアメリカの一家庭で過ごして	206	庄子春一郎
IV 研修報告		
・平成5年度私立学校初任者研修全国研修会（第2回）	209	庄子 和良
・平成5年度私立学校初任者研修全国研修会（第2回）	214	寺内るみ子
・第15回私学の新任・若手教員研修講座	219	寺内るみ子
・第15回私学の新任・若手教員研修講座を受講しての報告	223	松原潤一郎
・全国私立中学高等学校性教育研修会参加報告	226	柏倉 拓
・平成5年度全国私立中学高等学校生徒指導研修会	230	宝槻 隆史
・私学の特色ある教育課程の実践に向けてⅡ	233	佐々木 豊
・平成5年度全国私立中学高等学校数学科研修会報告	248	加藤 晃孝・鈴木 孝司
・全国私立中学高等学校英語科研修会	252	武田 美法
V 校内研修会		
・平成5年度校内研修会実施要項	255	
・効果的国語指導の在り方	256	及川千一郎・清水 初治
・社会科教育研究会	266	高谷 功・渡邊 泰伸
・数学科研究会記録	271	佐々木順子
・地学学習指導案	276	武田 要吉
・英語科研究会	285	武田 美法
・総合実践業務処理システム実習概要	293	瀬戸 信男
・保健体育科学習指導案	325	庄子 和良
・保健体育科柔道学習指導案	327	松原潤一郎
編集後記	330	
1995年3月 第10号		
巻頭言		加藤 昭
I 研究		
・仙台市安養寺下窯跡（第9次調査概報）	1	渡邊 泰伸
II 海外研修・語学研修		
・英国語学研修〔ボーンマス〕の記録	31	渡邊 泰伸
・カナダ語学研修旅行を共にして	93	日下 英夫
・カナダ語学研修報告	105	柏倉 拓
・CBS杯招待遠征報告（韓国（ソウル）雑感）	115	丸山 博史
・韓国CBS杯全国高等学校バレーボール大会に参加して	121	藤屋 秀人
・ニュージーランド語学研修／姉妹校訪問	124	二階堂 勉
・ニュージーランド語学研修	129	小野 裕子
・ハワイ修学旅行下見についての報告と雑感	131	坂爪 英夫
・ラグビー部ニュージーランド遠征についての報告	136	丹野 博太
・ヨーロッパ・橋紀行	145	関根 一郎
・オーストラリアの高校生活ー公立キルコイ高校の場合	154	庄子春一郎
III 研修報告		
・平成6年度私立学校初任者研修北海道東北地区研修会報告	163	引地 由佳
・平成6年度私立学校初任者研修北海道東北地区研修報告	167	中村 千恵

・第35回東北地区私学教育研修会	171
今野 仁	
・第35回東北地区私学教育研修会参加の報告	180
佐藤 林平	
・第35回東北地区私学教育研修会進路指導部会	199
大場 幸	
・第35回東北地区私学教育研修会学習指導部会理科分科会	205
大沼 正行	

IV 校内研修会

・平成6年度校内研修会実施要項	209
・「国語科」研究会	210
鎌田 敬	
・数学科研究会記録	215
佐藤 孝	
・英語科研究会	220
砂金 紀	
・理科研究会	226
横澤 秀夫	
・社会科研究会	235
阿部 徹	
・情報処理科研究会	242
佐藤 正行・内海 利男	
・保健体育科指導計画	256
中村 光男	

1996年3月 第11号

創立90周年特別号

巻 頭 言	加藤 昭
-------	------

I 研究

・「世界史」探訪の旅	1
武田 義之	
・不登校児への対応を探る	8
半澤 健	
・宗教と人生	20
小柳 俊夫	
・文学教材指導法雑感	34
伊藤源太郎	
・補助教材として授業中に使用した参考作品集	48
丹野 将範	
・生活史に反映する伝承音楽の役割	94
鎌田 敬	

II 海外研修

・カナダ研修旅行	111
太宰 芳郎	
・イートン校サマースクールを終えて	121
加藤 晃孝	
・オーストラリアの中学生活 公立モーソン中学の場合	125
庄子春一郎	

III 研修報告

・平成7年度『財政経済セミナー』に参加して 我が国財政の現状と課題	129
小嶋 聡悦	
・全国私立中学高等学校国語科研修会研修報告書	170
引地 由佳	
・「性教育研修会」に参加しての報告	174
出井まち子	

編 集 後 記	177
---------	-----

1997年3月 第12号

巻 頭 言	加藤 雄彦
・授業の活性剤	1
半澤 健	
・世界史探訪の旅Ⅱ	6
武田 義之	
・修学旅行事前調査報告	21
沼田嘉一郎	
・韓国スポーツ交流団へ参加して	26
坂爪 英夫	
・韓国修学旅行事前調査に参加して	53
宝槻 隆史	
・Memories of Canada	59
清水 初次	
・学校茶道の果たす役割	63
佐藤 宗秀	
・茶事の研修	69
岡崎 宗豊	
・裏千家今日庵を訪ねて	71
馬淵 宗友	
・21世紀にお茶の心をつなごう	74
木村 宗智	
・カナダ研修旅行報告	78
山田 昇	
・イギリスアップランズカレッジ語学研修事前調査に いって	82
小嶋 哲朗	
・「私学教員のめざすもの」についての一考察	85
下平 孝富	
・北海道・東北地区研修会	88
富澤 良江	
・当世イングランド南西地区環境状況	91
内海 利男	
・宮城野校舎での「LD学習」の利用の現状について	94
工藤 敏夫	
・『第1回実用英語技能検定』の結果を振り返って	100
尾形 照子	
・異文化体験	102
庄子春一郎	
・『ライオンの晴』発行について	108
山本吉之助	

・CS向上めざして教養コースからの提案	113
坂爪 英夫	
・多賀城セクション生徒寮保護者懇談会概要報告	126
守 喜美夫・加藤 晃孝	
・教育実習（養護教諭）期間中に行った研究について	137
指導 木村 保子・佐藤 雅美	
・KOREA旅行雑感・1996年	145
阿部 俊徳	
・長春外国語学校との姉妹校締結記念 中国訪問親善交流・研修の記録	152
曾我 道雄	
・那須研修の現状について	166
藤岡 昌之	
編集後記	186

1998年3月 第13号

巻頭言	加藤 雄彦
・演題「180°変わる進学英語」	1
佐藤 良明	
・世界史探訪の旅Ⅲ—チュニジア共和国とカルタゴの 遺跡—	10
武田 義之	
・雄と雌の話	25
半沢 健	
・高校生の喫煙についての一考察	52
富澤 良江	
・平成8年度教養コースにおける生徒指導の一つの試み	59
沼田嘉一郎	
・平成8年度修学旅行	75
瀬戸 信男・小川 久松・渡邊 泰伸	
・カナダ日記 1997年夏	84
阿部 俊徳	
・アンコール・ワットへの旅	94
佐藤 雄三	
・CS向上をめざす物理教育の一試案	102
高橋 明	
・英国語学研修実施報告	121
千代窪敏光	
・平成9年イギリス夏期語学研修（ボーンマス団）	125
遊佐 隆司	
・松島研修センターの概要	133
榊井 庸彦・渡辺 章紀・佐々木英明 千葉 浩・青木 康博	
・オーストラリアのハイスクール	149
庄子春一郎	
・ペルシアの風—イラン旅情—	158
伊藤源太郎	
・授業における吹奏楽の試み	212
牛渡 純	

・はじめてのクロアチア国際交流	218
澤口 衛・藤屋 秀人 郷古 武・木村 美知	
・国際ゆめ交流博覧会の報告	230
ジェシタ ワンジロ ムタヒ	

編集後記

1999年3月 第14号

巻頭言	加藤 雄彦
・初任者研修	1
PART I 宮城野中学校での中高連携授業研究会に 参加して	
日比野曜子 鈴木 暁子 佐々木順子 引地 由佳 下平 孝富 佐々木順一郎 富澤 良江 箱島 道泰 榎 統 藤屋 秀人 千葉 浩 岡崎 由起 古宮 紀子 池口真理子 鈴木 保恵 松原潤一郎 吉田 淳 郷古 武 望月久美子	
PART II 三色最中を訪ねて	
望月久美子 下平 孝富 古宮 紀子 池口真理子 榎 統 鈴木 暁子 松原潤一郎 佐々木順子 鈴木 孝司 鈴木 保恵 岡崎 由起 引地 由佳	
・数学嫌いをつくり出す原因を本校生徒よりさぐる	33
渡部 進	
・Message from Mahurangi College, NZ	45
ジョン・スコベル	
・ニュージーランド修学旅行	48
庄子春一郎	
・ドイツ滞在3年あれこれ	54
佐々木芳輝	
・高等学校におけるコンピュータ事情	63
高階 公・若松 武徳	
・我が国の人名習俗—複名習俗としての—	74
新関 昌利	
・ヨーロッパ知識旅行	84
藤岡 昌之	
・簿記会計1級合格を目指して	91
坂爪 英夫	
・シリーズPART IV「中国」	93
北京・長春の見聞 中国の近代史をみる	
坂爪 英夫	

編集後記

2000年3月 第15号

巻 頭 言……………加藤 雄彦

I 研究報告

- (1)平成7,8年度帰国子女教育研究……………1
千葉 浩
- (2)高校生時代の「日の丸」掲揚、「君が代」斉唱と、
その人格形成への影響について－「日の丸」「君が
代」に関する一考察－……………30
若松 武徳
- (3)わが育英における語学教育－中国語教育について－
……………44
張 言行

II 平成11年度新任者研修の記録

- (1)「講演会」……………49
大学から見た、これからの青少年への期待
期 日 H.11年3月8日(月)16時より
講 師 東北大学総長・工学博士 阿部 博之先生
会 場 宮城野校舎 大会議堂
- (2)「講演会」
コーチング科学について
期 日 H.11年6月18日(月)
16:30～17:50
講 師 順天堂大学スポーツ健康科学部、
コーチ学バレーボール研究室 河合 武司 先生
- (3)平成11年度体育会運動部校内研修会
－コーチング科学講演会をきいて－……………71
杉本 真・進藤由里子
- (4)北海道・東北地区私学学校初任者研修会に参加して
－職業人である私学教員として「私学」というもの
をきちんと理解し、認識する－……………74
鎌田千佳子
- (5)北海道・東北地区私立学校初任者研修に参加して
－21世紀が求める学力を育む学習とその指導－
……………80
佐藤 恵美

III 研修旅行

- (1)イギリス・アップランズカレッジ語学研修……………85
千葉 浩
- (2)カナダ研修旅行記……………96
秋山なみ江
- (3)イギリス語学研修……………104
武田由紀子
- (4)1998年教養コース修学旅行下見報告(瀬戸内班)
……………113
渡邊 泰伸

IV 歳時記

- (1)NewYork Symphonic Ensemble
－Japan Concert Program 1998－
1.「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル
と仙台育英高等学校混声合唱団・仙台育英学園秀光
コース・秀光中学校オーケストラ・ジョイントコン

サートを終えて」……………122

- 牛渡 純
- 2.「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル
ジョイントコンサートに参加して」……………126
中村 桂子
- 3.「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル
ジョイントコンサートの合唱指導」……………129
横山 功
- (2)ケニヤからのメッセージ……………135
エライジャ・J・ギタオ
- (3)オランダからきた柔道人－オランダからやって来た
柔道家たちとの交流記－……………139
箱島 道泰

V 英文中文目次要旨……………142

編 集 後 記

2001年3月 第16号

巻 頭 言……………加藤 雄彦

「トピックス」

- 「一瞬に賭けたエアピストル」
－シドニーオリンピック・エアピストル競技出場
稲田容子先生応援記－……………1
沼田嘉一郎

I 研究報告

- (1)「開かれた学校経営」
～集めるPTAから、集まるPTAをめざして～……………6
沼田嘉一郎

II 平成12年度研修の記録……………13

- (1)「第1回教職員研修会」
「社会に背を向ける青少年の心の問題」
講 師 宮城県中央児童相談所次長 本間 博彰氏
- (2)「進学CLUB講演会」……………27
「生きる喜び」－ガンとの戦いにうち勝って－
講 師 千葉 勇作 氏
- (3)「第2回教職員研修会」……………44
「オリンピックの活躍とキューバスports」
講 師 キューバスports省
ロベルト・ゴンザレス 氏
- (4)「指導者講習会」
「中国のスポーツ事情」 講 師 孫 国華 氏

III 研修旅行

- (1)教養コース 中華人民共和国 中国研修旅行の記
「大きな一歩－中国5日間の旅」……………57
佐藤 學
- (2)教養コース 英語語学研修
「英語での初めての生活はスケッチブックと」……………70
佐々木仁志

(3)英進コース カナダ語学研修 「語学研修 犬ですら英語でしか反応しない」	82
芳賀 良光	
(4)韓国研修「韓国の古都慶州を駆けぬける」 第16回コーロン杯高校区間マラソン大会招待参加 記録	90
遊佐 隆司	
(5)外国語コース ヨーロッパ語学研修 「すばらしき体験」 「What a LOVELY experience !」 ーイギリス(チャタム)語学研修を終えてー	97
渡辺有紀子	
(6)特別進学コース 英語語学研修 「心豊かな日々」ーイギリス・アップランズ・コ ミュニティ・カレッジ語学研修ー	111
佐伯 達二	

IV 英文・中文目次要旨 129

編集後記

2002年3月 第17号

巻頭言	加藤 雄彦
「トピック」 「キューバ訪問」 訪問の記録	1

I 研究報告 イギリスの教育改革	14
若松 武徳	

II 平成13年度研修の記録 (1)講演 こころの担任	22
仙台市教育長 阿部 芳吉 指導者のあるべき姿勢と今日の日本スポーツ現状	32
帖佐 寛章	

(2)研修記録 「本校における国際交流」 ー平成13年度第41回東北地区私学教育研修会国際 教育部会ー	49
大場 幸	
(3)開放講座「生き生き学級」の実践	63
船島 敏之	

III 研修旅行 (1)教養コース ニュージーランド研修旅行 「育英学園の教師であればこそ」	67
佐々木 功	
(2)英進コース 英国語学研修 「貴重な経験」	76
山川眞理子	

IV 歳時記 「少林寺拳法国際大会2001」出場実施報告書	88
佐々木英明	

V 英文中文目次・要旨 92

編集後記

2003年3月 第18号

巻頭言	加藤 雄彦
「トピック」 「全国制覇」夢達成に胸を張り。	1
佐藤 達雄	
「～千人の思いよ届け！～バンブーオーケストラ」	3
相良 信恵	

I 平成14年度 研修の記録 (1)「21世紀の情報教育」ー図形と画像処理ー	10
小林 祐喜	
(2)仙台育英学園高等学校における公文式英語学習の導 入について～ The report on the introduction of Kumon English Method at SENDAI IKUEI GAKUEN HIGH SCHOOL ～	26
日野 彰	
(3)平成14年度私立学校初任者研修 北海道・東北地区研修会参加報告	32
石山かおり	

II 研究報告 (1)文章指導についての一考察 ー小論文入門編としてー	41
齋藤 典子	

III 研修報告 (1)教養コース 中国研修旅行 研修旅行で学んだもの	66
佐竹 伸彦	
(2)英進コース イギリス語学研修 Letters From Cambridge (ケンブリッジからの便り)	82
進藤 満	

IV 英文目次・要旨

編集後記

2004年3月 第19号

巻頭言	加藤 雄彦
トピック クロアチアからの手紙	1
ドリカ・グロシニッチ	

I 研究報告

- (1)通信制課程における教科指導ービデオを利用した地球環境と生物界の変化についてー……………3
金田 敏宏
- (2)投球速度の異なる投手の投動作の比較研究
ー高校野球選手を対象としてー……………7
佐々木順一郎
- 平成15年度
順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究所
スポーツ科学領域コーチング科学専門分野修士論文
指導教官 川合 武司 教授
- (3)第3期(社)日本経済団体連合会
キャリア・アドバイザー養成講座受講報告書…………37
佐々木 豊

II 研修旅行

- (1)外国語コース ニュージーランド語学研修旅行
ENCOUNTERING A DIFFERENT CULTURE
「異文化との出会い」……………47
永井 惇
- (2)英進進学コース ニュージーランド語学研修旅行
「はじめてのニュージーランド語学研修」…………54
石田 昌彦

編集後記

2005年3月 第20号

巻頭言……………加藤 雄彦

トピック

ケニアからの留学生 サムエル・ワンジル (Samuel Kamau Wanjyu) 君と書道の出会いー心の修行にー……………1
渡邊 章紀

I 研究報告

- (1)心豊かな生徒の育成をめざして
ー合同LHRをとおしてー……………5
秀光中等教育学校 ホームルーム委員会 代表
高橋 守雄
- (2)宮城県高等学校商業教育研究会平成16年実務演習
講習会受講報告……………15
佐々木英明・日野 彰
- (3)フォローアップ講座についての考察……………24
小野 仁也・櫻井 順
- (4)スピン軸は公転軸を目指す……………51
原 憲之介
- (5)1年生の試行錯誤……………62
本木 真人
- (6)宮城県加美郡色麻町 土器坂瓦窯跡の調査
ー雷文縁4葉複弁蓮華文軒丸瓦を出土する色麻柵付
属瓦窯跡の調査ー……………78
仙台育英学園高等学校考古学研究部 古窯跡研究会

II 平成16年度 研修旅行報告

- (1)教養コース 北海道研修旅行
ー有意義で事故の無い研修旅行の実践ー……………182
船島 敏之
- (2)教養コース 中国研修旅行報告……………187
瀬戸 信男
- (3)秀光中等教育学校 スイスの自然環境保護への取り組みーユーロスクールを通して感じたことー…………193
小林 祐喜
- (4)英進進学コース ニュージーランド留学研修
ー新たな発見を求めて in New Zealandー…………199
高橋 美保
- (5)英進進学コース カナダ語学研修旅行……………207
木村 啓子
- (6)特別進学コース カナダ語学研修
ー自然を愛する国ー……………212
高根 司

編集後記

2006年3月 第21号

巻頭言……………加藤 雄彦

トピック

青い目の剣士たちースウェーデン研修からー……………1
田中 裕子

I 研究報告

- (1)スペイン語の指導法の研究……………11
コレテス・レオン
- (2)憲政初期の選挙運動の一形態……………23
井上 祥
- (3)トリプルA委員会の計画と取り組みについて…………31
トリプルA委員会委員長 佐々木英明
- (4)MBPとKBPの比較
ー国際収支理論を中心にー……………35
零石 誠孝
- (5)平成17年度
公文英語・英語Iの関連性における考察……………46
高橋 美保
- (6)部活動指導における一考察
ーサッカー部三年間の歩みー……………70
吉井 秀邦
- (7)創作脚本講習テキスト
ー宮城県高等学校演劇総合研修会ー……………76
渡部 進
- (8)古代東北における古瓦の研究……………83
渡邊 泰伸

II 平成17年度 研修旅行報告

- (1)特進コース
アイルランド・オーストラリア語学研修……………122
日比野曜子
- (2)英進コース 北海道研修旅行……………134
伊藤 寿展・桜井 順

(3)英進コース イタリア研修旅行	148
池口真利子	
(4)英進進学コース カナダ語学研修旅行	159
石田 昌彦	
(5)外国語コース アイルランド語学研修	173
岡崎 由起	
(6)フレックスコース 北海道研修旅行	180
大友 健一	

編集後記

2007年3月 第22号

巻頭言	加藤 雄彦
-----	-------

トピック

毎日書道宮城県高校生選抜書展団体賞 ー第12回展～第16回展（2002～2006） 5連覇を叶えた仲間たちー	1
渡邊 章紀	

I 研究報告

(1)フォローアップ講座についての一考察	13
加藤 美穂	
(2)TOEIC/TOEIC Bridge教員向けセミナー ー「高校における活用事例」ー2006ー仙台に参加 してー	34
小野寺朋子・日比野真奈	
(3)法学の学問的特殊性 ーその概念形成の仕方に注目しつつー	37
伊藤 剛	
(4)特別進学コース プラン2000実施報告 ー平成16年～18年度の取組についてー	44
倉橋 真司	

II 平成18年度 研修報告

(1)英進進学コース カナダ語学研修	61
相良 信恵	
(2)英進進学コース 北海道研修報告	69
渡邊 章紀・文屋 祐介	
(3)英進進学コース 英進コース研修 ー膨大な歴史・文化の都イタリアを訪ねてー	94
佐竹 伸彦	
(4)外国語コース アイルランド・ドイツ 語学研修	109
岡崎 由起	
(5)フレックスコース 北海道学研修	117
1班（男子）	富栄 博行
2班（女子）	島倉 尚子
(6)秀光中等教育学校 「2006ユーロスクール」実施報告	127
前半	船越 総眞
後半 ダブリン班	千葉 浩
レンヌ班	石田真理子
エジンバラ班	脇 淳

(7)通信制課程 異文化体験ハワイ研修	156
大竹 聡美	

編集後記

2008年3月 第23号

巻頭言	加藤 雄彦
-----	-------

トピック

「仙台育英中学校創立記念誌」の発見とその内容について ー戦火を超えて残った大正12年2月発行の記念誌ー	1
渡邊理律子	

I 研究報告

(1)高等学校における日本思想を扱った学習指導について ー保科正之の思想と会津を事例としてー	7
倉橋 真司	
(2)外国語コース1年生におけるPLPへの意識調査と家庭学習について	18
北村 悦子	

II 平成19年度 研修報告

(1)英進コース 北海道研修旅行報告	44
小野 仁也・及川 尚彰	
(2)特進・外国語コース 2007年アイルランド・ドイツ語学研修	48
浅利 正雄	
(3)フレックスコース 北海道学研修報告	55
大岩 和良	
(4)秀光中等教育学校 ①グリーンスクール研修報告	60
千葉 広高	
②ー1 2007ユーロスクール実施報告(前半)	66
千葉 浩	
ー2 アイルランド・ダブリン班(後半)	松田 万理
ー3 フランス・レンヌ班	小林 祐喜
ー4 参加生徒レポート	
(1)初めてのヨーロッパ	岩本 怜央
(2)私が感じたヨーロッパ	川岸 瑞歩
③第4学年自由研究論文 京都実地研修報告	103
芦立 俊雄・他	
(5)通信制課程 異文化体験ハワイ研修	131
新田 玲子	

編集後記

2009年3月 第24号

巻頭言	加藤 雄彦
-----	-------

トピック

「グリーンフィールド」	1
吉井 秀邦	

I 研究報告

- (1)平成20年度 第47回東北地区私学教育研修会報告
..... 4
石田 昌彦
- (2)第47回東北地区私学教育研修会報告 7
小林 祐喜
- (3)小論文指導の着地点はどこに設定すべきか 12
三浦 宗隆
- (4)全国音楽教育研究会高等学校部会全国大会宮城大会
報告 19
熊原 裕美
- (5)国語教育における課題
ー国語教育研修会に参加してー 22
島倉 尚子
- (6)日本史の教材研究の試み
ー「城下町」の場合を例としてー 37
作間 克彦
- (7)高校生における携帯電話の利用について
ーフレックスコース1年生の調査からー 43
後藤 有希
- (8)仙台市安養寺下瓦窯跡調査報告
ー陸奥国分寺・同尼寺創建期の瓦窯跡ー 47
渡邊 泰伸

II 平成20年度 研修報告

- (1)英進コース 北海道研修旅行報告 245
(前班) 赤間由樹子
(後班) 秋葉寿太郎
- (2)特進・外国語コース
2008年アイルランド・ドイツ語学研修 263
小岩久美子
- (3)フレックスコース
①北海道学研修報告 280
(男子) 高階 公
(女子) 高橋 葉子
- (4)秀光中等教育学校
①グリーンスクール研修報告 296
田添万智子
- ②ユーロスクール実施報告 301
前半(スイス・ジュネーブ) 庄司 昌弘
後半(アイルランド・ダブリン) 木田智恵美
前半(イタリア・ローマ) 本木 真人
後半(フランス・レンヌ) 牛渡 純
- (5)通信制課程 異文化体験ハワイ研修 333
新田 玲子

編集後記

2010年3月 第25号

巻頭言 加藤 雄彦

トピック

2009年「長春第十一高校」姉妹校締結訪問 1
赤間由樹子

I 研究報告

- (1)伝統芸能の継承に見られる教育のあり方
ーハワイ・フラにおける一考察ー 5
安住 陽子
- (2)日中交流の架け橋に... 中国人就学生への取り組み
..... 27
岩渕 奈央
- (3)理科教育の現状と今後の課題
ーBU(理科)を通してー 35
寒河江華菜
- (4)ニュース時事能力検定の授業への導入について 38
秋葉寿太郎
- (5)仙台育英学園陸上競技部(短距離ブロック)の活動
報告と今後の展望 43
菅原 新
- (6)アブソープション・アプローチについて 47
雫石 誠孝
- (7)書の楽しみ方 ～いろいろな書の在り方の一考察～
..... 50
渡邊 章紀

II 平成21年度 研修報告

- (1)英進コース 北海道研修旅行報告 71
早坂 恵人・高根 司
- (2)外国語コース 韓国ソウル研修報告 79
青木 康博
- (3)特別進学コース・外国語コース
ハワイ語学研修旅行報告 84
庄司 昌弘
- (4)フレックスコース(多賀城校舎)
韓国ソウル研修旅行報告 95
阿部 綾子
- (5)フレックスコース(宮城野校舎)
①北海道学研修旅行報告(女子) 104
池口真利子
- ②北海道学研修旅行報告(男子) 110
寺澤 信枝
- (6)秀光中等教育学校
①第3学年ユーロスクール実施報告(前半) 118
倉橋 真司
- ②第3学年ユーロスクール実施報告(後半) 128
小岩久美子
- (7)通信制課程 異文化体験ハワイ研修 131
新田 玲子

編集後記

2011年3月 第26号

巻頭言 加藤 雄彦

トピック

I-LION HAWAII SCHOOLにおける
ソーシャルスタディーズがめざすもの 1
安住 陽子

I 研究報告	
(1)西洋倫理思想史におけるプラトニック・ラブ(エロス論)の系譜 —アンリ・ベルクソンの説を中心に—	10
	土屋 靖明
(2)高校野球の犠牲バントに関する一考察	15
	横山 将
(3)育英祭での第2学年演劇上演報告	22
	河内 実華
(4)私の考える理想的な授業 ～Brush Upを通じて感じたこと～	32
	高橋こずえ
(5)気化熱を利用した燃焼実験と冷却実験	36
	相原ゆり子
II 平成22年度 研修報告	
(1)英進進学コース 第2学年北海道研修旅行報告	39
	山本 尚武
(2)外国語コース 2010年度TOEICエッセイコンテスト3位入賞について —報告—	49
	鹿野 洋・高橋 智子
(3)特別進学コース ハワイILHA語学研修	51
	石山かおり
(4)フレックスコース(多賀城校舎) 北海道学研修旅行報告	62
	千葉 陽子
(5)フレックスコース(宮城野校舎) ①北海道学研修旅行報告	96
	千葉絵美子・庄子 由美
②沖縄学研修旅行報告	101
	小石純之介・佐藤 飛鳥
(6)秀光中等教育学校 第3学年ユーロスクール2010報告	
①前半(9月6日～10日) スイス～イギリス	105
	石田真理子
②後半(9月11日～17日) フランス	117
	脇 淳
(7)通信制課程 異文化体験ハワイ校研修報告	134
	新田 玲子

編集後記

2012年3月 第27号

巻頭言	加藤 雄彦
トピック	
仙台育英獅子太鼓部 —ダボス会議に参加して—	1
	高橋 葉子

I 研究報告

(1)教育リーダーシップ理論における「同僚性」の理論とその実践的意義	7
	石田真理子

(2)国語教育における文学的文章の読解 —短歌を題材として—	17
	鈴木 正明
(3)外国語コースにおける外国語指導についての考察	20
	小野 真弓
(4)本校における理科の指導について —Brush Upを通しての一考察—	26
	井上 晶子
II 平成23年度 研修報告	
(1)英進進学コース	
①第2学年北海道研修旅行報告	29
	高橋 麻憂
②2011年度TOEICエッセイコンテスト特別賞受賞 について(報告)	39
	鹿野 洋・岩渕 奈央
(2)外国語コース ILHA研修に向けての準備と研修報告	41
	高橋 美保・安住 陽子
(3)特別進学コース	
①PLAN2000 山形疎開学習報告	65
	高橋 真理
②第2学年校外研修旅行報告	73
	鈴木 和弘・伊藤 信男 山下 秀範・小山 格
(4)Tフレックスコース(多賀城)北海道学研修旅行報告	82
	後藤 有希
(5)Mフレックスコース(宮城野)沖縄学研修旅行報告	89
	佐藤 絢
(6)秀光中等教育学校 第2学年ILHA研修報告	96
	安住 陽子・須江 航・前澤 絵菜
(7)通信制課程 異文化体験ハワイ研修報告	106
	安藤 清一

編集後記

2013年3月 第28号

巻頭言	加藤 雄彦
トピック	
秀光・特進共同理科実験講座「サイエンス・コ・ラボ」	1
	千田 芳文
第1回New York Shukoh Academy (NYSA) 実施報告	12
	小林 祐喜

I 研究報告

(1)地理の授業での工夫	21
	鈴木 和雄

(2)英進進学コースⅡ類における高度IT教育について	29
日野 彰	
(3)外国語コースの特色を生かした授業 ～日本伝統文化の発表活動を通して～	34
松田 万里	

Ⅱ 平成24年度 研修報告

(1)英進進学コース 第2学年北海道研修旅行報告	45
三浦 宏明	
(2)特別進学コース	
①ILHA研修	58
河内 実華	
②京都研修旅行	69
神谷 章嗣・三浦 仁志	
(3)Tフレックスコース(多賀城)沖縄研修旅行	75
伊藤 寛・千葉 陽子	
(4)Mフレックスコース(宮城野)沖縄学研修旅行	80
安部 恒俊	
(5)秀光中等教育学校 第2学年 ILHA研修	94
遠藤 祐太	
(6)日中国交正常化40周年記念事業 仙台育英学園 高等学校通信制課程 北京研修報告	99
安藤 清一	

編集後記

2014年3月 第29号

巻頭言	加藤 雄彦
-----	-------

トピック

インドネシア研修生の本校での短期研修について	1
新井 真未	
第4学年 NYSA2013実施報告	12
小岩久美子	

I 研究報告

(1)化学部の活動	23
讃岐 果林	
(2)情報科学コースに向けての取り組みについて	33
島倉 尚子・庄司 邦彰	
遠藤 誠・日野 彰	

Ⅱ 平成25年度 研修報告

(1)英進進学コース	
ILHA研修報告	41
佐々木真野	
第2学年北海道研修旅行報告	54
及川 まり・本多 華菜	
(2)特別進学コース 関西校外研修報告	66
神谷 章嗣	
(3)Tフレックスコース 沖縄研修旅行報告	72
赤間由樹子・林田 茂・芳賀 賢祐	
古田 夕子・二瓶 巧	

(4)Mフレックスコース 沖縄研修旅行報告	76
佐藤 優人	
(5)秀光中等教育学校 ILHA研修	85
下浅 雄大	
(6)通信制課程 広域通信制課程沖縄研修報告	95
戸崎 亮司	

編集後記

2015年3月 第30号

巻頭言	加藤 雄彦
-----	-------

トピック

広域通信制課程 ILC沖縄東北研修旅行報告	1
ICL沖縄 與那城慧太	
国際バカロレア・デュアルプログラム(IBDP)導入 について	7
外国語コース 高橋 郁夫	

I 研究報告

(1)イマージョン授業(国際バカロレア準備)	10
外国語コース ジェームズ・ドクターマン	
(2)戦時期における「仙塩地方開発総合計画」(いわゆる 金森構想)の登場と展開	23
特進コース 雲然 祥子	
(3)河川流域における遺跡動態の研究	30
英進コース 佐々木 悟	

Ⅱ 平成26年度 研修報告

(1)特別進学コース	
関西校外研修旅行	46
高橋 真理	
(2)情報科学コース	
第1学年 会津研修報告書	52
正木 智也	
第2学年 校外研修報告	57
千葉 陽子	
(3)外国語コース	
第2学年 ILHA研修報告	63
小野 真弓	
(4)英進進学コース	
ILHA研修報告	72
熊坂 治平	
(5)秀光中等教育学校	
秀光16期生 第4学年NYSA2014実施報告	84
石田真理子	
第2学年(18期生)ILHA研修報告	93
阿部 広大	
(6)通信制課程	
広域通信制課程沖縄研修旅行	105
ILC青森 竹ノ子千春	

Ⅲ その他	
(1)日本・キューバ友好400周年交流事業	114
外国語コース	岩渕 奈央
Tフレックス	白岩 幸浩

編集後記

2016年3月 第31号

巻頭言	加藤 雄彦
-----	-------

トピック

創立110周年記念講演

国際人育成のための提言～ILHAの実践を通して	1
ILHA（校長）	アール・大川

I 研究報告

(1)数学同好会の活動	9
特別進学コース	佐藤 璽
(2)IB DP（国際バカロレア・ディプロマプログラム） に関する生徒の振り返り	14
外国語コース	ジェームズ・ドクターマン ケリー・ウィンター 高橋 郁夫
(3)3DCG ゲームソフト作成	27
情報科学コース	遠藤 誠 日野 彰

II 平成27年度 研修報告

(1)特別進学コース 関西校外研修旅行	32
	菅野 直幸
(2)情報科学コース 沖縄研修旅行報告	37
	山田 大
(3)外国語コース ハワイ研修報告	42
	石田真理子
(4)英進進学コース 沖縄研修報告	52
	北村 悦子
(5)フレックス・技能開発コース サッカー部女子沖縄遠征・交流会	66
	林田 茂
(6)秀光中等教育学校 NY研修報告	70
	本田 朋
ハワイ研修報告	77
	阿部 広大
(7)広域通信制課程 沖縄研修旅行	89
	ILC 青森 加藤 宏明
職場体験実習報告	98
	ILC 沖縄 照屋 恵美

III 東北地区私学教育研修・ブロック別指導者研修報告

(1)教育課程（私学教育）	111
	秀光中等教育学校 坂内 玲子

(2)生徒指導（私学教育）	114
	フレックスコース 白岩 幸浩
(3)進路指導（私学教育）	116
	秀光中等教育学校 倉橋 真司
(4)道德教育（ブロック別）	119
	フレックスコース 渡邊 章紀 秀光中等教育学校 小林 祐喜

編集後記

編 集 後 記

幼稚園教育要領、小学校・中学校の学習指導要領の改訂案が公表され、パブリックコメントの募集が始まりました。高等学校学習指導要領の改訂は来年度の予定ですが、大学入試制度の改善も含めた大きな改訂になります。

改訂作業に先立って行われた教育課程企画特別部会の「論点整理」冒頭には、いまの子どもたちが大人になる2030年ごろの社会が、グローバル化や情報化の進んだ知識基盤社会として描かれています。そして、そこで「生きる力」を身に付けたさせるためには、知識の習得だけではなく、主体的・対話的なアプローチによる深い学びが必要であるとして、指導方法の改善充実が強く求められています。

本研究紀要第31号の編集を担当された伊藤需先生が編集後記で書いていらっしゃったとおり、本校ではすでに「グローバル人材の育成」に関しても、「アクティブ・ラーニング」を取り入れた探究型の授業実践においても、「探究講座」や「国際バカロレア」の受講という形で実践しているところです。本号にもトピックとしてこれらの取り組みの報告をまとめていただきました。担当された先生方の取り組みに触発されて、私自身も遅ればせながらアクティブ・ラーニングへの理解を深めているところです。理論に比べて実践には複雑で精妙な感覚が要求されます。身近なところにある実践経験を生かして、かけがえのない生徒の未来のために力を尽くしたいところです。その糸口としてこの研究紀要をご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりますが、多忙な校務の合間を縫って、研究紀要に投稿していただいた方々に心から感謝申し上げます。

第32号 研究紀要編集担当 多賀 努

発 行：秀光中等教育学校・仙台育英学園高等学校

所在地：〒983－0045 宮城県仙台市宮城野区宮城野二丁目4－1

電 話：022－256－4141

研究紀要32号

巻 頭 言 加藤 雄彦

トピック

探究講座TTTチャレンジの成果 特別進学コース 神谷 章嗣
孔子課堂の可能性 外国語コース 鈴木 茂幸
国際バカロレア受講生徒の学術的論文 外国語コース 石田真理子

I 研究報告

- (1) 文芸部の活動について 特別進学コース 下田真奈美
(2) 英進進学コース英語科研究報告 英進進学コース 熊坂 治平
(3) 国際バカロレアと日本のカリキュラム：2つは両立できるのか
..... 秀光中等教育学校 ケリー・ウィンター
笠原 千尋
(4) IB生物におけるアクティブ・ラーニングの事例研究
..... 外国語コース ジェームス・ドクターマン
笠原 千尋

II 平成28年度 研修報告

- (1) 特別進学コース
関西校外研修旅行 齋藤 美咲
(2) 外国語コース
ハワイ研修報告 赤間 ゆき
(3) 英進進学コース
沖縄研修報告 佐々木正人
(4) フレックス・技能開発コース
沖縄研修旅行（フレックスコース女子） 杉田 愛
沖縄研修旅行（技能開発コース） 小野 仁也
(5) 秀光中等教育学校
NYSA 2016 実施報告 伊藤 沙絵
ハワイ研修報告 倉橋 真司
(6) 職員研修報告 多賀 努

III その他

- (1) 広域通信制課程ILC青森校の状況報告 ILC 青森所長 三笠 勝彦
(2) 職業調査とジョブミーティング
—12職種の職業に関する調査とその発表活動を通して—
..... 情報科学コース 志賀 貞昭
(3) 公文式学習（国語）実践の成果 フレックスコース 島倉 尚子

総目録（第1～31号）

編 集 後 記